

と言つた。

小八と言つて、この阿闍梨は、おなじ町内で、以前やすものの煙管を張るのを職とした、邪教に凝つた親仁であつた。

「澤山ぬかせ。——表具屋の倅が學士に化けて、近頃此地の學校へ雇はれて來せをると、人の風説に聞いたが、睫毛に集つた蟲は見えぬ。——ようこそ鼻のさきへ面を出いで、羅葶屋ぢやと吐したな。——これ、おのれの父親とは、もとくから宗旨での敵同士ぢや。羅葶屋でも仔細ない、お身が小學者に成る年數には、わいも山々、峰々の行を積んだぞ。——立去れ。町内の火伏の妨げぢや。その上に私がめす、食ものの邪魔をすると、爲めに成らぬ。これ、この女はな、わいが、この別嬪の母親からして、母娘二代に執着を掛けたお供物ぢや。早や筋も骨も萎いて、今夜にせまつて血肉を啖はうと思ふ處に、奇怪な蚊とんぼが舞込んだ。——立去れい。」

客は居直つて屹と見た。

渠は工學士、立川淳吉である。

「其の面構では失せ居るまいな。……よいく、姉まも、よう覚えて居れ。お辻。……芽生の學問如きで脈は分らぬ。人間の執着の行力を見せてくれう。覚えて居れ。たゞは置かぬぞ。——何を。」

ハタと擲つた提灯を、ハツと横に顔をかはすと、續け狀に、網代笠を取る手も見せず、お辻の横顔にたゞきつめた。笠は外れて帳場へ飛んで、一呼吸さきに、お辻は淳吉の足に縋るやうに、うつむけに椅子に踞つた。おくれ毛は白い頸に震へて居る。

「ふん、ふん、ふうん。」

黒疣を弾くが如く、ふかくと、ふやけた鼻を鳴し、團扇を片手に、杖を取つて戸に向いた、行者の袴は、さながら土間に獸の尾を曳く如く、吹込む雪が土間に吹敷く。

四

「まだ居ますわ、居ますんですよ。……あなた、何うしたら可いでせう。」

密と隙見をした表二階の白く成つた眩掛窓から、寒さと不氣味さに、お辻は肩をわななくと、奥——と言ふ程もない、裏へ向いた——六疊ばかり、炬燵の傍へ、爪立つやうにして引返した。

薄暗い電燈に、衣服の色もあせて、細い羽織の緋さへ雪にまみれたやうである。

「だんく何うも人間業ではなくなりましたよ。」

「え。」

と彌が上に引合せる、前褻、膝もがくくして、お辻は見るにもいぢらしい。「然うかと言つて、決して鬼だの、魔だのする事だぞと思つては不可ません。——獸の所業ですよ。」

と淳吉は、其の炬燵に嚙りつくやうにしながら言つた。が、言ふものの、既にこの炬燵には火を入れない。實は火のない炬燵なのである。火どころか、傍に火鉢もない。二階も下階も、凡そ家中に、火の氣と言ふものは、餘さず皆消して居るのである。寒國の吹雪の夜に、之は宛然狂人の爲す業。

が、岩膜阿闍梨の舉動を言つたら、はじめて頷かれようと思ふ。

あの行者は、前刻に腰障子を外に出ると同時に、あともしめないで、ぎよろりと白眼に毒を漲らして、見返り狀に、片足をバツと擧げ、膝を掛けたが、みしりと真中から太杖を挫折つた。

向側なる神社の裏垣の前に、其の杖を組違へて、さす又形に、ふり積む雪に突さすと、むすと腰を落して掛けて、お辻の店を眞正面に、澁團扇で、屋の棟をこきおろすやうに上から、ねだ柱を掬ふやうに下から、上下に煽ぎはじめたのである。

淳吉が、びつしやり腰障子を引くと、お辻はその上へ葺の樞戸をおろしたが。

風はすさび、雪はしきつて、時ならぬ熊、鯨のあれとも思ふ、眞夜中に成つても、聊も其處を

動かないで、いま、煽ぎ續けて居ると思はれよ。……

帳場の火鉢さへ、淳吉が指圖して、火種も残さないで消さした。土間に松明、篝火をも焚いて、邪惡の氣を打拂ふべき地位にある淳吉の此のたよりなさは。——

是非もない、節分の夜に續けて火沙汰のあつたと言ふ、其の二度までも、實は少年の折の淳吉の龜笏で、二度とも、二階の炬燵のために過失をしたのであつた。火伏のために、九ツの間に、九ツの燈明皿に火を配つて、其の燈心の火を守るのに部屋々々を廻つて、だゞ廣い臺所……廁までも、人すくなの佗しい折から、四年目の節分には、少年ながら責任を感じて、凄さと、可恐さと、心細さと、何よりも不氣味さに、ぼろ／＼涙を流したと言ふほどの弱蟲であるから。

と言ふのも、今は焼けて、もう影もないが、此の町々の窓を覗く、向う山の山の端に、三本松と稱へた松は、天狗の棲家と恐れられた。其の松の焚けたのは、春のたけなはな深夜であつたが。折から以前の家の此の二階に、病の床について居て、夜も寐られなかつた、淳吉の、まだうら若い母が、ほつと障子に映る炎の影を、誰より眞先に見て、眩掛窓に手を掛けると、目前に見える山の峰の、三幹の大松明の、火花を散らして燃ゆるのを見て、「あ、綺麗だ、綺麗だね。」と言つた。

火事だ。「あれ、大變。」と驚けば、恐れれば可かつたのである、——と除夜ごとの火沙汰を懸念

して、淳吉の父が、鬼神に通ずると稱へられた易者に占はせた時、易者が言った。——往昔から
もまゝある事、天狗の火とて眞個は燃えるのではない。不意に大なる炎を上げて、人の驚き恐る
るのを可笑がる、魔属の徒然の悪戯である。三本松の火も、實はそれであつた。……町において
最初に見たであらう淳吉の母の、「綺麗。」と言つた、思つたのが、おどすつもりの魔の心に背いて、
天狗は憤りをなした。腹だちまぎれに、眞に、その住家の三本松を焚いたのである、その祟だと、
易者が言つた。

誰に聞いたか、占つたか、事實は其の通りであつた。

但し火のたよりは、母のなくなつた翌年からはじまつたので、家の焚けたのは五年目であつた。
それ／＼の記憶のあるために、今度、縣の學校に聘せられて、着任したのはわづかに昨日の事
であるのに、故郷の可懐さに、そゞろ町へ出ると雪に逢つた。もとの中學校がよひを思出して、
故と合羽うる店で、菅笠や莫蔭の支度をした。その時、合羽屋の、臺所で、豆を煎る香いにほひ
に、今日の節分を知つた。

氣づかはるゝのは以前住んだ家のあたりの、火沙汰である。

いま住む人の人柄によつて、もし、言ふべくば、笑はるゝまでも迷信の注意をしよう、實は、
そのために故らに訪ねたのであるから、四辻の澁團扇の希有な形は、彼奴よりも淳吉の方が先に

氣に掛けたほどなのである。

第一、美しい人の心弱さに對する、暴言に反抗ふために、水は清し、冷し、潔しと言ひは言つ
た。けれども、井戸水の其實は、鐵氣よりも、むしろ薄く溝のにはひを帯びて、且つ濁つて居た。

これ、家のために相して、祝すべき事ではなかつたのである。焦慮は實に察すべきであつた。

「旦那さん、何うなりませう。」

「此のくらの用心をすれば大丈夫です。」

「行者は死にはしますまいか。」

と、おど／＼して言ふ。

「幾人も女房を病氣にして死なせた奴です。彼奴の死ぬのは勝手だけれど、絶間も、隙間もなく
煽いで居られるのは煩いですよ。」

「いくら其處等を閉めましても、ふう／＼風の來ますこと。」

既に表二階と言ふのが、——焚出されて、彌が上に不工面だつた淳吉の父が、半作事に、床を
張つたばかりで世を辭した。——あとの二代もそれなりで、疊はこの一間のほか今もつて敷いて

ない。

床板のあはせ目、すき間を、下の土間から吹き上げる風が、襖を突抜けて、みしりと梁が鳴る。團扇で拂はれるやうに身に應へる。芥子粒の火の粉でも、この煽に誘はれると忽ち一面の炎に成りさうで懸念に堪へない。

「天井裏で、パチ／＼音がしますが何でせう。」

「鼠。」

「あの、猫が騒ぎまして、此の四五日、ちつとも鼠は居りません。」

「漏電でもすると不可いなあ、然うだ、危い、早速お消しなさい。」

「眞暗で……」

「構ひませんとも。」

「旦那さん、矢張煽いで居ませうねえ。」

「仕方がない。たゞ夜のあけるまでの辛抱です。確乎なさいよ。」

「はい、……くらがりで、冷酒ですけど、もうお一つ。……」

「いや、酒は澤山、もう口に泥みました。……あ、煙草が喫みたい。——いゝえ、私はもの好きです。勝手に火の番をするんです。——先刻からも言ふ通り、恩にも被せられませんが、恩にも

被せません。あなたが氣を揉むには決して當らないが、煙草だけはのみたいですよ。」

「後生でございますから、めしあがつて。……煙草をめしあがるくらは、——あなた。」

「それが不可い。嘘にしる、火打石でさへ、天井から白いものが。……」

「あれ、可恐うございます。」

「燐寸ぢやこの風に、どんな怪我があらうも知れませんが。」

「私、何うしたら可うございませうね。」

お辻はもう、ひつたりと寄添つて居たのである。

「お腹もおすきで在らつしやいませうし……せめてお餅でも焚いてと思ひましても、それも出来ません。火のない炬燵におあて申して。——あれ、まあ、炬燵蒲團の上が、さら／＼しますのは、吹込んだ雪でございますよ。——何とも、何うもまるで地獄へお落し申したやうな。……私、私の身體で出来ます事なら……旦那様、さつき、あなたはお香々の淺漬の網がお氣に入りました。私の、私の身體を網の目に刻んでも、さしあげたう存じます。」

白い膚がちら／＼と、網の目のやうに、幻の暗に浮いて、袖の花の咲くのが見える。

「お辻さん。」

雪と雪と打つやうに、唇の觸れた音。

「いやな、お煙草——お煙草ですわ……お煙草ですわ。」
 「あなたの綺麗なのに迷いました。——餘り算盤じみるんですが、交番へ届けるのが、一番よく、化行者を防げたのかも知れません。……知つてしなかつたのではない、それさへ氣のつかないほどに、私は迷つたんです。お辻さん、あなたが、その窓を覗いたやうに、毎日、二階から憧憬れて居ながらも、わけあつて其の人の死に、身投げに行くのを、雪の降る晩、——十六七の少年ですから何うする事も出来なかつた。その時の娘さんに、あなたはそつくりなんです。——（今晩は。）（はい。）と言つて、その窓の、上と……下で、それが別れで……」
 と言つて聲もせまつた。
 しばらくすると、樞は水に浮くやうに靜に浮いて、腰障子が盗むやうに開いた。淳吉と、お辻の姿は、ふしまろんで戸口へ出た。いや、並んで立つて出たが、横吹の雪に吹廻されたために、然う見えたのである。
 二人は、家も、身も守るに堪へなかつた。
 且つ慥うするのが、のろひの澁團扇を防ぐに、最上の策であることに氣づいたからである。嫉ましいもののない空家をば煽ぐまい。何故早く心が着かなかつたであらう。
 行者の軀は、堆く成つて、眞白な瓦焼の竈が、口から火を吹くやうに澁團扇が渦に動いて居た。
 と風が空へ、火の手が上つた。
 颯と通抜けたが、しかし、同じ處に、同じやうに、煽ぐのが留まなかつたのである。
 大きな榎で坂が知れる。——二人が吹雪の峠を越したやうに、一坂、下町へ下りた時、どゞツと風が空へ、火の手が上つた。
 恰も酒店の家の眞上である。雪に籠つて擴がる火は、櫻が霞んだやうである。
 お辻は打たれたほどに、腰を落した。炎の影は、紅に膝にこぼれて、褌が雪を染めて美しい。
 吹取られた笠を手に取つて、女を庇つた淳吉の姿は、ちぎれる様に白かつた。
 失火の原因はわからない。
 心中をしたとか。行方が知れないとか聞く。——二人は若かつた。故郷の濕地の老蝦蟆が、冬眠ればとて、凍死などするものか。……樞をおろしたあとの或時間を経てからは、垣長く結んだ破團扇ばかりが、恣に吹雪に荒れ狂つて居たのであつた。

「いやな、お煙草——お煙草ですわ……お煙草ですわ。」
 「あなたの綺麗なのに迷いました。——餘り算盤じみるんですが、交番へ届けるのが、一番よく、化行者を防げたのかも知れません。……知つてしなかつたのではない、それさへ氣のつかないほどに、私は迷つたんです。お辻さん、あなたが、その窓を覗いたやうに、毎日、二階から憧憬れて居ながらも、わけあつて其の人の死に、身投げに行くのを、雪の降る晩、——十六七の少年ですから何うする事も出来なかつた。その時の娘さんに、あなたはそつくりなんです。——（今晩は。）（はい。）と言つて、その窓の、上と……下で、それが別れで……」
 と言つて聲もせまつた。
 しばらくすると、樞は水に浮くやうに靜に浮いて、腰障子が盗むやうに開いた。淳吉と、お辻の姿は、ふしまろんで戸口へ出た。いや、並んで立つて出たが、横吹の雪に吹廻されたために、然う見えたのである。
 二人は、家も、身も守るに堪へなかつた。
 且つ慥うするのが、のろひの澁團扇を防ぐに、最上の策であることに氣づいたからである。嫉ましいもののない空家をば煽ぐまい。何故早く心が着かなかつたであらう。
 行者の軀は、堆く成つて、眞白な瓦焼の竈が、口から火を吹くやうに澁團扇が渦に動いて居た。
 と風が空へ、火の手が上つた。
 颯と通抜けたが、しかし、同じ處に、同じやうに、煽ぐのが留まなかつたのである。
 大きな榎で坂が知れる。——二人が吹雪の峠を越したやうに、一坂、下町へ下りた時、どゞツと風が空へ、火の手が上つた。
 恰も酒店の家の眞上である。雪に籠つて擴がる火は、櫻が霞んだやうである。
 お辻は打たれたほどに、腰を落した。炎の影は、紅に膝にこぼれて、褌が雪を染めて美しい。
 吹取られた笠を手に取つて、女を庇つた淳吉の姿は、ちぎれる様に白かつた。
 失火の原因はわからない。
 心中をしたとか。行方が知れないとか聞く。——二人は若かつた。故郷の濕地の老蝦蟆が、冬眠ればとて、凍死などするものか。……樞をおろしたあとの或時間を経てからは、垣長く結んだ破團扇ばかりが、恣に吹雪に荒れ狂つて居たのであつた。

假
宅
話

新しい襖から、あどけない、上品な顔で、一寸まぶしさうに覗きながら框へ出た、——引詰の銀杏返も油氣のない埃だらけ、かすりの縮入の襟附に、めりんす友染の半幅帯、きぬてんの足袋と云ふ、煤拂の上被だけ唯今脱ぎましたやうな風を見ると、横町邊、此の土地で、看板といひ、姉さんといひ、名の聞えた元藤家のお取次らしい様子はない。いや、その取次ではない。かうした家の取次をする抱妓、雛妓、仕込とか言ふものらしくさへないほどに、引ツかぶつた姿だが、(あゝ、これが内の娘だ。)と、いま訪れた男には一目で分つた。

媚かしく褻を取つたり、品よく裾を曳いた、お母さんの風采には似る筈もないけれど、目鼻だちから、すらりとした脊恰好は、此の年ぐらゐの若い時の、その、お母さんにそっくりである。唯、框と土間で斜違ひに向合ふと、豫て聞く一人娘の秘藏だから、悪く下目づかひをしたり、額で人の顔を覗きなどするのではない。何の蟠もないやうに、ぼんやりと客を見て立つた。裾にこぼれた紅入の袴袴の端にも、年らしい色氣は見えないのである。

「お内かい……」

それでも、お母さんとは言はなかつた。

「姉さんは？」

「はあ、あの……」

「お留守。」

「いゝえ、あの……」

藝妓家を訪ねて、お取次が此の調子では、大概分る。——客は最う引返しさうにして、

「いや、些とも用事のないものです。……また重ねて……」

「誰方。」

と、こゝで軽く手を支いた。

「桑……」

と皆まで言はせず、

「分りました。——おほゝ。」

と、しとやかなものごしで、すぐ一重へだての襖を細目に、口許はかくしつつ、うつくしい鼻筋を斜に、三日月眉の凜とした目ばかりで差覗いた。色の白い頸脚が、無理なあがきの姿態ゆる、伸びるばかりにスツと長いのに、ちらりと搦んだのは、透通るやうな紅羽二重で、

「ほゝゝ、分つては居たんですが、こんな、うまい態だもんですから。」

と言ふうちに、掛けた手のおもみで、襖が泣つて、思はず露れた半身は、おなじ其の紅で、雪の二の腕をくびつたやうな筒袖の間着ばかりで居たのであつた。

これは、しどけなさを通越して、人丈の京人形を裸身にしたやうなのを、顔を見せながら、襖一枚に隠さうとは、忍術つかひでないと難かしい。……

桑——と言つた男は、すぐに見て取り、

「これは。」と口の裡で。……すり硝子の戸口の方へ片足を退いて言つた。

「お出掛けの處だね。」

時刻も丁どである。

「秋島さんへ、五時のお約束、……え、それだもんですから。」

そのまゝ襟を引合せて、

「まあ、一寸何うぞ。——こんなひどいバラックですが。」

「あなた、お上んなさいましな……さあ、あなた。」

と案内ぶりに、娘も立つた。

桑は左右猶豫つたらしかつたが、二人が襖へ隠れたので、潮時の暮方の、土間を、釣上げられた形に、ぼつんとして框へ上つて、

「でも、しかし、何だね、お邪魔をしますね。……實はね。……松江さん……」

「御免なさいましょ。」

と、姉さんの松江は、いまの冷かに燃ゆるやうな羽二重のなりで。——また居間から引返したのが、外套の肩と摺違つた。眞黒な水瓶に紅梅の影が映す風情で、框の三疊へ入交る。間着の襟の淺さにも、やゝ忙しい足の運びに、白脛の隠れたのは、友染のかくれ蓑、長襦袢を絞つて、萎して、腕に掛けて居たからである。

六疊の眞中へ、瀬戸ものの火鉢に、更紗形の座蒲團で、一寸見迎へて娘が招する。向つて、斜に、紙に格子を入れた芝居の書割のやうな小窓の下に、小さな鏡臺が据つて、一隅を取つた戸棚の前に、出来あひの長火鉢が置いてある。

松江の氣勢が、みどりを籠めて、薄紅に映るやうな、框の三疊の片隅へ、桑は外套を丸げて押した。

「飛んだお騒がせをして、濟まないね。」

「いゝえ、些とも構ひません。でも餘り失禮で。」

「すぐに(村咲)からと思つたんだけど、此方の都合が何うだか知ら。……此の頃は復興で、大分忙しいと聞いたから、お前さんが来てくれないと少々困る事がある。——太くお腹が空いて居

るんです。待合へ行つて、いきなり御飯でもあるまいし、また御飯にした處で、生意氣に一人で食へるのもさみしいし……此方で、お約束でもあつて手間が取れるやうだつたら、鳥屋か、何か、一度底を入れて置いて、それから出掛けようと思つてね。一寸覗きに來たんだがね。」

「結構ですわ……紐はそつちのを。」

と、娘に低聲で、

「此の頃は、あなた、料理屋さんが何處でも嚴格になりましたね、三時間かつきり貰へません。……ですが、八時前には伺ひます。……あなた餘程……お腹がすいて在らつしやいますか。」

「あゝ、餘程すいて居ますよ。」

けはひに振り返ると、覗いた顔が微笑んだが、

「まあ、お火がないぢやあないか、絹ちゃん、——一寸、あちらへ何んなさいよ。御免かうむつて。」

黙つて、笑ひながら娘が來て、長火鉢の前へ、また蒲團を直して、

「何うぞ。」

と、軽く顔を傾けた。

「些と其處へは差出たやうだが、——では推參をしようかね。」

蒲團も薄い。……座につくのが落ち込むやうに床も薄い。火も薄い。灰も薄い。五徳の影が黒く映る、底も薄いのに、ふと觸ると、鐵瓶の膚は冷くつて、肩の上の戸棚の隙間から、生壁のにはひとともに、二月の寒い風がぞつと身に沁みる。耳許に岩を打ち、石を切るやうな、鐵鎚の音、手斧の響が、暮方を又一しきり、トンカントンカントンと牙返ると、木を起す音、寝かす音、臼を、投げるやうな響きが交つて、づしん、どしんと鳴るたびに、眞新しさも、白く薄い、床も、羽目も、障子も、襖も、ぶるくと揺れ渡る。——炎のやんだ灰の山に、此の薄い家は、たゞ柱を纏にした船である。

男は惻然として四邊を視た。

あゝ、數へて、ものの一年はまだ経たない。——横町に此家一軒、朋輩たちが「衣裳藏」と呼んだ、小ぢんまりとした土藏を門に控へて、しもたやのやうに取り靜めた、千本格子の土間深い奥の居住には、さながら錦繪を散らしたやうに、娘分も、かゝへも雛妓も居たものだが、今めかしく言ふまでの事もない、九月一日の宵、唯一時に灰となつた。——うはさの出た村咲と言ふ——町が背中合せに成る——土地の草分で、埃も塵もこぼれ萩、電燈の影も月あかりのやうに奥床しかつた待合の、おとなしい女房が、地震の日の家を守つて、藏の前の茶の間に籠つて、丁度此の

元藤家の二階の窓から火を噴出したのを視て、もうお了ひだ、と水を一杯、長煙管で一服吸つて、煙管を置くと、靜に立退いた、と言ふのを、——桑は、のちに訪ねて來た、おなじうちの女中に聞いた。

とばかりで、皆がちり／＼ばら／＼だから、當時は誰の行方も分らず、勿論、松江の消息も絶えた。……何の中で、ないまでも、十五六年來の馴染である。

四谷の方の山の手から、前に、はじめて界限を訪ねたのは、十月も、もう半ば過ぎ、電車の築地行きと思つたのが、日比谷から一なぐれに仙女香の邊まで焼原を持つて行かれた時は、大袈裟でも何でもない。見知らぬ島へ放たれた氣がした。風に、日の朱の色旗の南の天に高く翻るのを、あれは朝日新聞と、路傍の人の指すのを聞くと、濛々たる砂煙の中に、大煉瓦の青く顯れたのを見て、やがて、銀座の空の方角を思つたのであつた。

二時さがり眞日中である。日本橋の大通を行くのが、風に吹きまくらる、野中の開帳場の小屋掛を通るやうで、ふかし芋と草鞋を賣る乾店のうらの焼あとに、圓鬚の御新姐風の、色白な婦の、鹽で行水をする姿が、戸で圍ひつつも露呈であつた。

赤い雲が其の空を浮いて行く……

どれが何處の町だか、辻だか、一時寫眞によく出た、薇蕨を黒く束ねたやうな、あの、鐵骨の

あとを見るまでは、途に迷つて見當が着かなかつた。

杖なしには行き悩む……西中通、大工町、檜もの町邊、三味線の三筋の巷は、一面に焼瓦と壁と泥の丘に成り、土手を築き、崖に窪んだ、其の間を、颯つて縫つて、赤く亂れた細露地は鼓を壊したやうであつた。

思ひも掛けず清水が湧く。焼灰の中から、挫けながら水道の鐵管が覗くのである。中に小さな池を湛へて、一處さら／＼と松葉の波紋の寄るのがあつた。これに何となくイまれた。手に掬ふと、ほんのり白粉の匂がして、溝板をあゆみに投げた丸木橋に、ぬけ毛も櫛も可哀であつた。

こゝを行つて、恚う入つて、たしか、此の邊と思ふ元藤家の焼あとに、硝子の缺は光つたが、錦の帯の灰もない。尤も時経つて、雨も風も幾通りか通つた。立退さきの立札の見えないのは其筈である。切組んだ柱、積んだ木は、ばら／＼に散つて見えながら、また、大工の影も少なくなつた。一軒、さいはひに、周圍が建ち、トタンが載つた假宅に、おもて四枚の硝子戸を半ば開けた、……土間に鉋屑の散らばつたのが、ばら／＼と風に亂る、中に婦が一人向うむきで、棧敷裏に憩ふやうに腰を掛けて居るのが見えた。「御免下さい。」こんな中で、藝妓家のたよりを聞くほど、氣の怯ける事はない。「少々伺ひたいんですが、御近所に、たしかお隣だつたと思ひますが。」「はい、おやまあ……桑さん。」「やあ、お仙さん。」「まあ、あなた御無事で。」「お前さんも無事で可

かつた。「おかげ様で、……あなた、松江さんを、おたづね下さつたのね。……あの人も無事ですよ。」と唇がしまると、聲が濕んで、ほろりとして、「御安心なさいまし。……でも、もう皆散散よ。——此の通りさ、あなた。——まあ、お掛けなさいまし、此方へ。……私の家ぢやないんですかね。——お葉さん。「あいよ。」と此の假宅のあるじ、おなじなままで、色の浅黒いすつきりしたのが、引掛け帯の姉さんかぶりで働いて居た、手拭をはらひながら、框へ買ひたての可憐く綿の厚い座蒲團を敷いてくれたのに、腰をおろすと、傍のすんどの火鉢が、また脊が高く灰が其の……焼あとで灰が少いは可笑いが、客商賣で此は綺麗にならしたから底の方に沈んで居るので、煙草をつけるのに、覗込むのも、やるせがない。「此方はね、當分、てんぷら屋をなさるんですから、ちとお通りがかりに。……すぐ明日が店開きで。」とお仙が言ふと、「此の體裁で、いゝ氣なもんでせう。弟が河岸に居ますから、魚は請合ひますが。料理方は私ですから、その思召しで御最真に。「お前さん、うまくあがつたかい。「あゝ、お午に揚げて見たよ。……お前さんの饅頭のやうなものぢやあないやね。「おや、憚り。」と言つて笑つた。お仙は以前、吉原の仲の町に居た。二十ばかりの若い時、いろが出来て、無理に引いて、苦勞して、馬道で小饅頭を蒸して賣つた。うどん粉が一つもかへらないで、義理で買つたものは皆腹を瀉したと言ふのである。桑は煙草をつけて吻とした、が目のさきに堆い焼砂を捲きつつ、河岸へ哄と吹き通る、黄に赤

い土煙は、それなり神田を突抜けに九段下まで大波を打つて凄じい。唯一息吹静まると、たとへに言ふも憚るけれど、箱根の大地獄を箕で打覆けたやうに見える、假宅の端居は巖端の孤屋に憩つた氣がした。大通りの電車、自動車も湯の湧く音に轟いて、響く手斧は鋸である。「夢のやうだね。「全くよ、あなた。」と向直つた、お仙の姿のかはりやう、氣も八端の不斷帯、縮緬育ちの姉さんが、紡績の黒緋に、背負あげの紫、色はあせて、更紗の帯もめりんすらしい。肩を引いて、お仙は軽く胸を叩いた。「此の體です。夏の盛に此處らは餘計暑いでせう。私なぞ、手拭浴衣を着た切で遁げましたよ。」とお葉は茶を汲んで差置いた。「でも此方はじめ、私たち、白装束で、日本橋の橋ばしに立つ氣です。あつち、こつち、おともだちを捜しあひましてね、……はじめで顔を見ると、誰でも、ついうれしさに、そつと莞爾するあとから、ほろ／＼と皆——お葉さんや、仙ちゃん、松江さん——と一度名を呼合つちやあ泣くんですよ。……あゝ、肝心あなたが、おたづねの松江さんも、あんな、かうとうな人ですが、白装束の勢です。歸つて來ます。うちも矢張り此の隣家へ建てます。……實は昨日逢ひました。……一旦目黒の方へ遁げましてね。静岡に堅氣のいとこさんがあつて、其處へ引取られて行きなすつたが、昨日の話で復興に極まりました。勿論、一度歸つたんですが、もうやがて四五日うちに來るでせう。随分大變な目に逢ひなすつたね、——松江さん許ぢやあ、いきなり入口の衣裳藏が崩れたから、若い妓なんぞ町内のかしらが

出窓から裏口へ抱出したほどだつたんです——そこへ掛けちやあ私なんか身軽だけれど、それでもどうも。「何うして……何處へ遁げたんだね。」船で鍛冶橋へ遁げるものもあるし、富士子ちやんなんか其の方です。包を抱へて青く成つて、河岸を駈出すのもありますね。仲通りの道の真中にづらりと並んで、洋傘をさして、ラムネをのんで、三味線と、鼓を並べて、お花見だなんて真赤になつて、言つてるのもあるかと思へば、お櫃一つ前に置いて、毛布に坐つて、拜んでる人もありますね——私は何しろ、目の悪い老女を控へて居ますから、莫塵一枚、老女の手を曳いて、抱妓さんが三味線を持つて呉服橋を通じたんですがね。……何うでせう、あの廣い橋の上が、渦を捲いて、兩方の欄干へ、半分づゝ人の身體が横に湧上つて噴溢れて居たぢやありませんか。——渡つた處の土手の傍に、材木が積んでありました。……その材木にさ、お前さん——少々此處を拜借つて、何をとつちたんだかお辭儀をしてさ、莫塵を敷いて老女を坐らせて、さあ一息と思ふと、何處からか、大な火の粉がばら／＼落ちて來るんだもの。もう何うしようと思つて居る處へ客のない自動車が一臺、桿の折れた船見たいで、ふら／＼と泳いで行きます。——運轉手さん後生ですから、盲の婆を助けると思召して——まあね、いひ種は可厭だけど、……抱妓さんが然う言つて手を合せて拜んだのが利いて、お乗んなさいさ、お前さん——何でも構はず、往來の人が此の自動車へ乗上つたり、推込んだりするのに、また此の盲の婆がどのくらゐ御利益があつた

か知れませんか——盲の婆さんが、然うか、と言つて、下りもすれば通してもくれたんですよ。それでもね、日比谷へ行くまでは眞晝間、平家の波がかぶつたやうに、車のまはりへぶら下つたり、攀上つたり、窓へ首を突込んだり。どかつと、それが、日比谷の處で、人間の雪崩のやうに離れて落ちましてね。吻と自分たちの身體になつたんですが、車は、私の伯父のうちの澁谷へ向けて馳つたんです。處がさ、——その抱妓さんが、何うしたんだか、窓から顔を出して、肩へ附着けるやうにして、運轉手の背中を敲いて、貴方は神様だ、佛様だ、救世主だ、アーメンなんて言出したぢやないの。……何うでせう、まるで夢中の様子でね。實に俠氣だよ、俠だよ、消防夫だよ、め組の喧嘩だわ。江戸兒だわ。こんな中で私たちを助けて下さるんだもの、ないわ、とても、探したつてないわ。お幾つでせう、まだおわかいのに、粹よ、ちやき／＼よ、花川戸の何代目でせう、なんのつて、のべつ幕なし。……餘りなお世辭だから、聞いて居るものはらく／＼する。運轉手が腹を立てやしないかと、盲の老女は氣を揉んで、私の袖を引張るんでせう。袖を引張つたつて、背中を突いたつて、氣が上ずつて、分りやしません。お禮を言ふわ、禮拜をするわ、時時黄色な聲を出して、大賛成、なんて喚くんでせう。のべつ幕なし、何うでせう、日比谷を出てから青山の終點あたりまで、息もつかずさ、お前さん、洒落や串戯でない證據には、顔が青ざめて目が血走つて、唇がひつつつて、其で片時も饒舌りやまない、弱りましたよ、何うもね。——」

黙つて、そつと入つて、土間に踏んで、お仙を拜んだ若い妓がある。「姉さん、何うぞ、何うぞ、もう。」「此の妓さ、桑さん。」——「いまは覺えて居ませんわ。」弱い聲して、「もう堪忍して、姉さん。」「おや、誰も叱言を言やしないよ。」「極が悪うござんすわ。少し氣が何うかして居たんです。……運轉手さんの心意氣が嬉しかつたもんですから。」と言ふ。「心意氣と言へばね、桑さんや、……それで居て、お賃を取らうと言はないんです。何うしても要らないと言ふのを、まあ、無理に、心持ばかり推つておいてね。」「姉さん、判を。」と小さな包を。「あ、水道の届けは済んだかい。」桑は茫然として聞いて居た。「お仙さんの許も、もう直きかね。」「さいはひ、伯父が大工だもんですから、建てるばかりにして持つて来るつもりで、澁谷で切組んで居るんですよ。——まるで社會が違ふでせう。来る人の取次なんか、畏つて、入らつしやいまし、なんて言はうもんなら、先方で、よつと言つて吃驚さ。精々、おう、來や、上んななんか、勉強して、出來合の小姉えで居ますがね。朝の早いのと、お汁の辛いのは弱るんです。別して當節の事だから、あけ三時半、もう井戸端さ、お前さん、煮立つたお汁にうっかり口をつけようもんなら、ほうほう、悪くひよつとこに成りさうよ。」「あ、安値なもんでも驕らうかね。」「い、え、今日は然うしては居られませんが。」と軽く棲さを組んで言つた。「では、いづれ、私も、失禮しよう。」「あ、あなた、まあ、ご緩り。——晩の掃除ではありません。こんな處でも、奥へお通し申さう

と思ひますのに、餘り塵埃が酷うござんすから。」とお葉が箒の手を止めた。「氣になすつちや可厭ですよ。」「飛んでもない、何事も此際です。すべて、バラックで結構ですよ。」「ざつくばらんを、以來バラックと言ひませうかね、——ほんとにね……松江さんが聞いたら喜ぶでせう……屹とお宅へも伺ひますよ。」「いや、そんな大した客ぢやない。……家は焼けなかつたが、御同然にバラックさね。」聲を揃へて、「お近いうち。」桑は洋杖を漕ぐやうに取つて、煉瓦の露地を河岸へ、ふら／＼と辿つて出た。

「お隣家は繁昌しますか。」

「めしあがりしたいの。」

と裙を曳いて、帯とけひろげの、朱のさや形の長襦袢を踏みくゞんで、白足袋ですつと松江が入つた。

娘が袖の傍を向うへ潛つて、窓下の姿見の蔽を拂ふと、その、お絹と、面影もあはせかゞみに、伏目に見据ゑて、ふつくりとおとなしく顔で一才撓めて、する／＼と一枚小袖の衣紋を合せ、ぐいと抜いて、軽く襟を抜いた手に、すぐ下じめをきり、としめつつ、

「——待合さんをなさいますので、あの通り、夜を掛けて御普請中で、もう天麩羅屋さんは休業なんですすよ。」

「然う、——いや、まさか、此處で、てん井は食ひはしない。そんなに地まはりには馴れないから。」

「些と御勉強なさいましな。——あ、い、よ。」

と、娘が當てた帯をまはして、お太鼓にしゃんとしめて、一寸帯腰にあがきを取ると、具が、パチンと鳴つた。

切火を打つた、潔い音である。

長火鉢の前へ、端然と坐つて、

「失禮をいたしました。」

頸脚の又白さ……銀杏返も艶を増した。こゝは一服と言ふ處を、煙草を喫まぬも人がらである。時に、向合つて顔を見た。桑の目を遣る方へ、松江も連れて——早や薄暗い欄間の方へ頭を向けた。焼けない以前の此の見當に、もう一昨年なくなつたが、旦那なる人の寫眞が掛つて居たのである。

それも焼けたか、今はない。

「何となく、晩方はさみしいね。」

「え、つい無人だもんですから、あの娘がさみしがりましたね。」

「あなた、些とお遊びに。」

と、脱ぎかへを疊みながら、娘が罪のない目でぼつちり見た。

「震災當時にね、あなた、まだ一度もお目にもかゝりませんのに——焼出されました時はあの娘が、何なんですよ。——あなたの處へおたより申さうと言つたんですよ。」

桑は思はず、胸が切つた。

「心だけでも嬉しいな——來ればいゝのに。」

「ですが、」

と一寸下ぶせに目を外した。

「あ、唯今お茶を——」

「いや、時間だ。——さあお出掛け。……家業が肝心だから。」

「御飯は？」

「どうにか我慢が出来さうだ、村咲へすぐ行きます。」

「ぢやあ、然うして下さいましな。一口めしあがつて下されば、三時間たらず、おきたちますから。……精々時間を切詰めます。」

「それぢやあお約束の方が迷惑だ。大丈夫待つて居ます——然やうなら。」

「あれ、気が早い、お待ちなさいまし、御一所に、其處まで……」

「あゝ、然う——秋島はおなじ見當だつけ。」

門口を衝と出ると、溝の溢れで、溝板が浮いて、足が留つた。

「姉さん。——」

と娘が呼ぶ。

松江は駒下駄を穿いた處。

「お母さんとお言ひ——此方は大事なんだよ。」

「えゝ、お母さん——早くね、早く歸つてね。」

「何だね、お絹。」

「だつて、私、さみしいんですもの。」

「あいよ——ねんねえで困つちまひます。」

「……………」

「足場が悪いんですから、お氣をつけなすつて……」

「……………」

桑は黙つて、うつむいて辿つた。

傍へ並びもせず、二三尺内端にさがつて、お端折りながら、すら／＼と、梅のかをりの衣の音。

「……………」のちほど。

横町へすつと切れる。

「や、もう来たか。」

焼あとは、大分の町並が、つい目の前で、辻に打撞つたやうに驚いて分れたが。——（一度も、

お目にかゝりませんのに——焼出されました時は、あの娘が……あなたの處へお頼り申さうと、

……桑はしみ／＼と思の胸に繰返した。——

（お母さん、早く歸つてね、あたし、さみしいんですもの。）更に身に沁みて繰返した。

ぶつかり放題、角の煎餅屋で、煎餅をめちやくちやに買つて、大きな包みを、風呂敷もなしに

引かへて、つか／＼と元藤家の門へ引返した。

お絹の起居の影法師を、臺所に透して、廂合を裏へ廻ると、母さんの手だすけに、此の裏口を

店にして、娘がお煮染を拵へて賣つて居る。近所の女中の買手が一人。——天鵝絨の足袋で立働

らいて、鉢に装つて渡すのを待つて、入かはつて、桑は樹のやうにすつくり立つた。

「お絹ちゃん——」

あはれ、逢初めてから十幾年、力のないのを憚つて、口へは出さない、思ひ戀ふる一念が、松

江の乳を通つて、娘の血には徹つたのである。

しばらく言葉が途絶えたが、

「ありがたう、私は絹ちゃんに禮を言ふ。」

と、娘の顔を熟と視た。

お絹は鬢を撫でて莞爾した。

きん 稻

「おもてに案内がある、案内とは誰ぞ。——」洒落て抜からない男だと、「いや、それがしてござる。」とでも言ひさうな處だが、何うした用事か知らないが、眞晝間、檜物町の藝妓家を訪ねたのが——聞かない振をなさい——實は私……だから苦笑ひをして突立つた。

取次ぎに出たのは渾名を河童と云ふ、雛妓から一本に成りたてのお俠で、自分の好きだか、誰かの註文だか、藤間へ通ふ隙に、大藏流を嚙つて、清水、伯母ケ酒どころ二三番覺えたのが、(ざんざんと鳴るはの、よしの葉のよい女郎)……と、姉さんの名が芳乃だから、一寸叱言が出さうだが、出ると、(その、女郎ではござんせんよう。)と唇を翻しさうな狂言諺で、小舞の稽古をやつて居た處へ、「今日は、」が打撞つた次第である。「これは楨どの、あなたなれば、案内におよびませうか、つゝとお通りはなされいで。」と圓い目をして額で笑つて、素の眞顔で、「何う……ぞ。」と言ふ。「何うぞはい、が、内なのかい。」然やうでござる、頼うだものは、今日山一つあなたへ寺詣をいたしてござる。「留守か。」「い、え、——知つててよ。すぐ歸るわ。……然う言つて出掛けたのよ、おきですわ。」取つてくれた火鉢ほどの陽氣ではなかつたが、引寄せて煙草を吹かして、「河童子、あひかはらず化けるなあ。」「知らなくつてよ。」「皆は?」「え、お稽古だの、お

湯だの。」「これは。」と私は小指を出した。

藝妓家で、内證で聞くのに小指はをかしい。が、此はもう妙齡に成つた——芳乃の實の娘がある……姉さんがきちやうめんな處へ、また内氣で、一人では西河岸の地藏様の縁日にも出ないほどだと、豫て聞く。……まだ見た事のないのであるが、然うした堅氣だけに此のおとづれば、何となく、其の娘に顔を見られるやうで、きまりの悪い思ひがした。——昨夜だつけ——四五人で一座の時、何が緒だつたか、深川の「きん稻」の話が出て、一度是非と姉さんが言ふのに、友だちは皆品行方正だし、いそがしいから、私が其の選に當つて、で、今日の約束をしたのであつたが、——河童は、眞仰向に二階を見上げて、「おごうは此でござる。」と忽ち俯向いて手で針の運びの眞似をする。「感心だなあ、ちと見習へよ。」「さうは化け切れなくつてよ。」「此奴。」「おほ、。」とついと立つ。——いさ、か通力があるくらゐ敏捷いから、奥が可なり深い所へ、靜にいた格子の音。私には一寸分らなかつたのを——すぐ聞きつけて出迎へた。姉さんが歸つたのである。「入つしやい——向うの角を曲りますと、あなたが横町へお入んなさるのを遠くから見ましたんですよ。」急いだかして、軽い上氣。火鉢の横へ膝をついたのが、次の室に茶を淹れて入る河童の方へ……澄した目遣ひながら、何だか氣がさしたやうに瞳を返して、伏目に指を反して、たけなが指の白く撓ふのを一寸見て、片手で縞大島の羽織の襟を抜いて、「すぐお供をしますから。」と障子の

しまつた縁の傍の、鏡臺の方へ、斜に肩を反して横向に成つた様子は、かう何だか悠揚として、如何なる時でも、しつとり落着のある座敷のとりなりとは急に違つて、三十を越した姉さんにも、娘の頃が偲ばれた。こんな男の入込む家風でないのが察しられる。……馴れないから河童に對して、やゝ含羞んだものらしい。と、座にもよく着かないで、「一寸。」と次の室へ、それなりすぐ立つて、茶を出して引退る河童の背中へ、恠りかゝるやうにした姿。脊がすらりとして居るから、奴が化けて出た顛の上へ、袖の柳が靡いたやうで、「萬年堂へ行つて、ね、あ、……急ぐんだよ。」構つちやあ困ります、それに、とに角一杯と言ふ處だから、甘いものは……。「いつかおいしいとお言ひなすつた、鯨羊羹があれば可うございますが——少し時節が過ぎましたから。いゝえ、お相伴に……今日は、佛様にも。」と、箆の前へスツと行く。

承塵の壁に、引伸しの寫眞が金の額縁で掛つて居る。……年配は……だが、父さんにしては當世過ぎる。勿論、亡く成つたと聞く旦那である。王面はわるくても、こゝは作者だ。書く方の融通はつく。でつぶり肥つて、膏切つたとやりたいが、然うは行かないから黙つて置く。第一、私より年紀が少い。——「……だね。」と片膝を立てて、見るやうに見ないやうに、其方の頬邊へ平手を當てると、姉さんは、はめ込の對の箆筒に並んだ衣桁に手を掛け、肩で脱ぎがまへの羽織の紐をいぢりさまに、ほんのりと暎を染めて、「姉の日ですよ。」横を向いて、「ありがたい。」とうつ

かり言つて、ぎよつとして茶を飲んで。「お寺は？」「深川なんですよ。」「それだと二さいに成るね。」「いゝえ、結構です。……ひどい埃です。」と脱いだのを衣桁に掛けて、「一寸、失禮を、撫つけますから。」で、向うむきに鏡臺の蔽を拂つた。早い處、膝だけついて少しうかした、帯腰がきり、とする。八口がしまつて、内では何處か所帯じみて見える處が、藝妓と言ふより、年増のお師匠さんの風采がある。「六すが」と書いた札の、横櫛子の柱に掛つたのは、何とか店とか、町とかの名とりだらうが、長唄より、其の、踊のお師匠さんの風采がある。

かた／＼かたと土間が鳴つて、「急いでござる……たのうだ人。」と言ひかけて、わるく黙つて、急に寂然して、茶棚の鉢を取出す音。「あつたかい。」「あの……」「いま行くから。」で羽織を小濱の黒の紋に着換へて、其茶の間へ出て、「然、う……生憎だつたね……あなた、お目に掛けますばかり。」これは頂かないと、わけ知りの友だちに叱られる。私は烏羽玉を半分食べた。——あ、甘い。姉さんは木皿に取つて、佛壇に備へた。遠慮ではあるまい、額の中のは酒だらう。一寸拜んで、その綺麗な指に、鏡臺の抽斗から、つき膝で、紅玉の指環を取つて通した。「お待遠様でございまして。」「行つていらつしやい。」「たのむよ、留守を。」「其の段な、ちつともおきづかひなされませんな。」ドボンといふやうに奥へ飛込む。まだ戸を出ない前である。

戸外の日は眩しかつた。——姉さんは町内を抜けるまでは涼傘をささないで、すこし退つてあ

とについた。それなのに、眩しいのに、私は何故か柳の影を行くやうな気がした。そして、其の影に、半襟と背負上げの色が淡く映つて、しつとりと肩にかゝる思がして、胸に何となく小唄がきこえた。

たゞし此の邊兩側は、日中取澄して、静まりかへつて、稽古三味線の音も漏さない。

電車は洲崎行を呉服橋で待つた。が、見る／＼うちに人間の埃と成つて、……砂煙に動揺むばかりで、乗れさうな様子はない。

その人垣に、惱んだ卵の花のやうなのが少し寄つて、「自動車にしませうか。」「成程。」私はぎくりと胸に應へた。藝妓を誘ふのに自動車を心得ないのは不覺であつた。「何處か此處等に。」「知つて居ます。」すぐ右側の横町を入つた處に組立てたやうな構の店がある。姉さんが其處へ立つと、艶かな黒塗のが、ぐうつと土間を動いて、勾配を下りるやうに、傾いてづんと据る。

「永代を眞直に——」何うかすると、何處かの内室には見えても、藝妓らしくはないのだから、其の段は仔細ない。が、あの、雑沓の中である。馴れない私は、唯はら／＼して殆ど口も利けなかつた。驚いた事には、激しい人ごみは八幡様の前まで續く。——覚えて近い頃までは、もう永代を越すと、汐時でなければ、いかに込んでも入江に水鳥の群れたやうな景色だつたものである。「その邊、その邊だよ。」姉さんがちゃんと用意した祝儀を渡した。「いくらだい。」「いゝえ。」とお

さへて、「檜もの町の……分りましたか。」附添が「存じて居ります。」自動車の揺据つたのが、またけた、ましく湧上るやうな音を立てて居る傍へ姉さんは静に立つた。その爾く靜なるにつけて、私は少々心が焦つた。汐見橋——を前にして、細々とした露地を二つ三つ覗かないと、裏通りに、殆ど水と水に圍まれた……また其が風情の、きん稻の場所が、澄して、ついでは知れにくかつたからである。「一寸、お待なさいよ。」前へ、しるべの露地を見ようとして出かゝつた時である。自動車はまだけた、ましく鳴つて居る。ト私たちが立つた空を、片側などは二階家までもない、屋根上の低い處を、赤い底をスツと蹴して、一機の飛行機が、その腹に、凡そ自動車ぐるみ前後の往來、八九十人一息に呑んで泳ぐ様に通つた。不思議に音がしない。同時に水の町も、青い空も、颯と雲と煙とで灰色に暗くなつた。私はトボンとした。不意に目の上を泳いだ赤い船である、中から落された様でもあり、あはや吸上げられさうでもある。——驚いたと言ふよりも押魂消たと言ふ方が顔色にも似合つて可い。と思ふ／＼、海手南の天へ斜に遠く霞んで行く。振返ると涼傘をついて一人路傍にゐんだ芳乃の姿が、武藏野の果のあしの一本に似て寂しく見えた。——何故だらう。……「八幡様から先方は初めてです。」そのくらゐな話は車の上でした。少くとも、此の時は、たゞ導かれなければ成らない私に一寸離れた間の心細さであらうも知れない。が、私は又、うっかりすると、その、空の船が、水際の立つた、あの棲から、根こぎに宙へ引攫つて行き

さうな気がしたのである。否、唯姉さんばかりではない。此の不意に顯れた空を漕ぐ赤い船は、江戸のむかしの面影を半ば其のまゝの、もとの深川を、包んで飛んだやうな気がした。

雛妓の太郎冠者などは實はどうでも可い。私は此の心を言ひたいのである。……また不思議に、何う云ふ氣、何の考もなしに、其の日も、それから後も、此の飛行機の事については、一言も話の觸れなかつたのも、思へば希有である。姉さんも言はなければ、私も言はない、言はうと思つても逢ふとともに忘れた。

何しろ、妙に、これがために心持が顛動した。きん稲は材木堀に浮いて、座敷が中二階のやうに水に臨む。水から水、水から水へ入込んだ内堀だから、浸した材木は、時に微に動いても、筏も漕がなければ船は來ない。前後にも、此の時とも、五六たびは行つたであらうが、中で唯一度、いなせな半纏着が、角材をぐるぐると、さゞなみに乗つたのを見たばかりである。其の棹は水とともに眞青であつた。——と言ふ家なのであるから、窓を隔て、小縁を越し、欄干に水を挾んで、こゝに見る美人の風情は類がない。——よそで見る美人は、たとへば錦繪のやうであるとする……こゝで見るのは、錦繪が活きるのである。

めづらしく、國貞の繪そのまゝな、姉さんと、こゝに二時を相對したかつたのが、心持であつた。——第一、遠出の謝儀なしに、誘き出して、深切ではあるが、高價くはない御馳走で、いま

時錦繪に魂など云ふ……然うした不了簡だから打壞れたのに無理はない。

空の船は、繪の魂を人間に返した。従つて浮世離れた水の寮に於ける其の日の話も、偏に物價高値の共鳴であつたに過ぎない。——水馬を視めて、蛙を聞いた。

見得のない姉さんは、折を提げた。

「あら、お珍しい。」汐見橋へ出る、電車の處で、いま其處へ下りた圓鬚の若いのが聲を掛けた。私は微醉の勢で、つか／＼と寄つた。「まあ、どちらへ。」「儲口を捜して居るんだよ。」「あんなことを言つて——お寄んなさいな。」「いや、いづれ。」「——意氣なおかみさんですな、どちら？……」暮迫る人ごみの寄せつ返しつ亂る、中で、姉さんが聞いた。「引手茶屋の——あれは娘だよ。」「場所ですわね。」と感心したやうに言つた切。で、「御遠慮なく。」とか何とか一寸こだはりがある寸法はいゝのだが、姉さんのは、唯當日の夕刊記事を一寸覗いたと言ふ様子である。——安心をなさい、きん稲の場面に色氣のない事は此で知れよう。

その年十月の下旬である。薄ら寒いから羽織を引掛けて、まだあかるかつたが、暮方の所在なさに、戸外へ出た——今日は、おとなりの番かな。ちぎ辻の角の夜警小屋の張出しを覗いて、ぼんやりと立つと、ふと人通の途絶えた町を、麴町の大通の方から——もう其處に近く來た、黒犬

が一疋ちよろ／＼とうしろに、夕霧の薄い中に、ほの白い瓜核顔と、霧に包まれたやうな姿を見た。私はあつと言つた、「おすがさん。」思はず實の名を呼んで衝と寄つた。——大地震、大火のうちに、はじめて逢つた其の人であつた。ダイヤも紅玉もなしに、めんねるの單衣に、琉球がすりの中古なのを、胸を細りと、瘦せて居た。

顔を今見合せてトタンである。飛行機が一臺、小さく一つ星の空を飛んだ。辻の小屋に木の葉が落ちた。

私はゾツとした。……焼野原でなしに、遠い水から雲を傳つて、空から下りて來たもののやうに見えたからである。

其の晩、うちの茶の間で話が出たが、汐見橋の飛行機を、芳乃は何も知らなかつた。

日ならず……九九九會のお友だちと、一同が座敷で逢つた時、ほかのは、いろ／＼の色に、衣ものに、苦心をしたのに、此の人は、おなじ姿で、黒縹子の帯で、目まじろぎもせず、端正として居た。

御最貞に——

眉かくしの靈

木曾街道、奈良井の驛は、中央線起點、飯田町より一五八哩二、海拔三二〇〇尺、と言出すよ
り、膝栗毛を思ふ方が手取早く行旅の情を催させる。

こゝは彌次郎兵衛、喜多八が、とぼくと鳥居峠を越すと、日も西の山の端に傾きければ、兩
側の旅籠屋より、女ども立出でて、もしくお泊りぢやござんしないか、お風呂も湧いて居つに、
お泊りなく——喜多八が、まだ少し早いけれど……彌次郎、もう泊つてもよからう、なう姐さ
ん——女、お泊りなさんし、お夜食はお飯でも、蕎麥でも、お蕎麥でよかあ、おはたご安くして
上げませづ。彌次郎、いかさま、安い方がい、蕎麥でいくらだ。女、はい、お蕎麥なら百十六
錢でござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんなら然うと極めて泊つて、湯から上ると、その約
束の蕎麥が出る。早速にくひか、つて、喜多八、こつちの方では蕎麥はい、が、したぢが悪いに
はあやまる。彌次郎、そのかはりにお給仕がうつくしいからい、なう姐さん、と洒落か、つて、
もう一杯くんねえ。女、もうお蕎麥はそれ切りでござんさあ。彌次郎、なに、もうねえのか、た

つた二ぜんづ、食つたものを、つまらねえ、これぢやあ食ひたりねえ。喜多八、はたごが安いも
凄じい。二はいばかり食つて居られるものか。彌次郎……馬鹿なつらな、錢は出すから飯をくん
ねえ。……無慙や、なけなしの懷中を、けつく蕎麥だけ餘計につかはされて悄氣返る。その夜、
故郷の江戸お箆笥町引出し横町、取手屋の鑢兵衛とて、工面のい、馴染に逢つて、ふもとの山寺
に詣でて鹿の鳴聲を聞いた處……

……と思ふと、ふと此處で泊りたく成つた。停車場を、もう汽車が出ようとする間際だつたと
言ふのである。

此の、筆者の友、境賛吉は、實は蕙かつら木曾の棧橋、寢覺の床などを見物のつもりで、上松
までの切符を持つて居た。霜月の半であつた。

「……然も、その(蕎麥二膳)には不思議な縁がありましたよ……」

と、境が話した——

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、此の線の汽車は鹽尻から分岐點で、東京から上松へ行
くものが松本で泊つたのは妙である。尤も、松本へ用があつて立寄つたのだと言へば、それまで
で雑と濟む。が、それだと、しめく、りが緩んで些と辻褃が合はない。何も穿鑿をするのではな
いけれど、實は日數の少いのに、汽車の遊びを貪つた旅行で、行途は上野から高崎、妙義山を見

つ、横川、熊の平、浅間を眺め、軽井澤、追分をすぎ、篠の井線に乗替へて、姨捨田毎を窓から覗いて、泊りは其處で松本が豫定であつた。その松本には「い、娘の居る旅館があります。懇意ですから御紹介をませう」と、名のきこえた畫家が添手紙をしてくれた。……よせばい、のに、昨夜その旅館につくと、成程、帳場には其らしい束髪そくはつの女をんなが一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中むらめちやうで、……さてその紹介状を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない。此の霜夜しもよに、出がらの生なまぬる温ぬるい澁茶しぶちや一杯はい汲ひんだきりで、お夜食やしよくともお飯まんまとも言出いひださぬ。座敷は立派りっぱで卓たくは紫檀したんだ。火鉢ひばちは大いおほき。が火ひの氣けはほつちり。で、灰はいの白しろいのにしがみついて、何なにしろ暖あたたかいものでお銚子てうしをと云ふと、板前いたまえで火ひを引ひいてしまひました、何なんにも出来できませんと、女中なえさんの素氣そけなさ。寒さむさは寒さむし、成程なるほど、火ひを引ひいたやうな、家中いへぢやう寂寥ひっそりとはして居たが、まだ十一時前じふいちじまへである……酒さけだけなりと、頼たのむと、お生憎あいにく。酒さけはないのか、ござりません。——ぢや、麥酒ビールでも。それもお氣きの毒どく様さまだと言ふ。姐ねえさん、……境さかひは少々居直まほつて、何處どこか近所きんじよから取寄とりよせて貰もらへまいか。へいもう遅おそうござりますで、飲食店いんしょくてんは寢ねましたでな……飲食店いんしょくてんと言いやあがる。はてな、停車場ステーションから、震ふるへながら俥くるまで來る途中ちゆうちゆう、つい此この近ちかまはりに、冷つめたい音おとして、川かはが流ながれて、橋はしがかつて、兩側りやうがはに遊廊ゆうらうらしい家いへが並ならんで、茶ちやめしの赤あかい行燈あんどんもふはりと目の前まへにちらつくのに——あ、恠かうと知しつたら輕井澤かるゐざはで買かつた二合にかふびん壺を、次郎じちやうどのの狗いぬではないが、皆みななめてしまふのではなかつたものを。大歎息おほたいきとともに空腹くうはらをぐうと鳴ならして可哀あはれな聲こゑで、姐ねえさん、然さうすると、酒さけもなし、麥酒ビールもなし、肴さかなもなし……お飯まんまは。いえさ、今晚こんばんの旅籠はたごの飯めしは。へい、それが間に合あひませんで……火ひを引ひいたあとなもんでなあ——何なんの怨うらみか知らないが、恠かう成なると冷遇れいぐうを通越とおくわして奇怪きくわいである。なまじ紹介状せうかいじやうがあるだけに、喧嘩けんか面めんで、宿やどを替かへるとも言いはれない。前世ぜんせいの業ごふと斷念だんねんめて、せめて近所きんじよで、蕎麥そばか饅頭まんぢうの御都合ごつがふは成なるまいか、と恐おそる／＼申出まをすと、饅頭まんぢうなら聞きいて見みませう。あ、それを二ぜん頼たのみます。女中なえさんは遁腰にげこしのもつたて尻しりで、敷居しきゐへ半分はんぶんだけ突込つきこんで居ゐた膝ひざを、ぬいと引ひつこ抜ぬいて不精ぶしやうに出いて行く。

待つ事少時まつことしばしして、盆ぼんで突出つくだした奴やつを見ると、井いが唯ただ一つ。腹はらの空すいた悲かなしさに、姐ねえさん二ぜんと頼たのんだのだが。と詰なるやうに言いふと、へい、二ぜん分ぶん、装込まろこんでございますで。いや、相あひわかりました。何なんうぞお構かまひなく、お引取ひきとりを、と言いふまでもなし……ついと尻しりを見みせて、すたく／＼と廊下らうかを行ゆくのを、繼兒まことこのやうな目めつきで見みながら、抱込だきこむばかりに蓋ふたを取とると、成程なるほど、二ぜんもり込みだけに汗あせがぼつちり、饅頭まんぢうは白しろく乾かわいて居た。

此この旅館りよくわんが、秋葉山あきはさん三尺坊さんじやくぼうが、飯綱いひづな權現ごんげんへ、客きやくをたちものにした處ところへ打撞ぶつつたのであらう、泣なくより笑わらひ。

その……饅頭まんぢう二ぜんの昨夜ゆうべを、むかし彌次郎やじちやう、喜多八きたはちが、夕旅籠ゆふはたごの蕎麥そば二ぜんに思おもひ較くらべた。

つ、横川、熊の平、浅間を眺め、軽井澤、追分をすぎ、篠の井線に乗替へて、姨捨田毎を窓から覗いて、泊りは其處で松本が豫定であつた。その松本には「い、娘の居る旅館があります。懇意ですから御紹介をませう」と、名のきこえた畫家が添手紙をしてくれた。……よせばい、のに、昨夜その旅館につくと、成程、帳場には其らしい束髪そくはつの女をんなが一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中むらめちやうで、……さてその紹介状を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない。此の霜夜しもよに、出がらの生なまぬる温ぬるい澁茶しぶちや一杯はい汲ひんだきりで、お夜食やしよくともお飯まんまとも言出いひださぬ。座敷は立派りっぱで卓たくは紫檀したんだ。火鉢ひばちは大いおほき。が火ひの氣けはほつちり。で、灰はいの白しろいのにしがみついて、何なにしろ暖あたたかいものでお銚子てうしをと云ふと、板前いたまえで火ひを引ひいてしまひました、何なんにも出来できませんと、女中なえさんの素氣そけなさ。寒さむさは寒さむし、成程なるほど、火ひを引ひいたやうな、家中いへぢやう寂寥ひっそりとはして居たが、まだ十一時前じふいちじまへである……酒さけだけなりと、頼たのむと、お生憎あいにく。酒さけはないのか、ござりません。——ぢや、麥酒ビールでも。それもお氣きの毒どく様さまだと言ふ。姐ねえさん、……境さかひは少々居直まほつて、何處どこか近所きんじよから取寄とりよせて貰もらへまいか。へいもう遅おそうござりますで、飲食店いんしょくてんは寢ねましたでな……飲食店いんしょくてんと言いやあがる。はてな、停車場ステーションから、震ふるへながら俥くるまで來る途中ちゆうちゆう、つい此この近ちかまはりに、冷つめたい音おとして、川かはが流ながれて、橋はしがかつて、兩側りやうがはに遊廊ゆうらうらしい家いへが並ならんで、茶ちやめしの赤あかい行燈あんどんもふはりと目の前まへにちらつくのに——あ、恠かうと知しつたら輕井澤かるゐざはで買かつた二合にかふびん壺を、次郎じちやうどのの狗いぬではないが、皆みななめてしまふのではなかつたものを。大歎息おほたいきとともに空腹くうはらをぐうと鳴ならして可哀あはれな聲こゑで、姐ねえさん、然さうすると、酒さけもなし、麥酒ビールもなし、肴さかなもなし……お飯まんまは。いえさ、今晚こんばんの旅籠はたごの飯めしは。へい、それが間に合あひませんで……火ひを引ひいたあとなもんでなあ——何なんの怨うらみか知らないが、恠かう成なると冷遇れいぐうを通越とおくわして奇怪きくわいである。なまじ紹介状せうかいじやうがあるだけに、喧嘩けんか面めんで、宿やどを替かへるとも言いはれない。前世ぜんせいの業ごふと斷念だんねんめて、せめて近所きんじよで、蕎麥そばか饅頭まんぢうの御都合ごつがふは成なるまいか、と恐おそる／＼申出まをすと、饅頭まんぢうなら聞きいて見みませう。あ、それを二ぜん頼たのみます。女中なえさんは遁腰にげこしのもつたて尻しりで、敷居しきゐへ半分はんぶんだけ突込つきこんで居ゐた膝ひざを、ぬいと引ひつこ抜ぬいて不精ぶしやうに出いて行く。

待つ事少時まつことしばしして、盆ぼんで突出つくだした奴やつを見ると、井いが唯ただ一つ。腹はらの空すいた悲かなしさに、姐ねえさん二ぜんと頼たのんだのだが。と詰なるやうに言いふと、へい、二ぜん分ぶん、装込まろこんでございますで。いや、相あひわかりました。何なんうぞお構かまひなく、お引取ひきとりを、と言いふまでもなし……ついと尻しりを見みせて、すたく／＼と廊下らうかを行ゆくのを、繼兒まことこのやうな目めつきで見みながら、抱込だきこむばかりに蓋ふたを取とると、成程なるほど、二ぜんもり込みだけに汗あせがぼつちり、饅頭まんぢうは白しろく乾かわいて居た。

此この旅館りよくわんが、秋葉山あきはさん三尺坊さんじやくぼうが、飯綱いひづな權現ごんげんへ、客きやくをたちものにした處ところへ打撞ぶつつたのであらう、泣なくより笑わらひ。

その……饅頭まんぢう二ぜんの昨夜ゆうべを、むかし彌次郎やじちやう、喜多八きたはちが、夕旅籠ゆふはたごの蕎麥そば二ぜんに思おもひ較くらべた。

聊か仰山だが、不思議の縁と言ふのは此で——急に奈良井へ泊つて見たく成つたのである。

日あしも木曾の山の端に傾いた。宿には一時雨颯とかつた。

雨ぐらゐの用意はして居る。驛前の俵は便らないで、洋傘で寂しく凌いで、鴨居の暗い檐つたひに、石ころ路を辿りながら、度胸は据ゑたぞ。——持つて来い、蕎麥二膳。で、昨夜の饅飩は暗討だ、——今宵の蕎麥は望む處だ。——旅のあはれを味はうと、硝子張の旅館一二軒を、故と避けて、軒に山駕籠と干菜を釣し、土間の竈で、割木の火を焚く、住しさうな旅籠屋を烏のやうに覗込み、黒き外套で、御免と、入ると、頬冠をした親父が其の竈の下を焚いて居る。框がだゞ廣く、爐が大きく、煤けた天井に八間行燈の掛つたのは、山駕籠と對の註文通り。階子下の暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

「入らつせえ。」

蕎麥二膳、蕎麥二膳と、境が覺悟の目の前へ、身輕にひよいと出て、慇懃に會釋をされたのは、焼麩だと思ふ（しつぽく）の加料が蒲鉾だつたやうな氣がした。

「お客様だよ——鶴の三番。」

女中も、服装は木綿だが、前垂がけの薩張した、年紀の少い色白なのが、窓、欄干を覗く、松の中を、攀上るやうに三階へ案内した。——十疊敷。……柱も天井も丈夫造りで、床の間の誂に

も聊かの厭味がない、玄關つきとは似もつかない、しつかりした屋臺である。

敷蒲團の綿も暖かに、熊の皮の見事なのが敷いてあるは。は、あ、膝栗毛時代に、峠路で賣つて居た、猿の腹ごもり、大蛇の肝、獸の皮と言ふのは此れだ、と滑稽た殿様に成つて件の熊の皮に着座に及ぶと、すぐに臺十能へ火を入れて女中さんが上つて来て、惜氣もなく銅の大火鉢へ打まけたが、又夥多しい。青い火さきが、堅炭を搦んで、眞赤に烘つて、窓に沁入る山嵐は颯と冴える。三階に此の火の勢は、大地震のあとでは、些と申すのも憚りあるばかりである。

湯にも入つた。

さて膳だが、——蝶脚の上を見ると、蕎麥扱にしたは氣恥かしい。わらさの照焼はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚焼の玉子に、椀が眞白な半ぺんの葛かけ。皿についたのは、此のあたりで佳品と聞く、鵜を、何と、頭を猪口に、股をふつくり、胸を開いて、五羽、殆ど丸焼にして芳しくつけてあつた。

「難有い、……實に難有い。」

境は、其の女中に馴れない手つきの、其も嬉しい……酌をして貰ひながら、熊に乗つて、仙人の御馳走に成るやうに、慇懃に禮を言つた。

「これは大した御馳走ですな。……實に難有い……全く禮を言ひたいなあ。」

心底の事である。はぐらかすとは様子にも見えないから、若い女中もかけ引なしに、

「旦那さん、お氣に入りました嬉しうございますわ。さあ、もうお一つ。」

「頂戴しよう。尙ほ重ねて頂戴しよう。——時に姐さん、此の上のお願ひだがね、……何うだらう、此の鶴を別に貰つて、此處へ鍋に掛けて、煮ながら食べると言ふわけには行くまいか。——鶴はまだいくらかあるかい。」

「え、筈に三杯もございます。まだ臺所の柱にも束にしてかゝつて居ります。」

「そいつは豪氣だ。——少し餘分に貰ひたい、此處で煮るやうに……可いかい。」

「はい、然う申します。」

「次手にお銚子を。火が、から傍へ置くだけでも冷めはしない。……通ひが遠くつて氣の毒だ。三本ばかり一時に持つておいで。……何うだい。岩見重太郎が註文をするやうだらう。」

「おほ。」

今朝、松本で、顔を洗つた水瓶の水とともに、胸が氷に鎖されたから、何の考へもつかなかつた。こゝで暖かに心が解けると、……分つた、餛飩で虐待した理由と言ふのが——紹介状をつけた畫伯は、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信州路を経歴つて、その旅館には五月あまりも閉籠つた。滞る旅籠代の催促もせず、歸途には草鞋錢まで心着けた深切な家だと言

つた。が、あ、其だ。……おなじ人の紹介だから旅籠代を滞らして、草鞋錢を貰ふのだと思つたに違ひない。……

「え、此は、お客様、お鹿末な事でして。」

と紺の鯉口に、おなじ幅廣の前掛した、瘦せた、色のや、青黒い、陰氣だが律儀らしい、まだ三十六七ぐらゐるな、五分刈の男が丁寧に襖際に畏まつた。

「何ういたして、……實に御馳走様。……番頭さんですか。」

「いえ、當家の料理人にございますが、至つて不束でございまして。……それに、斯やうな山家邊鄙で、一向お口に合ひますものもございませんで。」

「飛んでもないこと。」

「つきまして、……唯今、女どもまでおつしやりつけでございましたが、鶴を、貴方様、何か鍋でめしあがりたいたいといふお言で、如何やうにいたして差上げませうやら、右、女どもも矢張り田舎ものの事でございますで、よくお言がのみ込めかねます。ゆゑに失禮ではございますが、一寸お伺ひに出ましてございしますが。」

境は少なからず面くらつた。

「そいつは何うも恐縮です。——遠方の處を。」

「……(伊那や高遠の餘り米)……と言ふでございませう、米、此の女中の名でございませう、お米。」
「あら、何だよ、伊作さん。」
と女中が横にらみに笑つて睨んで、
「旦那さん、——此の人は、家が伊那だもんでございませうから。」
「はあ、勝頼様と同國ですな。」
「まあ、勝頼様は、こんな男振ちやありませんが。」

と浮り言つた。……
「串戲のやうですが、全く三階まで。」
「何う仕りました。」
「まあ、此方へ——お忙しいんですか。」
「いえ、お膳は、最も差上げました。それが、お客様も、貴方様のほか、お二組ぐらゐるよりございませぬ。」
「では、まあ此方へ。——さあ、ずつと。」
「はッ、何うも。」
「失禮をするかも知れないが、まあ、一杯。あ、——丁度お銚子が來た。女中さん、お酌をしてあげて下さい。」
「は、いえ、手前不調法で。」
「まあ、一杯。——弱つたな、何うも、鵜を鍋でと言つて、……其の何ですよ。」
「旦那様、帳場でも、あの、然う申して居りますの。鵜は焼いてめしあがるのが一番おいしいんでございませう。」
「お膳にもつけて差上げましたが、此を頭から、その脳味噌をするりとな、ひと嚙りにめしあが

りますのが、おいしいんでございませう、え、飛んだ田舎流儀ではございませうがな。」
「お料理番さん……私は決して、料理をとやかう言つたのではないですよ。……弱つたな、何うも。實はね、ある其の宴會の席で、其の席に居た藝妓が、木曾の鵜の話をしたんです——大分酒が亂れて來て、何とか節と言ふのが、あつち此方ではじまると、木曾節と言ふのがこの時顯れて、——きいても可憐い土地だから、うろ覚えに覚えて居るが、(木曾へ木曾へと積出す米は)何とかつて言ふのでね……」

「然やうで。」
と眞四角に猪口をおくと、二つ提の煙草入から、吸ひかけた煙管を、金の火鉢だ、遠慮なくコツ、ンと敲いて、

「當前よ。」

とむつりした料理番は、苦笑もせず、又コツ、ンと煙管を拂く。

「それだもんですから、伊那の眞辰をしますの——木曾で唄ふのは違ひますが。——(伊那や高遠へ積出す米は、みんな木曾路の餘り米)——と言ひますの。」

「さあ……それは孰ちにしろ……その木曾へ、木曾への機掛に出た話なんですから、私たちも酔つては居るし、それがあとの贅川だか、峠を越した先の藪原、福島、上松のあたりだか、よくは訊かなかつたけれども、其の藝妓が、客と一所に、鶯あみを掛けに木曾へ行つたと言ふ話をしたんです。……まだ夜の暗いうちに山道をすん／＼上つて、案内者の指揮の場所で、かすみを張つて囃を揚げると、夜明前、霧のしら／＼に、向うの尾上を、ぱつと此方の山の端へ渡る鶯の群が、むら／＼と来て、羽ばたきをして、かすみに掛る。じわ／＼ととつて占めて、すぐに焚火で附焼にして、膏の熱い處を、ちゆツと吸つて食べるんだが、そのおいしい事、……と言つて、話をし
てね……」

「はあ、まつたくで。」

「……ぶる／＼寒いから、煮爛で、一杯のみながら、息もつかずに、幾口か鶯を嚙つて、あ、おいしいと一息して、焚火に獅嚙みついたのが、すつと立つと、案内についた土地の獵師が二人、

きやツと言つた——その何なんですよ、藝妓の口が血だらけに成つて居たんだとさ。生々とした半熟の小鳥の血です。……と此の話をしながら、うっかりしたやうに其の藝妓は手中で口を壓へたんですがね……たら／＼と赤いやつが沁みさうで、私は顔を見ましたよ。觸ると撓ひさうな瘦せぎすな、すらりとした、若い女で。……聞いてもうまさうだが、これは凄かつたらう、その時、東京で想像しても、峻いとも、高いとも、深いとも、峰谷の重り合つた木曾山中のしら／＼あけです……暗い裾に焚火を擲めて、すつくりと立上つたと言ふ、自然、目の下の峰よりも高い處で、霧の中から綺麗な首が。」

「可厭、旦那さん。」

「話は拙くつても、何となく不氣味だね。其の口が血だらけなんだ。」

「いや、如何にも。」

「あ、よく無事だつたな、と私が言ふと、何うして？と訊くから、然う云ふのが、慌てる銃獵家だの、魔のさした獵師に、峰越の笹原から狙撃に二つ弾丸を食ふんです。……場所と言ひ……時刻と言ひ……昔から、夜待、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しい事があると言ふが、まつたく其は魔がさしたんだ。だつて、靦面に綺麗な鬼に成つたぢやあないか。……何うせ然うよ、……私は鬼よ。——でも人に食はれる方の……なぞと言ひながら、でも可恐いわね、ぞつとする。」

「お米さん——電燈が何故か、遅いでないか。」
料理番が沈んだ聲で言つた。

「……別にその、と云つてございませぬ。しかし、流に瀨がございますやうに、山にも淵がございますで、氣をつけなければ成りませぬ。——唯今さしあげました鶴は、これは、つい一兩日續きまして、珍しく上の峠口で獵があつたのでございます。」
「さあ、それなんですよ。」
境は更めて猪口をうけつつ、
「料理番さん。きみのお手際で膳につけておくんなすつたのが、見てもうまさうに、香しく、脂の垂れさうなので、ふと思出したのは、今の藝妓の口が血の一件でね。しかし私は坊さんでも、精進でも、何でもありません。望んでも結構なだけけれど、見給へ。——窓の外は雨と、もみぢで、霧が山を織つて居る。峰の中には、雪を頂いて、雲を貫いて聳えたのが見えるんです。——どんな拍子かで、ひよいと立ちでもした時口が血に成つて首が上へ出ると……野郎で此の面だから、その藝妓のやうな、凄く美しく、山の神の化身のやうには見えまいがね。落残つた柿だと思つて、窓の外から烏が突かないとも限らない、……ふと變な氣がしたものだから。」

と、又口を手巾で壓へて居たのさ。」

「ふーん。」と料理番は、我を忘れて沈んだ聲して、

「え、旦那。へい、何うも、いや、全く。——實際、危うございますな。——然う言ふ場合に

は、屹と怪我があるんでして……よく、その姐さんは御無事でした。此の贅川の川上、御嶽口。

美濃寄りの峽は、よけいに取れますが、その方の場所は何處でございますか存じませぬ——藝妓

衆は東京のどちらの方で。」

「何、下町の方ですかね。」

「柳橋……」

と言つて、覗くやうに、熟と見た。

「……或はその新橋とか申します……」

「いや、その真中ほどです……日本橋の方だけれど、宴會の席ばかりでの話ですよ。」

「お處が分つて差支へがございませぬければ、参考のために、其の場所を伺つて置きたいくらゐ

でございまして。……此の、深山幽谷の事は、人間の智慧には及びませぬ——」

女中も俯向いて暗い顔した。

境は、此の場合誰もしよう、乗出しながら、

時雨は晴れつつ、木曾の山々に暮が迫つた。奈良井川の瀬が響く。

二

「何だい、何うしたんです。」

「あゝ、旦那。」と暗夜の庭の雪の中で。

「驚が来て、魚を狙ふんでございます。」

「すぐ窓の外、間近だが、池の水を渡るやうな料理番——その伊作の聲がする。」

「人間が落ちたか、獺でも駆廻るのかと思つた、えらい音で驚いたよ。」

此は、その翌日の晩、おなじ旅店の、下座敷での事であつた。……

境は奈良井宿に逗留した。こゝに積つた雪が、朝から降出したためではない。別に此のあたりを見物するためでもなかつた。……昨夜は、あれから——鵜を鍋でと誂へたのは、しやも、かしはをするやうに、膳のわきで火鉢へ掛けて煮るだけの事、と言つたのを、料理番が心得て、そのぶつ切を、皿に山もり。目筈に一杯、葱のざくざくを添へて、醤油も砂糖も、むきだしに擔ぎあげた。お米が烈々と炭を繼ぐ。

越の方だが、境の故郷るまはりでは、季節に成ると、此の鵜を珍重すること一通りでない。料理屋が鵜御料理、じぶ、おこのみなどと言ふ立看板を軒に掲げる。鵜うどん、鵜蕎麥と蕎麥屋までが貼紙を張る。たゞし安くない。何の椀、どの鉢に使つても、おん羹、おん小蓋の見識で。ぼつちり三瓣、五瓣よりは附けないのに、葱と一所に打覆けて、鍋からもりこぼれるやうな湯氣を、天井へ立てたは嬉しい。

剩へ熱燗で、熊の皮に胡坐で居た。

藝妓の化ものが、山賊にかはつたのである。

寝る時には、厚衾に、此の熊の皮が上へ被つて、袖を包み、蔽ひ、裙を包んだのも面白い。あくる日、雪に成らうとてか、夜嵐の、じんと身に浸むのも、木曾川の瀬の凄いのも、ものの數とせせず、酒の血と、獸の皮とで、ほか／＼して三階にぐつすり寐込んだ。

次第であるから、朝は朝飯から、ふつ／＼と吹いて吸るやうな豆腐の汁も氣に入つた。

一昨日の旅館の朝は何うだらう。……溝の上澄のやうな冷い汗に、おん羹ほどに蜆が泳いで、生煮の臭さと言つたらなかつた。……

山も、空も氷を透す如く澄切つて、松の葉、枯木の閃くばかり、晁々と陽がさしつ、それで、ちら／＼と白いものが飛んで、奥山に、熊が人立して、針を噴くやうな雪であつた。

朝飯が済んで少時すると、境はしくくと腹が疼み出した。——しばらくして、二三度はッカリへ通つた。

あの、饅餡の祟りである。鶴を過食したためでは斷じてない。二ぜん分を籠にした生がへりのうどん粉の中毒らない法はない。腹を壓へて、饅餡を思ふと、思ふ下からチク／＼と筋が動いて痛み出す。——尤も、戸外は日當りに針が飛んで居ようが、少々腹が痛まうが、我慢して、汽車に乗れないと言ふ容體ではなかつたので。……唯、誰も知らない。此の宿の居心のいゝのにつけて、何處かへのつらあてにと、逗留する氣に成つたのである。

處で座敷だが——その二度めだつたか、廁のかへりに、我が座敷へ入らうとして、三階の欄干から、ふと二階を覗くと、階子段の下に、開けた障子に、箒とはたきを立掛けた、中の小座敷に炬燵があつて、床の間が見通される。……床に行李と二つばかり重ねた、あせた萌葱の風呂敷づつみの、眞田紐で中結へをしたのがあつて、旅商人と見える中年の男が、ブツぶり床を背負つて當つて居ると、向合に、一人の、中年増の女中が一寸浮腰で、膝をついて、手さきだけ炬燵に入れて、少し仰向くやうにして、旅商人と話をして居る。

なつかしい浮世の状を、山の崖から掘出して、旅宿に嵌めたやうに見えた。座敷は熊の皮である。境は、ふと奥山へ棄てられたやうに、里心が着いた。

一昨日松本で城を見て、天守に上つて、其の五層めの朝霜の高層に立つて、悚然としたやうな雲に連る、山々の薙と再び窓に来て、身に迫るのを覺えもした。バスケットに、等閑に絡めたままの、城あとの崩れ堀の苔むす石垣を這つて枯残つた小さな蔦の紅の、鶴の血のしたゝる如きものを見るにつけても。……急に寂しい。——お米さん、下階に座敷はあるまいか。——炬燵に入つてぐつすと寐たいんだ。」

二階の部屋々々は、時ならず商人衆の出入りがあるからと、望む處の下座敷、おも屋から、土間を長々と板を渡つて離座敷のやうな十疊へ導かれたのであつた。

肱掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。

白雪の飛ぶ中に、緋鯉の背、眞鯉の鰭の紫は美しい。梅も松もあしらつたが、大方は櫻楓の大木である。朴の樹の二抱ばかりなのさへすつくと立つ。が、いづれも葉を振つて、素裸の山神の如き装だつたことは言ふまでもない。

午後三時頃であつたらう。枝に梢に、雪の咲くのを、炬燵で斜違ひに、くの字に成つて——い

い婦だとお目に掛けたい。肱掛窓を覗くと、池の向うの椿の下に料理番が立つて、つくねんと腕組して、熱と水を瞻るのが見えた。例の紺の筒袖に、尻からすぽんと巻いた前垂で、雪の凌ぎに烏打帽を被つたのは、苟

くも料理番が水中の鯉を覗くとは見えない。大な鵜が沼の鱒を狙つて居る形である。山も峰も、雲深く其の空を取圍む。

境は山間の旅情を解した。「料理番さん、晩の御馳走に、其の鯉を切るのかね。」「へ、。」と薄暗い顔を上げてニヤリと笑ひながら、烏打帽を取つてお時儀をして、また被り直すと、其のまゝこそごとと樹を潜つて廂に隠れる。

帳場は遠し、あとは雪がや、繁く成つた。

同時に、さら／＼さら／＼と水の音が響いて聞える。「——又誰か洗面所の口金を開放したな。此がまた二度めで。……今朝三階の座敷を、此處へ取替へない前に、些と遠いが、手水を取るのに清潔だからと女中が案内をするから、此の離座敷に近い洗面所に来ると、三ヶ所、水道口があるのに其のどれを捻つても水が出ない。然ほどの寒さとは思へないが凍てたのかと思つて、餌のやうに高く手を鳴して女中に言ふと、「あれ、波込みます。」と駈出して行くと、やがて、スツと水が出た。——座敷を取替へたあとで、はゞかりに行くと、外に手水鉢がないから、洗面所の一つを捻つたが、その時はほんのたらくと滴つて、辛うじて用が足りた。

しばらくすると、頻りに洗面所の方で水音がする。炬燵から潜出て、土間へ下りて橋がかりからそこを覗くと、三ツの水道口、残らず三條の水が一齊にざつと灌いで、徒らに流れて居た。たしない水らしいのに、と一つ一つ、丁寧にしまつて座敷へ戻つた。が、その時も料理番が池のへりの、同じ處につくねんとイんで居たのである。くだいやうだが、料理番の池に立つたのは、此で二度めだ。……朝のは十時頃であつたらう。ト其の時料理番が引込むと、やがて洗面所の水が、再び高く響いた。

又しても三條の水道が、残らず開放しに流れて居る。おなじ事、たしない水である。あとで手を洗はうとする時は、屹と涸れるのだからと、又しても口金をしまつて置いたが。——

いま、午後の三時ごろ、此の時も、更に其の水の音が聞え出したのである。庭の外には小川も流れる。奈良井川の瀬も響く。木曾へ来て、水音を気にするのは、船に乗つて波を見まいとするやうなものである。望みこそすれ、嫌ひも避けもしないのだけれど、不思議に洗面所の開放しばかり氣に成つた。

境は又廊下へ出た。果して、三條とも揃つて——しよろ／＼と流れて居る。「旦那さん、お風呂ですよか。」手拭を持つて居たのを見て、こゝへ火を直しに、臺十能を持つて來かゝつた、お米が聲を掛けた。「いや——しかし、もう入れるかい。」「直きでございませう。……今日は此の新館の湯が湧きますから。」成程、雪の降りしきるなかに、ほんのりと湯の香が通ふ。洗面所の傍の西洋扉が湯殿らしい。この窓からも見える。新しく建増した柱立てのまゝ、筵がこひにしたのもあり、

足場を組んだ處があり、材木を積んだ納屋もある。が、荒れた廐のやうに成つて、落葉に埋れた、
 一帯、脇本陣とでも言ひさうな舊家が、いつか世が成金とか言つた時代の景氣に連れて、桑も蠶
 も當つたであらう、此のあたりも火の燃えるやうな勢に乗じて、贅川はその昔は、煮え川にして、
 温泉の湧いた處だなどと、こゝが温泉にでも成りさうな意氣込みで、新館建増にかゝつたのを、
 此の一座敷と、湯殿ばかりで、そのまゝ、沙汰やみに成つた事など、あとで分つた。「女中さんかい、
 其の水を流すのは。」閉めたばかりの水道の栓を、女中が立ちながら一つづゝ開けるのを視て、
 堪らず詰るやうに言つたが、次手に此の仔細も分つた。……池は、樹の根に樋を伏せて裏の川か
 ら引くのだが、一年に一二度づゝ水涸があつて、池の水が干ようとす。鯉も鮒も、一處へ固つ
 て、泡を立てて弱るので、臺所の大桶へ汲込んだ井戸の水を、遙々と此の洗面所へ送つて、橋が
 かりの下を潜らして、池へ流込むのださうであつた。

木曾道中の新版を二三種ばかり、枕もとに散らした炬燵へ、すぶ／＼と潜つて、「お米さん、
 …折入つて、お前さんに頼みがある。」と言ひかけて、初々しく一寸俯向くを見ると、猛然とし
 て、喜多八を思ひ起して、我が境は一人で笑つた。「は、は、は、心配な事ではないよ。——お庇で腹
 按配も至つて好く成つたし、……午飯を抜いたから、晩には入合せに且つ食ひ、大に飲むとする
 んだが、いまね、伊作さんが澁苦い顔をして池を覗んで行きました。何うも、鯉のふとり工合を

鑑定したものらしい……屹と今晚の御馳走だと思ふんだ。——昨夜の鵜ぢやないけれど、何うも
 縁あつて池の前に越して来て、鯉と隣附合ひに成つて見ると、目の前から引上げられて、組で輪
 切は酷い。……板前の都合もあらうし、また我がまゝを言ふのではない。……

活づくりはお断りだが、實は鯉汁大歡迎なんだ。しかし、魚屋か、何か、都合して、ほかの鯉
 を使つて貰ふわけには行かないか。——差出て事だが、一尾か二尾で足りるものなら、お客は幾
 人だか、今夜の入用だけは私が其の原料を買つても可いから。」女中の返事が、「いえ、此の池の
 は、いつもお料理にはつかひませんでございます。うちの旦那も、おかみさんも、御志の俵
 の日には、鮒だの、鯉だの、……此の池へ放しなさんでございませう。料理番さんも矢張り。……
 ……そして料理番は、此の池のを大事にして、可愛がつて、その所爲ですか、隙さへあれば、黙つ
 てあゝやつて庭へ出て、池を覗いて居ますんです。」それはお誂だ。ありがたい。「境は禮を言つ
 たくらゐであつた。

雪の頂から星が一つ下つたやうに、入相の座敷に電燈の點いた時、女中が風呂を知らせに來た。
 「すぐに膳を。」と聲を掛けて置いて、待構へた湯どのへ、一散——例の洗面所の向うの扉を開け
 ると、上場らしいが、ハテ眞暗である。いやいや、提灯が一燈ぼうと薄白く點いて居る。其處に
 もう一枚扉があつて閉つて居た。その裡が湯どのらしい。

「半作事だと言ふから、まだ電燈が點かないのだらう。お、二つ巴の紋だな。大星だか由良之助だかで、鼻を衝く、鬱陶しい巴の紋も、此處へ來ると、木曾殿の寵愛を思出させるから奥床しい。」

と帯を解きかけると、ちやぶり——といふ——人が居て湯を使ふ氣勢がする。此の時、洗面所の水の音がハタと留んだ。

境はためらつた。

が、いつでも構はぬ。……他が濟んで、湯のあいた時を知らせて貰ひたいと言つて置いたのである。誰も入つては居まい。とに角と、解きかけた帯を挟んで、づつと寄つて、其の提灯の上から、扉にひつたりと頬をつけて伺ふと、袖のあたりに、すうーと暗く成る、蠟燭が、またぼうと明く成る。影が痣に成つて、巴が一つ片頬に映るやうに陰氣に沁込む、と思ふと、ばちやり……内端に湯が動いた。何の隙間からか、芬と梅の香を、ぬくもりで溶かしたやうな白粉の香がする。「婦人だ。」

何しろ、此の明では、男客にしろ、一所に入ると、暗くて肩も手も跨ぎかねまい。乳に打着りかねまい。で、ばたくと草履を突掛けたまゝ、引返した。

「もう、お上りに成りまして？」と言ふ。

通が遠い。こゝで爛をするつもりで、お米がさきへ銚子だけ持つて來て居たのである。

「いや、あとにする。」

「まあ、そんなにお腹がすいたんですの。」

「腹もすいたが、誰かお客が入つて居るから。」

「へい、……此方の湯どのは、久しく使はなかつたのですが、あの、然う言つては悪うございませうけど、しばらくぶりで、お掃除かたく、旦那様に立てましたのでございますから、……あとで頂きますまでも、……あの、まだ誰方も。」

「構やしない。私はゆつくりで可いんだが、婦人の客のやうだつたぜ。」

「へい。」

と、をかきなベソをかいた顔を見ると、手に持つ銚子が湯沸にカチ／＼カチと震へたつけ、あとじさり、ふいと立つて、廊下に出た。一度ひつそり聲音を消すや否や、けた、ましい音を、すたんと立てて、土間の板をはたくと鳴して駈出した。

境はきよんととして、

「何だい、あれは……」

やがて膳を持つて顯れたのが……お米でない、年増のに替つて居た。

「やあ、中二階のおかみさん。」

「商人と、炬燵で睦じかつたのは此である。」

「御亭主は何うしたい。」

「知りませんよ。」

「是非、承りたいんだがね。」

「半ば串戯に、ぐツと聲を低くして、

「出るのかい……何か……あの、湯殿へ……眞個？」

「それがね、旦那、大笑ひなんでしょう。……誰方も在らつしやらないと思つて、申上げ

ましたのに、御婦人の方が入つておいでだつて、旦那がおつしやつたと言ふので、米ちゃん、大

變な臆病なんです。……久しくつかひません湯殿ですから、内のお上さんが、念のために、

「――」

「あ、然うか、……私はまた、一寸出るのかと思つたよ。」

「大丈夫、湯どのへは出ませんけれど、そのかはりお座敷へはこんなのが、ね、貴方。」

「いや、結構。」

「お酌は此の方が、けつく飲める。」

夜は長い、雪はしん／＼と降出した。床を取つてから、酒をもう一度、その勢でぐつすり寝よ

う。晩飯は可い加減で膳を下げた。

登音が入亂れる。ばた／＼と廊下へ續くと、洗面所の方へ落合つたらしい。ちよろ／＼と水の

音が又響き出した。男の聲も交つて聞える。それが止むと、お米が襖から圓い顔を出して、

「何うぞ、お風呂へ。」

「大丈夫か。」

「ほ、ほ。」

と些とてれたやうに笑ふと、身を廊下へ引くの、押續いて境は手拭を提げて出た。

橋がかりの下口に、昨夜帳場に居た坊主頭の番頭と、女中頭か、それとも女房かと思ふ老けた

婦と、もう一人の女中とが、といった形に顔を並べて、一團に成つて此方を見た。其處へお米の

姿が、足袋まで見えてちよ／＼と橋がかりを越えて渡ると、三人の懷へ飛込むやうに一團。

「御苦勞様。」

我がために、見とゞけ役の此の人数で、風呂を檢べたのだと思ふから聲を掛けると、一度に揃

つてお時儀をして、屋根が萱ぶきの長土間に敷いた、そのあゆみ板を渡つて行く。土間のなかば

で、其のおじやのかたまりのやうな四人の形が暗く成つたのは、トタンに、一つ二つ電燈がスツ

と息を引くやうに赤く成つて、橋がかりのも洗面所のも一齊にパツと消えたのである。
と胸を吐くと、さら／＼さら／＼と三筋に……慙う順に流れて、洗面所を打つ水の下に、先刻の提灯が朦朧と、半ば暗く、巴を一つ照して、墨でかいた炎か、鯀の跳ねたか、と思ふ形に點れて居た。

いまにも電燈が點くだらう。湯殿口へ、これを持って入る氣で、境がこゝみ狀に手を掛けようとする、提灯がフツと消えて見えなくなつた。

消えたのではない。矢張り是が以前の如く、湯殿の戸口に點いて居た。此はおのづから雫して、下の板敷の濡れたのに、目の加減で、向うから影が映したものであらう。はじめから、提灯が此處にあつた次第ではない。境は、斜に影の宿つた水中の月を手に取りうとしたと同一である。

爪さぐりに、例の上り場へ……で、念のために戸口に寄ると、息が絶えさうに寂寞しながら、ばちやんと音がした。ぞつと寒い。湯氣が天井から雫に成つて點滴るのではなしに、屋根の雪が溶けて落ちるやうな氣勢である。

ばちやん、……ちやぶりと微に湯が動く。と又得ならず艶な、しかし冷い、そして、にほやかな、霧に白粉を包んだやうな、人膚の氣がすつと肩に絡つて、頸を撫でた。

脱ぐ筈の衣紋を且つしめて、

「お米さんか。」

「いゝえ。」

と一呼吸間を置いて、湯どこの裡から聞えたのは、勿論我が心が我が耳に響いたのであらう。
——お米でないのは言ふまでもなかつたのである。

洗面所の水の音がびつたり留んだ。

思はず立竦んで四邊を見た。思切つて、

「入りますよ、御免。」

「いけません。」

と澄みつつ、湯氣に濡れ／＼とした聲が、はつきり聞えた。

「勝手にしろ！」

我を忘れて言つた時は、もう座敷へ引返して居た。

電燈は明るかつた。巴の提灯は此の光に消された。が、水は三筋、更にさら／＼と走つて居た。
「馬鹿にしやがる。」

不氣味より、凄いより、なぶられたやうな、反感が起つて、炬燵へ仰向けにひっくり返つた。しばらくして、境が、飛上るやうに起直つたのは、すぐ、窓の外に、ざぶり、ばちや／＼ばちや、ばちや、ちやツと、けた／＼ましく池の水の搔攪さるゝ音を聞いたからであつた。

「何だらう。」

ばちや／＼ばちや、ちやツ。

其處へ、ごそ／＼と池を廻つて響いて來た。人の來るのは、何故か料理番だらうと思つたのは、此の池の魚を愛惜すると、聞いて知つたためである。……

「何だい、何うしたんです。」

兩戸を開けて、一面の雪の色のや、薄い處に聲を掛けた。其池も白いまで水は少いのであつた。

三

「どつちです、白鷺かね、五位鷺かね。」

「え、——どつちもでございますな。兩方だらうと思ふんですが。」

料理番の伊作は來て、窓下の戸際に、がツしり腕組をして、うしろ向に立つて言つた。

「むかうの山口の大林から下りて來るんでございます。」

言の中にも顯れる、雪の降留んだ、その雲の一方は漆の如く森が黒い。

「不斷の事ではありませんが、……此の、旦那、池の水の涸れる處を狙ふんでございます。鯉も

鮒も半分鰭を出して、あがきがつかないのでございますから。」

「伶俐な奴だね。」

「馬鹿な人間は困つ了ひます——魚が可哀相でございますので……然うかと言つて、夜一夜、立番をしても居られません。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御註文の時刻でございますから、何か、不手際なものでも見繕つて差上げます。」

「都合がいたら、君が來て一杯、ゆつくりつき合つてくれなにか。——私は夜ふかしは平氣だから。一所に……此處で飲んで居たら、いくらか案山子に成るだらう。……」

「——結構でございます。……もう臺所は片附きました、追ッつけ伺ひます。——いたづらな餓鬼どもめ。」

と、あとを口こゝとで、空を睨みながら、枝をざら／＼と潛つて行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかつた。勿論、極く細目には引いたが。——實は、雪の池の爰へ來て幾羽の鷺の、魚を狩る狀を、さながら、炬燵で見のお伽話の繪のやうに思つたのである。驚破と言へば、追立つるとも、驚かすとも、その場合の事として……第一、氣もそゞろな事は、

二度まで湯殿の湯の音は、いづれの隙間からか雪とともに、驚が起ち込んで浴みしたらう、と然うさへ思つたほどであつた。

そのまゝ、熟と覗いて居ると、薄黒く、ごそ／＼と雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふはりと巴の提灯が點いて行く。お、今、窓下では提灯を持つては居なかつたやうだ。——それに、もうやがて、庭を横ぎつて、濡縁か、戸口に入りさうだ、と思ふまで距つた。遠いまで小さく見える、唯少時して、ふとあとへ戻るやうな、や、大きく成つて、あの土間廊下の外の、萱屋根のつま下をすれ／＼に、段々此方へ引返す、引返すのが、氣の所爲だか、いつの間にか、中へ入つて、土間の暗がりを點れて来る。……橋がかり、一方が洗面所、突當りが湯殿……ハテナときよつとするまで氣がついたのは、その點れて来る提灯を、座敷へ振返らずに、逆に窓から庭の方に乗出しつつ見て居る事であつた。

トタンに消えた。——頭からゾツとして、首筋を硬く振向くと、座敷に、白鷺かと思ふ女の後姿の頸脚がスツと白い。

違棚の傍に、十畳のその辰巳に据ゑた、姿見に向つた、うしろ姿である。……湯氣に山茶花の悄れたかと思ふ、濡れたやうに、しつとりと身についた藍鼠の縞小紋に、朱鷺色と白のいち松のくつきりした伊達巻で乳の下の縊れるばかり、消えさうな弱腰に、裾模様が軽く磨いて、片膝をやうにして、化粧をして居た。

境は起つても坐るも知らず息を詰めたのである。

あはれ、着た衣は雪の下なる薄もみぢで、膚の雪が、却つて薄もみぢを包んだかと思ふ、深く脱いだ襟脚を、すらりと引いて搔合すと、ぼつとりとして膝近だつた懷紙を取つて、くる／＼と丸げて、掌を拭いて落したのが、疊へ白粉のこぼれるやうであつた。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできた人膚に紛ふ留南奇が薰つて、少し斜めに居返ると、煙草を含んだ。吸口が白く、艶々と煙管が黒い。

トーンと、灰吹の音が響いた。

屹と向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通つて、色の白さは凄いやう。——氣の籠つた優しい眉の兩方を、懷紙でひたと隠して、大な瞳で熟と視て、

「……似合ひますか。」

と、莞爾した齒が黒い。唯、莞爾しながら、襟を合せ狀にすつくりと立つた。顔が鴨居に、すらすらと丈が伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上つた。ふはりと、其の婦の袖で抱上げられたと思つたのは、然うでない、横に口に引衝へられて、壘を空に釣上げられたのである。

山が眞黒に成つた。いや、庭が白いと、目に遮つた時は、スツと窓を出たので、手足はいつか、尾緒に成り、我はびち／＼と跳ねて、婦の姿は廂を横に、ふは／＼と欄間の天人のやうに見えた。白い森も、白い家も、目の下に、忽ち颯と……空高く、松本城の天守をすれ／＼に飛んだやうに思ふと、水の音がして、もんどり打つて池の中へ落ちると、同時に炬燵でハツと我に返つた。池におびたゞしい羽音が聞えた。

此の案山子になど追へるものか。

バスケットの、鶯の血を見るにつけても、青い呼吸をついてぐつたりした。

廊下へ、しと／＼と人の音がする。ハツと息を引いて立つと、料理番が膳に銚子を添へて来た。

「やあ、伊作さん。」

「お、旦那。」

四

「昨年丁ど今頃でございました。」

料理番はひしと、身を寄せ、肩をしめて話し出した。

「今年は今朝から雪に成りましたが、其のみぎりは、忘れもしません、前日雪が降りました。積り方は、もつと多かつたのでございます。——二時頃に、目の覚めますやうな御婦人客が、唯お一方で、おいでに成つたのでございます。——目の覚めるやうだと申しましても派手ではありません。婀娜な中に、何となく寂しさのございます、二十六七のお年ごろで、高等な圓鬚でおいでございました。——御容子のい、背のすらりとした、見立ての申分のない、しかし奥様と申すには、何處か媚めかしさが過ぎて居ります。其處は、田舎ものでも、大勢お客様をお見かけ申して居りますから、直きにくらうと衆だと存じましたのでございまして、此が柳橋の蓑吉さんと言ふ姐さんだつた事が、後に分りました。宿帳の方はお艶様でございます。

その御婦人を、旦那——帳場で、此のお座敷へ御案内申したのでございます。

風呂がお好きで……勿論、お嫌な方も澤山ございますまいが、あの湯へ二度、お着きに成つて、すぐと、それに夜分に一度、お入りなすつたのでございます——都合で、新館の建出しは見合せをりますが、温泉ごのみに石で壘みました風呂は、自慢でございます、舊の二階三階のお客様様にも、些と遠うございますけれども、お入りを願つて居りました處が——實はその、時々、不思議な事がありますので、此のお座敷も同様に多日使はずに置きましたのを、旦那のやうな方に

試みて頂けば、おのづと變な事もなくならませうと、相談をいたしましたして、申すもいかゞでございますが、今日久しぶりで、湧かしも使ひもいたしましたやうな次第なのでございます。

處で、お艶様、その御婦人でございますが、日の中一風呂お浴びになりますと、(鎮守様のお宮は)と聞いて、お参詣なさいました。贅川街道よりの丘の上でございます。——山王様のお社で、むかし人身御供があがつたなどと申傳へてございます。森々と、もの寂しいお社で。……村社はほかにございますが、鎮守と言ふ、お尋ねにつけて、その儀を帳場で申しますと……道を尋ねて、其處でお一人で道のぼりなさいました。目を少々お煩ひのやうで、雪がきら／＼して疼むからと言つて、こんな土地でございます、ほんの出来あひの黒い目金を買はせて、掛けて、洋傘を杖のやうにしてお出掛けで。——此れは鎮守様へ参詣は、奈良井宿一統への禮儀挨拶と言ふお心だつたやうでございます。

無事に、先づお歸りなすつて、夕飯の時、お膳で一口あがりしました。——旦那の前でございますが、板前へと、御丁寧にお心づけを下すつたものでございますから私……一寸御挨拶に出ました時、恚う言ふおたづねでございます——お社へお供物にきざ柿と楊枝とを買ひました、……石段下の其處の小店のお媼さんの話ですが、山王様の奥が深い森で、其の奥に桔梗ヶ原と言ふ、原の中に、桔梗の池と言ふのがあつて、その池に、お一方、お美しい奥様が在らつしやると言ふこと

とですが、眞個ですか。——

——眞個でございます、と皆まで承はらないで、私が申したのでございます。

論より證據、申して、よいか、悪いか存じませんが、現に私が一度見ましたのでございます。」

「……………」

「桔梗ヶ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗に咲きます、けれども、桔梗ばかりと言ふのはございません。唯其の大池の水が眞桔梗の青い色でございます。桔梗は却つて、白い花が見事に咲きますのでございまして……」

四年あとに成りますが、正午と言ふのに、此の峠向うの藪原宿から火が出ました。正午の刻の火事は大きく成ると、何國でも申しますが、全く大焼でございました。

山王様の丘へ上りますと、一目に見えます。火の手は、七條にも上りまして、ぱち／＼ぱんぱんと燃る音が手に取るやうに聞えます。……あれは山間の瀧か、いや、ぼんぶの水の走るのだと申すくらゐ。此の大南風の勢では、山火事に成つて、やがて、こゝもとまで押寄せはしまいかと案じますほどの激しさで、駈けつけるものは駈けつけます、騒ぐものは騒ぐ。私などは見物の方で、お社前は、おなじ夥間で充滿でございました。

二百十日の荒れ前で、残暑の激しい時でございましたから、ついでに少しづつ、お社の森の中へ

火を見ながら入りましたにつけて、不^ふ断^{だん}は、しつかり行くまじきとしてある處ではございますが、此^この火^ひの陽^{やう}氣^きで、人^{ひと}の氣^きの湧^わいて居^ゐる場所^{ばしょ}から、深^{ふか}いと云^いつても半^{はん}町^{ちやう}とはない。大^{だい}丈^{ぢやう}夫^ふと。處^{ところ}で、私^{てまい}陰^{いん}氣^きもので、餘^{あま}り若^{わか}衆^{しゆ}づきあひがございせんから、誰^{だれ}を誘^{さそ}ふでもあるまいと、杉^{すぎ}檜^{ひのき}の森^{しん}々^くとしました中^{なか}を、それも、思^{おも}つたほど奥^{おく}が深^{ふか}くもございせん、一面^{いちめん}の草^{くさ}花^{ばな}。……白^{しろ}い桔^き梗^{きやう}でへりを取^とつた百^{ひやく}疊^{でふ}敷^{じき}ばかりの眞^ま青^{あお}な池^{いけ}が、と見^みますと、その汀^{なみは}、もの二^に……三^{さん}……十^{じゆ}間^{けん}とはない處^{ところ}に……お一人^{ひとり}、何^{なん}ともおうつくしい御^ご婦^ふ人^{じん}が、鏡^{きやう}臺^{たい}を置^おいて、斜^なめ向^{むか}つて、お化^け粧^{しやう}をなさつて在^いらつしやいました。

お髪^{かみ}が何^{なに}うやら、お召^{めし}ものが何^{なに}やら、一^{ひと}目^め見^みました、其^{その}の時^{とき}の凄^{せい}さ、可^{おそ}恐^ろさと書^いつてはございませぬ。唯^{ただ}今^{いま}思^{おも}ひ出^でしても御^ご酒^{しゆ}が氷^{こほり}に成^なつて胸^{むね}へ沁^しみます。慄^{ぞつと}然^とします。……それで居^ゐてそのお美^{うつく}しさが忘^{わす}れられませぬ。勿^{もつた}體^{たい}ないやうでございませぬけれども、家^{いえ}のないもののお佛^{ぶつ}壇^{だん}に、うつしたお姿^{すがた}と存^{ぞん}じまして、一^{いち}日^{にち}でも、此^この池^{いけ}の水^{みづ}を視^{なが}めまして、その面^{おも}影^{かげ}を思^{おも}はずには居^ゐられませぬのでございませぬ。——さあ、その時^{とき}は、前^{ぜん}後^ごも存^{ぞん}ぜず、翼^{はね}の折^をれた鳥^{とり}が、たゞ空^{そら}から落^おちるやうな思^{おも}ひで、森^{もり}を飛^と抜^ぬけて、一^{いち}目^め散^{さん}に、高^{たか}い石^{いし}段^{だん}を駈^{かけ}下^りりました。私^{てま}がその顔^{かほ}の色^{いろ}と、怯^{おび}えた様^{やう}子^すとてはなかつたさうでございませぬ。……お社^{やしろ}前^{まへ}の火^{くわ}事^じ見^{けん}物^{ぶつ}が、一^{ひと}雪^{ゆき}崩^なに成^なつて遁^{にげ}下^りりました。森^{もり}の奥^{おく}から火^ひを消^けすばかり冷^{つめ}たい風^{かぜ}で、大^{だい}蛇^{じゆ}が颯^{さつ}と追^おつたやうで、遁^{にげ}げた私^{てま}は、野^の兔^{うさぎ}の飛^とんで

落^おちるやうに見^みえたと云^いふ事^{こと}でございまして。

と此^この趣^{おもむき}を——お艶^{つや}様^{さま}、その御^ご婦^ふ人^{じん}に申^ましますと、——然^さうしたお方^{かた}を、何^{なに}うして、女^{んな}神^{かみ}様^{さま}とも、お姫^{ひめ}様^{さま}とも言^いはないで、奥^{おく}さまと言^いふんでせう。さ、其^{これ}でございませぬ。私^{てま}は唯^{ただ}目^めが暗^{くら}んで了^{しま}りましたが、前^{ぜん}々^くより、ふとお見^み上^あげ申^ましたものの言^いふのでは、桔^き梗^{きやう}の池^{いけ}のお姿^{すがた}は、眉^{まゆ}をおとし

て在^いらつしやりますさうで……」

境^{さかひ}はゾツとしながら、却^{かえ}つて炬^こ燵^{だん}を傍^わへ拂^はつた。

「誰^{だれ}方^{なた}の奥^{おく}方^{かた}とも存^{ぞん}ぜずに、いつとなく然^さう申^ますのでございまして……旦那^{だんな}。——お艶^{つや}様^{さま}に申^ましますと、おつと聞^ききなすつて——だと、その奥^{おく}さまのお姿^{すがた}は、ほかにも見^みた方^{かた}がありますか、とおつしやいます——え、月の山^{つき}の端^は、花^{はな}の籠^{かご}路^ぢ、螢^{はたる}の影^{かげ}、時^{とき}雨^{あめ}の提^ち灯^{とう}、雪^{ゆき}の川^{かは}べりなど、随^ず分^{ぶん}方^{かた}でも、ちらりと拜^{をが}んだものはございませぬ。——お艶^{つや}様^{さま}は此^{これ}をきいて、猪^ち口^{くち}を下^{した}に置^おいて、なぜか、悄^{しん}乎^{ぼり}とおうつむきなさいました。——

——處^{ところ}で旦那^{だんな}……その御^ご婦^ふ人^{じん}が、わざわ木^き曾^その此^この山^{やま}家^がへ一^{ひとり}人^{たひ}旅^{たび}をなされた、用^{よう}事^じがござい

「え、其の時、此の、村方で、不思議千萬な、色出入、——變な姦通事件がございました。村入の雁股と申す處に(代官婆)と言ふ、庄屋のお婆さんと言へば、まだしをらしく聞えますが、代官婆……渾名で分りますく可恐しく權柄な、家の系圖を鼻に掛けて、俺が家はむかし代官だぞよ、と二言めには、たつみ上りに成りますので。其の了簡でございますから、中年から後家に成りながら、手一つで、先づ……俵どのを立派に育てて、此を東京で學士先生にまで仕立てました。……其處で一頃は東京住居をして居りましたが、何でも一旦徴祿した家を、故郷に打開けて、村中の面を見返すと申して、估券潰の古家を買ひまして、兩三年前から、其の俵の學士先生の嫁御、近頃で申す若夫と、二人で引籠つて居りますが。……菜大根、茄子などは料理に醬油が費、だと言ふ儉約で、葱、韭、大蒜、辣蕪と申す五葎の類を、空地中に植込んで、鹽で辨ずるのでございまして。……もう遠くから芬と、其の家が臭ひます。大蒜屋敷の代官婆。……處が若夫人、嫁御と言ふのが、福島商家の娘さんで學校をでた方だが、當世に似合はないおとなしい優しい、些と内輪過ぎますぐらゐる。尤も此でなくつては代官婆と二人住居は出来ません。……大蒜ばなれのした方で、鋤にも、鋤にも、連尺にも、婆どのに追使はれて、いたはしいほどよく辛抱なさいます。霜月の半ば過ぎに、不意に東京から大蒜屋敷へお客人がございました。學士先生のお友だちで、

此の方は何處へも勤めては居なさらない、尤も畫師ださうでございませうから、極つた勤としてはございませう。學士先生の方は、東京の一中學校で歴乎とした校長さんでございませう。——で、その畫師さんが、不意に、大蒜屋敷に飛込んで參つたのは、碌に旅費も持たずに、東京から遁出して來たのださうで。……と申しますのは——早い話が、細君がありながら、よそに深い馴染が出来ました。……それがために、首尾も義理も世の中は、さんくで、思ひ餘つて細君が意見をなすつたのを、何を！と言つて、一つ横頬を撲はしたはい、が、御先祖、お兩親の位牌にも、くらはされて然るべきは自分の方で、佛壇のある我家には居た、まらないために、其の場から門を駈出したは出たとして、知合にも友だちにも、女房に意見をされるほどの始末で見れば、行處がなかつたので、一夜しのぎに、此の木曾谷まで遁込んだのださうでございませう、遁げましたなあ。……それに、その細君と言ふのが、はじめ畫師さんには戀人で、晴れて夫婦に成るのは、此の學士先生が大層なお骨折で、そのお庇で思が叶つたと申したやうなわけださうで。……遁込み場所には屈意なものでございました。時に、弱りものの畫師さんの、その深い馴染と言ふのが、もし、何と……お艶様——手前どもへ一人でお泊りに成つた其の御婦人なんでございませう。……一寸申上げて置きますが、これは畫師さんのあとをたづねて、雪を分けておいでに成つたのではございませう。その間が雜と半月ば

かりございました。その間に、唯今申しました、姦通騒ぎが起つたのでございます。」

と料理番は一息した。

「其處で……また代官婆に變な癖がございましてな。癖より病で——或るもの知の方に承りましたのでは、訴訟狂とか申すんださうで、葱が枯れたと言つては村役場だ、小兒が睨んだと言へば交番だ。……派出所だ裁判だと、何でも上沙汰にさへ持出せば、我に理があると、それ貴客、代官婆だけに思込んで居りますのでございます。」

その、大蒜屋敷の雁股へ掛ります、この街道、棒鼻の辻に、巖穴のやうな窪地に引込んで、石松と言ふ獵師が、小兒澤山で籠つて居ります。四十親仁で、此の小僧の時は、まだ微祿をしませんに以前の……其の婆の許に下男奉公、女房も女中奉公をしたものださうで。……婆が強う家來扱ひにするのでございますが、石松獵師も、堅い親仁で、甚しく御主人に奉つて居りますので。……宵の雨が雪に成りまして、その年の初雪が思ひのほか、夜半を掛けて積りました。山の、猪、兎が慌てます。獵は恚う云ふ時だと、夜更に、のそ〜と起きて、鐵砲しらべをして、爐端で茶漬を掻食つて、手製の猿の皮の毛頭巾を被つた。筵の戸口へ、白髪を振亂して、蕎麥切色の禪……可厭な奴で、とき色の禿げたのを不斷まきます、尻端折りで、六十九歳の代官婆が、跣足で雪の中に突立ちました。(内へ怪ものが出た、来てくれせえ。)と顔色、手振で喘いで言ふので……

こんな時鐵砲は強うございしますよ、ガチリ、實弾をこめました。……舊主人の後室様がお跣足でございしますから、石松も素跣足。街道を突切つて蒜、辣薤、葱畑を、さつ〜と、化ものを見届けるのぢや、靜にと言ふ事で、婆が出て來ました納戸口から入つて、中土間へ忍んで、指されるなりに、板戸の節穴から覗きますとな、——何と、六枚折の屏風の裡に、枕を並べて、と申すのが、寢ては居なかつたさうでございします。若夫人が緋の長襦袢で、搔卷の襟の肩から這つた半身で、畫師の膝に白い手をかけて俯向に成りました。背中を男が、撫でさすつて居たのださうで。いつもは、もんべを穿いて、木綿のちゃん〜こで居る嫁御が、其の姿で、然も其のありさまでございします。石松は化もの以上に驚いたに相違ございしません。(おのれ、不義もの……人畜生。)と代官婆が土蜘蛛のやうにのさばり込んで、(やい、……動くな、その状を一寸でも動いて崩すと——鐵砲だぞよ、彈丸だぞよ。)と言ふ。にじり上りの屏風の端から、鐵砲の銃口をヌツと突出して、毛の生えた墓のやうな石松が、目を光らして狙つて居ります。

人相と言ひ、場合と申し、ズドンと遣りかねない勢でございしますから、畫師さんは面喰つたに相違ございしますまい。(天罰は立處ぢや、足四本、手四つ、顔二つのさらしものにして遣るべ。)で、代官婆は、近所の村方四軒と言ふもの、其の足でた、き起して廻つて、石松が鐵砲を向けたま、の、其のあり状をさらしました。——夜のあけ方には、派出所の巡查、檀那寺の和尚まで立會は

せると言ふ狂ひ方でございます。學士先生の若夫人と色男の畫師さんは、恚う成ると、緋鹿子の扱帯も藁すべで、彩色をした海鼠のやうに、雪にしらけて、ぐつたりと成つたのでございます。男はとにかく、嫁は眞個に、うしろ手に縛りあげると、細引を持出すのを、巡査が叱りました。が、叱られると尙ほ吼り立つて、忽ち、裁判所、村役場、派出所も村會も一所にして、姦通の告訴をする、のぼせ上るので、何處へも遣らぬ監禁同様と言ふ趣で、一先づ檀那寺まで引上げる事に成りましたが、活證據だと言張つて、嫁に衣服を着せることを肯きませんので、巡査さんが、雪のかつた外套を掛けまして、何と、しかし、ぞろ／＼と村の女小兒まであとへついて、寺へ参つたのでございますが。」

境はきつ、つ、たゞ幾度も歎息した。

「――遁がしたのでございませうな。畫師さんはその夜のうちに、寺から影をかくしました。此は然うあるべきでございます。――さて、聞きますれば、――伴の親友、兄弟同様の客ぢやから、伴同様に心得る。……半年あまりも留守を守つてさみしく一人で居る事ゆる、嫁女や、そなたも、伴と思つて、つもる話もせいよ、と申して、身じまひをさせて、衣のままで着かへさせ、寝る時は、にこ／＼笑ひながら、床を並べさせたのだと申すことで……嫁御は成程、わけしりの弟分の膝に縋つて泣きたい事もありましたらうし、藝妓でしくじるほどの畫師さんでございます、背

中を擦るぐらゐるはしかねますまい、……でございますな。

代官婆の憤り方を御察しなさらいたう存じます。學士先生は電報で呼ばれました。何と宥めても承知をしません。是非とも姦通の訴訟を起せ。いや、恥も外聞もない、代官と言へば帯刀ぢや。武士たるものは、不義ものを成敗するは却つて名譽ぢや、と恚うまで間違つては事面倒で。斷つて、裁判沙汰にしないと、生きて居らぬ。咽喉笛鐵砲ぢや、鎌腹ぢや、奈良井川の淵を知らぬか。……桔梗ヶ池へ身を沈める……此、此、この婆め、沙汰の限りな、桔梗ヶ池へ沈めますものか、身投をしようとしたら、池が投出しませう。」

と言つて、料理番は苦笑した。

「また、今時に珍しい、學校でも、倫理、道德、修身の方を御研究もなされば、お教へもなさいます、學士は至つての御孝心。豫て評判な方で、嫁御をいたはる傍の目には、些と弱過ぎると思ふほどなのでございますから、困じ果てて、何とも申しわけも面目もなければ、とに角一度、此の土地へ來て貰ひたい。萬事はその上で。と言ふ――學士先生から畫師さんへのお頼みでございます。」

さて、これは決闘状より可恐い。……勿論、村でも不義ものの面へ、唾と石とを、人間の道のためとか申して騒ぐ方が多い眞中でございますから。……どの面さげて畫師さんが奈良井へ二度

面がさらされませう、旦那。」

「これは何と言はれても来られまいなあ。」

「と言つて、學士先生との義理合では来ないわけにはまゐりますまい。處で、その畫師さんは、その時、何處に居たと思召します。……いろの事から、怪しからん、横頬を撲つたと言ふ細君の、袖のかけに、申しわけのない親御たちのお位牌から頭をかくして、尻も足もわなくと震へて居ましたので、弱つた方でございます。……必ず、連れて参ります——と代官婆に、誓つて約束をなさいまして、學士先生は東京へ立たれました。」

その上京中。その間の事なのでございます、——柳橋の蓑吉姉さん……お艶様が……こゝへお泊りに成りましたのは。……」

六

「——どんな用事の御都合にいたせ、夜中、近所が静りましてから、お艶様が、おたづねに成らうと言ふのが、代官婆の處と承つては、一人ではお出し申されません。たゞ道だけ聞けば、との事でございますけれども、おともが直接について悪ければ、垣根、裏口にでもひそみまして、内々守つて進じようで……帳場が相談をしまして、其の人選に當りましたのが、此の、不つか

な私なんでもございました。……」

お支度がよろしくばと、私、此へ……此のお座敷へ提灯を持って伺ひますと……」

「あゝ、二つ巴の紋のだね。」と、つい誘はれるやうに境が言つた。

「へい。」

と暗く、含むやうな、頤で返事を吸つて、

「よく御存じで。」

「二度まで、湯殿に點いて居て、知つて居ますよ。」

「へい、湯殿に……湯殿に提灯を點けますやうな事はございせんが、——それとも、へい。」

此の様子では、今しがた庭を行く時、此の料理番とともに提灯が通つたなどは言出せまい。

境は話を促した。

「それから。」

「些と變な氣がいたしますが。——えゝ、ざつとお支度済で、二度めの湯上りに薄化粧をなすつた、めしものの藍鼠がお顔の影に藤色に成つて見えますまで、お色の白さつたらありません、姿

見の前で……」

境が思はず振返つた事は言ふまでもない。

「金の吸口で、烏金で張つた煙管で、一寸齒を染めなかつたやうに見えます。懐紙をな、眉にあ
てて私を、おも長に御覽なすつて、

——似合ひますか。——」

「む、む。」と言ふ境の聲は、氷を頬張つたやうに咽喉に支へた。

「疊のへりが、桔梗で白いやうに見えました。

（え、勿體ないほどお似合で。）と言ふのを聞いて、懐紙をおのけに成ると、眉のあとがいま剃
立ての眞青で。……（桔梗ヶ池の奥様とは？）——（お姉妹……いや一倍お綺麗で。）と罰もあたれ、
然う申さずには居られなかつたのでございます。

こゝをお聞きなさいまし。……」

（お艶さん、何うしませう。）

「雪がちらく、雨まじりで降る中を、破れた蛇目傘で、見すばらしい半纏で、意氣にやつれた晝
師さんの細君が、男を寝取つた情婦とも言はず、お艶様——本妻が、その體では、情婦だつて工
面は悪うございます。目を煩らつて、しばらく親許へ、納屋同然な二階借りで引籠つて、内職に、
娘子供に長唄なんか、さらつて暮して居なさる處へ、思餘つて、細君が訪ねたのでございます。」

（お艶さん、私は然う存じます。私が、貴女ほどお美しければ、「こんな女房がついて居ます。何
の夫が、木曾街道の女なんぞに。」と姦通呼はりをする其の婆に、然う言つて遣るのが一番早分り
がすると思ひます。）（え、何よりですともさ。それよりか、尙ほ其上に、「お妾でさへ此のくら
るだ。」と言つて私を見せて遣ります方が、上に尙ほ奥さんと言ふ、奥行があつて可うございます。
——「奥さんのほかに、私ほどのいろがついて居ます。田舎で意地ぎたなをするもんですか。」婆
に然う言つてやりませうよ。そのお嫁さんのためにも。——

「——あとで、お艶様の、した、めもの、かきおきなどに、此の様子が見える事に、何とも何う
も、つい立至つたのでございまして。……此でございしますから、何の木曾の山猿なんか。しかし、
念のために土地の女の風俗を見ようと、山王様御參詣は、その下心だつたかとも存じられます。
……處を、桔梗ヶ池の、凄、美しいお方の事をおき、なすつて、これが時々人目にも觸れると
云ふので、自然、代官婆の目にもとまつて居て、自分の容色の見劣りがする段には、美しさで勝
つことは出来ない、と云ふ覺悟だつたと思はれます。——尤も西洋剃刀をお持ちだつたほどで。
——それで不可なければ、世の中に煩い婆、人だすけに切つたふ——それも、かきおきにござい
ました。」

雪道を雁股まで、棒端をさして、奈良井川の枝流れの、青白いつゝみを参りました。氷のやうな月が皎々と冴えながら、山気が霧に凝つて包みます。巖石、がら／＼の細谿川が、寒さに水涸れして、さら／＼さら／＼、……あゝ、丁ど、あの音、……洗面所の、あの音でございます。」

「一寸、あの水口を留めて来ないか、身體の筋々へ沁渡るやうだ。」

「御同然でございまして……えゝ、しかし、何うも。」

「一人ぢや不可いかね。」

「貴方様は？」

「いや、何、何うしたんだい、それから。」

「岩と岩に、土橋が架りまして、向うに槐の大きいのが枯れて立ちます。それが危かしく、水で揺れるやうに月影に見えました時、ジイト、私の持ちました提灯の蠟燭が煮えまして、ぼんやり灯を引きます。(暗くなる、巴が一つに成つて、人魂の黒いのが歩行くやうね。) お艶様の言葉に——私、はッとして覗きますと、不注意にも、何にも、お綺麗さに、そはつきましたか、ともしかけが乏しく成つて、かへの蠟燭を入れてございせん。——おつき申しては居ります、月夜だし、足許に差支へはございせんやうなもの、當館の紋の提灯は、一寸土地では幅が利きます。あなたのおためにも思ひまして、道はまだ半町足らず、つい一走り、駈戻りました。此が

間違でございました。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「吃驚して土手へ出ますと、川べりに、薄い銀のやうでございましたお姿が見えませぬ。提灯も何も押放出して、自分でワツと言つて駈けつきますと、居處が少しずれて、バツタリと土手腹の雪を枕に、帯腰が谿川の石に倒れておいででした。(寒いわ。)と現のやうに、(あゝ、冷い。)とおつしやると、その唇から糸のやうに、三條に分れた血が垂れました。

——何とも、かとも、おいたはしい事に——裾をつゝまうといたします、亂れ棲の友染が、色をそのまゝに岩に凍りついて、霜の秋草に觸るやうだったのでございます。——人も立會ひ、抱起し申す縮緬が、氷でバリ／＼と音がしまして、古襖から錦繪を剥がすやうで、此の方が、お身體を裂く思がしました。胸に溜つた血は暖く流れましたのに。——

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

は、魔が寄ると申します。がりく橋と言ふ、其の土橋にかゝりますと、お艶様の方では人が来るのを、よけようと、水が少いから、つい川の岩に片足おかけなすつた。桔梗ヶ池の怪しい奥様が、水の上を横に傳ふと見て、パツと臥打に狙をつけた。俺は魔を退治したのだ、村方のために。と言つて、いまもつて狂つて居ります。――

旦那、旦那、旦那、提灯が、あれへ、あ、あの、湯どのの橋から、……あ、あ、あ、旦那、向うから、私が來ます、私とおなじ男が參ります。や、並んで、お艶様が。」

境も齒の根をくひしめて、

「確乎しろ、可恐くはない、可恐くはない。……怨まれるわけはない。」

電燈の球が巴に成つて、黒くふはりと浮くと、炬燵の上に提灯がぼうと掛つた。

「似合ひますか。」

座敷は一面の水に見えて、雪の氣はひが、白い桔梗の汀に咲いたやうに疊に亂れ敷いた。

夫人利生記

瑠璃色に澄んだ中空の樹の間から、龍が圓い口を張開いたやうな、釣鐘の影の裡で、密と、美麗な婦の——人妻の——寫眞を視た時に、樹島は血が冷えるやうに悚然とした。……

山の根から湧いて流るゝ、ちよろゝ水が、丁ど此處で堰を落ちて、湛へた底に、上の鐘樓の影が映るので、釣鐘の清水と言ふのである。

町も場末の、細い道を、たら〜と下りて、づつと低い處から、又山に向つて徑の坂を廻つて上る。その窪地に當るので、淺いが谷底に成つて居る。一方は其の鐘樓を高く乗せた丘の崖で、もう秋の末ながら雜樹が茂つて、から〜と乾いた葉の中から、晝の月も、鐘の星も映りさうだが、別に札を建てるほどの名所でもない。

居まはりの、板屋、藁屋の人たちが、大根も洗へば、菜も洗ふ。葱の枯葉を掻分けて、洗濯などするのである。で、竹の笥を山笹の根に掛けて、流の落口の外に、小さな瀧を仕掛けてある。汲んで飲むものは此を飲むがよし、視めるものは、觀るがよし、即ち清水の名聞が立つ。

徑を挟んで、水に臨んだ一方は、人の小家の背戸畠で、大根も葱も植ゑた。竹のまばら垣に藤豆の花の紫がほか〜と咲いて、そこらをスラ〜と飛交はす紅蜻蛉の羽から、……いや、その

羽に乗つて、絲遊、陽炎と云ふ光ある幻影が、春の闌なる如く、浮いて遊ぶ。……

一時間ばかり前の事。——樹島は背戸畑の崩れた、此の日當りの土手に腰を掛けて憩ひつつ、

——いま言ふ——その寫眞のぬしを正のもので見たのである。……

其の前に、渠は母の實家の檀那寺なる、此の邊の寺に墓詣した。

俗に赤門寺と云ふ。……門も朱塗だし、金剛神を安置した右左の像が丹であるから、いづれにも通じて呼ぶのであらう。住職も智識の聞えがあつて、寺は名高い。

仁王門の柱に、大草鞋が——中には立つた大人の胸ぐらなるものがある——重つて、稻束の木乃伊のやうに掛つて居る事は、渠が小兒の時に見知つたのも、今もかはりはない。緒に結んだ狀に、小菊まじりに、俗に坊さん花と云ふのを挿して供へたのが——あやめ草あしに結ばむ——「奥の細道」の趣があつて、健なる神の、草鞋を飾る花たばと見ゆるまで、日に輝きつつも、何となく旅情を催させて、故郷なれば可懐しさも身に沁みる。

峰の松風が遠く靜に聞えた。

庫裡に音信れて、お慕經をど頼むと、氣輕に取次がれた住職が、納所とも小僧とも言はず、すぐに下駄ばきで卵塔場へ出向はるゝ。

かあくと、鴉が鳴く。……墓所は日陰である。苔に惑ひ、露に近つて、樹島がやゝ慌しかつたのは、餘り身輕に和尚どのが、すぐに先へ立つて出られたので、十八九年不沙汰した、塔婆の中の草徑を、志す石碑に迷つたからであつた。

紫袱紗の輪鈕を片手に、

「誰方の墓であらつしやるかの。」

少々極が悪く、……姓を言ふと、

「お、いま立つて居さつしやるのが、それぢやかの。」

「御不沙汰をいたして済みません。」

黙つて俯向いて線香を供へた。細い煙が、裏すいて亂る、ばかり、墓の落葉は堆い。濕つた青苔に蠟燭が刺つて、揺れもせず、燐寸でうつした灯がまつ直に白く昇つた。

チーン、チーン。——かあくと——と鴉が鳴く。

やがて、讀誦の聲を留めて、

「お志の御回向はの。」

「一同に何うぞ。」

先祖代々の諸精靈……願以此功德無量壇波羅蜜。具足圓滿、平等利益——南無妙……此經難持、

若暫持、我即歡喜……一切天人皆應供養。——

チーン。

「ありがたう存じます。」

「はい。」

「御苦勞様でございました。」

「はい。」

と、袖に取つた輪鈕形に脰をあげて、打傾き狀に、墓參の男を熟と視て、

「多くは故人になられたり、他國をなすつたり、久しく、御墓參の方もありません。……あんたは御縁邊であらつしやるかの。」

「お上人様。」

裾冷く、鼻じろんだ顔を上げて、

「——母の父母、兄などが、此方にお世話に成つて居ります。」

「お、」と片足、胸とともに引いて、見直して、

「これは樹島の御息かい。——それとなくおたよりは聞いて居ります。何よりも御機嫌での。」

「御僧様こそ。」

「いや、もう年を取りました。知人は皆二代、また孫の代ぢや。……併し立派に御成人ぢやな。」

「お恥かしう存じます。」

「久しぶりぢや、些と庫裡へ。——澁茶など進ぜよう。」

「かさねまして、いづれ伺ひますが、旅さきの事でございますし、それに御近所に参詣をしたい處もございますから。」

「あゝ、まだお娘御のやうに見えた、若い母さんに手を曳かれてお参りなされた、——あの、摩耶夫人の御寺へかの。」

なき、その母に手を曳かれて、小さな身體は、春秋の蝶々蜻蛉に乗つたであらう。夢のやうに覺えて居る。

「それは〜。」

と頷いて、

「また、今のほどは、御丁寧に——早速御佛前へお料具を申さう。——御子息、それならば、お静に。……あゝ、上の其の木戸はの、錠、鍵も、ぐわさ〜と壊れて居ます。開けたまゝで宜しい。あとで寺男が直しますでの。石段が缺けて草蓬々ぢや、堂前へ上らつしやるに氣を着けなされよ。」

此の卵塔は窪地である。

石を四五壇、せまり伏す枯尾花に鼠の法衣の隠れた時、ばさりと音して、塔婆近い枝に、山鴉が下りた。葉がぐれに天狗の枕のやうに見える。蠟燭を啄まうとして、人の立去るのを待つのである。

衝と衝へると、大概は山へ飛ぶから間違はないのだが、怪我に屋根へ落すと、草葺が多いから過失を爲出來ることがある。樹島は心得て吹消した。線香の煙の中へ、色を淡く分けてスツと蠟燭の香が立つと、かあ〜と堪らなさに鳴立てる。羽音もきこえて、聲の若いのは、仔鳥らしい。

「……お食り。」

それも供養に成ると聞く。こゝにも一羽、とおなじやうな色の外套に、洋傘を抱いて、ぬいだ中折帽を持添へたまゝ、葎の中を出たのであつた。

赤門寺に限らない。或は丘に、坂、谷に、徑を縫ふ右左、町家が二三軒づゝ門前にあるばかりで、殆ど寺つゞきだと言つても可い。赤門には清正公が祭つてある。北辰妙見の宮、摩利支天の御堂、辨財天の祠には名木の紅梅の枝垂れつつ咲くのがある。明星の丘の毘沙門天。蟲齒封じに箸を供ふる辻の坂の地藏菩薩。時雨の如意輪觀世音。笠守の神。日中も梟が鳴くと言ふ森の奥の

虚空藏堂。

清水の眞空の高い丘に、鐘樓を營んだのは、寺號は別にあらう、皆梅鉢寺と覺えて居る。石段を攀ぢた境内の櫻のもと、分けて鐘樓の礎のあたりには、高山植物として、慙うした町近くに殆どみだされないと稱ふる處の、梅鉢草が不思議に咲く。と言傳へて、申すまでもなく、學者が見ても、たゞ心ある大人が見ても、類は違ふであらうけれども、五瓣の小さな白い花を摘んで、小兒たちは嬉しがつたものである。——尤も十ぐらまでの小兒が、家から此處へ來るのには、お辨當が入用だつた。——それだけに思出が尙ほ深い。

いま咲く草ではないけれども、土の香を親しんで。……樹島は赤門寺を出てから、仁王尊の大草鞋を船にして、寺々の巷を漕ぐやうに、秋日和の巡禮街道。——一度此の鐘樓に上つたのであつたが、攀ぢるに急だし、汗には且つ成る、地内はいづれ佛神の垂跡に面して身がしまる。

旅のつかれも、ともに、吻と一息したのが、いま清水に向つた大根畑の縁であつた。

……遅めの午飯に、——湯で漁れる——わかさを焼く香が、淡く遠くから匂つて來た。暖か過ぎるが雨には成るまい。赤蜻蛉の羽も、もみぢを散して、青空に透通る。鐘は高く龍頭に薄霧を捲いて掛つた。

清水から一坂上り口に、薪、漬もの桶、石臼などを投遣りにした物置の破納屋が、炭焼小屋

に見えるまで、あたりは靜に、人の往來はまるでない。

月の夜は此の納屋の屋根から霜に成るであらう。その石臼に縋つて、嫁菜の咲いたも可哀である。

あゝ、桶の籠に尾花が亂る。此の麗かさにも秋の寂しさ……

樹島は歌も句も思はずに、畑の土を、外套の背にすりこつて、半ば寝つつも、金剛神の草鞋に乗つた心持に恍惚した。

ふと鳥影が……影が翳した。其處に、つい目の前に、しなやかな婦が立つた。何、……紡績らしい緋の一枚着に、めりんす友染と、縷子の幅狭な帯をお太鼓に、上から紐でしめて、襷せた桃色の襷掛け……などと言ふより、腕露呈に、肱を一杯に張つて、片脇に盥を抱へた……と言ふ方が早い。洗濯をしに來たのである。道端の細流で洗濯するのに、なよやかななどと言ふ姿はない。——ないのだが、見ただけでなよやかで、盥に力を入れた手が、霞を溶いたやうに見えた。白やかな膚を徹して、骨まで美しいのであらう。しかも、素足に冷めし草履を穿いて居た。近づくのに、音のしなかつたのも頷かれる。

婦は、水ぎはに立停まると、洗濯盥——盥には道草に手打つたらしい、嫁菜が一束挿してあつた——それを石の上へこゝみ腰におろすと、すつと柳に立直つた。日あたりを除けて來て、且つ

「御免なさい。」

「何うもありがたう——尋ねたいにも人通りがないので困つて居ました。——お庇様で……」

を指して、

「その坂をなぞへにお上りなさいますと、——戸がしまつて居りますが、二階家が見えませう。

「ね、その奥に、あの黒く茂りましたのが、虚空藏様のお寺でございます。ちやうどその前の

「蓮行寺と申しますのは？」

「は、」

「失禮ですが、一寸伺ひます——旅のものですか。」

仁王の草鞋の船を落ちて、樹島は腰の土を拂つて立つた。面はいつの間にか伸びて居る。

汗ばんだらしい、姉さん被りの手拭を取つて、額よりは頸脚を軽く拭いた。や、俯向けに成つた頸は雪を敷く。……手拭を口に銜へた時、それとはなしに、面を人に打蔽ふ風情が見えつつ、眉を優しく、斜たちの横顔の、瞳の濡々と黒目勝なのが、ちらりと樹島に移つたやうである。颯と睫毛を濃く俯目に成つて、頸のおくれ毛を眩白く搔上げた。——漆にちらめく雪の蒔繪の指さきの沈むまで、黒く房りした髪を、耳許清く引詰めて櫛巻に結つて居た。年紀は二十五六である。すぐに、手拭を帯に挟んで——岸からすぐに俯向くには、手を差伸しても、流は低い。石段が出來て居る。苔も草も露を引いて皆青い。それを下り状に、ふと猶豫つたやうに見えた。あ、これは心ないと、見て居るものの心着く時、襦を取つて高く端折つた。婦は誰も長襦袢を着て居るとは限らない。たゞ一重の布も、膝の下までは蔽はないで、小股をしめて、色薄く縊りつつ、太脛が白く滑かにすらりと長く流に立つた。

「ひた／＼と絡る水とともに、ちら／＼と紅に目を遮つたのは、倒に映ると言ふ釣鐘の龍の炎ではない。脱棄てた草履に早く戯る、一羽の赤蜻蛉の影でない。崖のくづれを雑樹また藪の中に、月夜の骸骨のやうに朽亂れた古卒堵婆のあちこちに、燃えつつ曼珠沙華が咲残つたのであつた。婦は人間離れをして麗しい。」

此の時、久米の仙人を思出して、苦笑をしないものは、われらの中に多くはあるまい。

「お静におまるりをなさいまし……御利益がございますわ。」
と、嫁菜の花を口許に、臉をほんのり莞爾した。
——此の婦人の寫真なのである。

寫眞は、蓮行寺の摩耶夫人の御堂の壇の片隅に、千枚の歌留多を亂して積んだやうな寫眞の中から見出された。たとへば千枚千人の婦女が、一人づつ、皆嬰兒を抱いて居る。お産の祈願をしたものが、禮詣りに供ふるので、即ち活きたまゝの繪馬である。胸に抱いたのも、膝に据ゑたのも、中には背に負したまゝ、兩の掌を合せたのもある。が、胸をはだけたり、乳房を含ませたりしたのは、さすがにないから、何も蔽はず、寫眞はあからさまに成つて居る。しかし、婦ばかりの心だしなみで、いづれも伏せてある事は言ふまでもない。

此の寫眞が、いま言つた百人一首の歌留多のやうに見えるまで、御堂は、金碧蒼然としつつ、漆と朱の光を沈めて、月影に青い錦を見るばかり、嚴に端しく、清らかである。

御厨子の前は、縦に二十間がほど、五壇に組んで、紅の袴、白衣の官女、烏帽子、素袍の五人囃子のないばかり、きらびやかなる調度を、黒棚よりして、膳部、轎の車まで、金高蒔繪、青貝を鏤めて隙間なく並べた雜壇に較べて可い。たゞ緋毛氈のかはりに、敷妙の錦である。

盡く、これは土地の大名、城内の摺紳、豪族、富商の奥よりして供へたものだと聞く。家々の紋づくしと見れば可い。

天人の舞樂、合天井の紫のなかば、古錦襪の天蓋の影に、黒塗に千羽鶴の蒔繪をした壇を据ゑて、紅白、一つおきに布を積んで、媚かしく堆い。皆新しい腹帯である。志して詣でた日に、折から其の紅の時は女の兒、白い時は男の兒が産れると傳へて、順を亂すことをしないで受けるのである。

右左に大な花瓶が据つて、此處等あたり、花屋凡そ五七軒は、圍の穴藏を拂つたかと思はれる見事な花が夥多しい。白菊黄菊、大輪の中に、桔梗がまじつて、女郎花のまだ枯れないのは、功德の水の恵であらう、末葉も落ちず露がしたゝる。

時に、腹帯は紅であつた。
渠が詣でた時、蠟燭が二挺灯つて、その腹帯臺の傍に、老女が一人、若い圓鬢のと睦じさうに拜んで居た。

しばらくして、戸口で又珠數を揉頂いて、老女が前に、その二人が歸つたあとは、本堂、脇堂にも誰も居ない。

こゝに註して置く。都會にはない事である。此のあたりの寺は、何處にも、へだて、戸じまり

を置かないから、朝づとめよりして夕暮までは、諸天、諸佛。——中にも爾く端麗なる貴女の奥殿に伺候するに、門番、諸侍の面倒は聊かもないことを。

寺は法華宗である。

祖師堂は典正なのが同一棟に別にあつて、幽嚴なる夫人の廟より其の御堂へ、細長い古壘が欄間の黒い虹を引いて續いて居る。……廣い廊下は、霜のやうに冷うして、虚空藏の森をうけて寂然として居た。

風すかしに細く開いた琴柱窓の一つから、森を離れて、松の樹の姿のいゝ、赤土山の峰が見えて、色が秋の日に白いのに、向越の山の根に、きら／＼と一面の姿見の光るのは、遠い湖の一部である。此方の麓に薄もみぢした中腹を弛く繞つて、巳の字の形に一つ廻つた青い水は、町中を流る、川である。町の上には霧が掛つた。その霧を抽いて、青天に聳えたのは昔の城の天守である。

聞け——時に、この虹の欄間に掛けならべた、押繪の有名な額がある。——いま天守を敍した、其の城の奥々の婦人たちが丹誠を凝した細工である。

萬亭應賀の作、豊國畫。錦重堂板の草双紙、——その頃江戸で出版して、文庫藏が建つたと傳ふるまで世に行はれた、釋迦八相倭文庫の挿畫のうち、摩耶夫人の御ありさまを、繪のまゝ、羽二

重と、友染と、綾、錦、また珊瑚をさへ鏤めて肉置の押繪にした。……

淨飯王が狩の道にて——天竺、天臂城なる豪貴の長者、善覺の妹姫が、姉君嬌曇彌とともに、はじめに見ゆる處より、優陀夷が結納の使者に立つ處、のちに、嬌曇彌が嫉妬の處。やがて夫人が、一度、幻に未生のうなる子を、病中のいためる御胸に、抱きしめ給ふ姿は、見る目にも痛ましい。その肩にたれつつ、みどり兒の頸を蔽ふ優しき黒髪は、いかなる女子のか、活髪をそのままに植ゑてある。……

われら町人の爺媼の風説であらうが、嬌曇彌の呪詛の押繪は、城中の奥のうち、御臺、正室ではなく、却つて當時の、側室、愛妾の手に成つたのだと言ふのである。しかも、その側室は、繪をよくして、押繪の面描は皆その彩筆に成つたのだと聞くのも意味がある。

夫人の姿像のうちには、胸や、あらはに、あかんぼのお釋迦様を抱かるゝのがあるから、——

この押繪のうちに、夫人が姿見のもとに、黒塗の蒔繪の盥を取つて手水を引かるゝ一面がある。眞珠を雪に包んだやうな、白羽二重で、膚脱の御乳のあたりを装つてある。肩も背も半身の膚あらはにおはする。

牙の六つある大白象の背に騎して、兜率天よりして雲を下つて、白衣の夫人の寢姿の夢まくら

に立たせたまふ一枚のと、一面や、大なる額に、かの藍毘尼園中、池に青色の蓮華の開く處。無憂樹の花、色香鮮麗にして、夫人が無憂の花にかざしたる右の手のその袖のまゝ、釋尊降誕の一面とは、ともに城の正室の細工ださうである。

面影も、色も變黷いて、欄間の雲に浮出づる。影はさゝぬが、香にこぼれて、後にひかへつとも、疊の足はおのづから爪立たれた。

疊廊下を引返し状に、敷居を出る。……夫人廟の壇の端に、その寫眞の數々が重ねてあつた。押繪のあとに、時代を違へた、寫眞を覗くのも學問である。

清水に洗濯した美女の寫眞は、たゞその四五枚めに早く目に着いた。圓髻にこそ結つたが、羽織も着ないで、女の兒らしい嬰兒を抱いて、寫眞屋の椅子にかけた像は、寸分の違ひもない。

恚うした寫眞は、公開したもおなじである。産の安らかさに、兒のすこやかさに、いづれ願ほどにあやかると、その一枚を選んで借りて、ひそかに持歸る事を許されて居る。たゞし遅速はおいて、複寫して、夫人の御人々御中に返したてまつるべき事は言ふまでもなからう。

今日は方々にお賽銭が多い。道中の心得に、新しく調へた懷中に半紙があつた。

目の露したゝり、口許も綻びさうな、寫眞を取つて、思はず、四邊を見て半紙に包まうとした。トタンに人氣勢がした。

樹島はバツとあかくなつた。

猛然として憶起した事がある。八歳か、九歳の頃であらう。雛人形は生きて居る。雛市は彌生ばかり、たとへば古道具屋の店に、其の姿があるとする。……心を籠めて、ぢつと凝視るのを、毎日のやうに、凡そ七日十日に及ぶと、思入つた其の雛、その人形は、莞爾と笑ふと言ふのを聞いた。——時候は覺えて居ない。小學校へ通ふ大川の橋一つ越えた町の中に、古道具屋が一軒、店に大形の女雛ばかりが一體あつた。藤長けた美しさは註するに及ぶまい。——樹島は學校のかへりに極つて、半時ばかりづゝ熱と凝視した。

目は、三日四日めから、もう動くやうであつた。最後に、その唇の、幽冥の境より霞一重に暖かいやうに莞爾した時、小兒はわななくと手足が震へた。同時である。中仕切の暖簾を上げて、姉さんだか、小母さんだか、綺麗な、容子のいゝのが、すつと出て来て、「坊ちゃん、あげませう。」と云つて、待て……その雛ではない。定紋つきの塗長持の上に据ゑた緋の袴の雛のわきなる柱に、矢をさした鞆と、細長い瓢箪と、靈芝のやうなものと一所に掛けてあつた、——さ、此れが變だ。のちに思つても可思議なのだが、……くれたものと言ふと拂子に似て居る、木の柄が、草石蠶のやうに巻きぼりして、蝦色に塗つてあるさきの處に、一尺ばかり革の紐がばらりと一束ついて居る。繪で見た大將が持つ采配を略したやうな、何にするものだか、今もつて解らない。

が、町々辻々に、小兒と云ふ小兒が、皆おもちやを持つて、振つたり、廻したり、空を拂いたりして飛廻つた。半年ばかりですたれたが、一種の物妖と稱へて可からう。持たないと、生効のないほど欲しかつた。が樹島にはそれがなかつた。それを、夢のやうに與へられたのである。

橋の上を振廻して、空を切つて駈戻つた。が、考へると、……化拂子に尾が生えつつ、宙を飛んで追駈けたと言はねば成らない。母のなくなつた、一周忌の年であつた。

父は兒の手の化ものを見ると青くなつて震へた。小遣錢をなまで持たせないその兒の、盗心を疑つて、怒つたよりは恐れたのである。

眞偽を道具屋にたしかめるために、祖母がついて、大橋を渡る半ばで、母のおくつきのある山の峰を、孫のために拜んだ、小兒も小さな両手を合せた。此時の流の音の可恐さは大地が裂けるやうであつた。「あ、然うとは知りませぬ。——小兒衆の頑はない、欲しいものは欲しからうと思つて進せました。……毎日見てござつたは雛ぢやつたか。——それはく。……此の雛は些と大金のものゆゑに、進上は申されぬ——お邪魔でなくば其の玩弄品は。」と、確と祖母に向つて、道具屋が言つてくれた。が、しかし、その時は綺麗な姉さんでも小母さんでもない。不精髯の胡麻鹽の親仁であつた。唯、ばけものは、人の慾に憑いて邪心を追つて來たので、優い婦は幻影ばかり。道具屋は、稚いのを憐れがつて、嘘で庇つてくれたのであらうも知れない。——思出す

たびに空恐ろしい氣が何時もする。

——おなじ思が胸を打つた。同時であつた、——人氣勢がした。——

御廚子の裏へ通ふ板廊下の正面の、簾すかしの觀音びらきの扉が半ば開きつつ薄明い。……それを斜にさし覗いた、半身の氣高い婦人がある。白衣に緋を重ねた姿だと思へば、通夜の籠室に居合せた女性であらう。小紋の小袖に丸帯と思へば、寺には、よき人の嫁ぐならひがある。——あとで思ふとそれも臆である。あの、幻の道具屋の、綺麗な婦のやうでもあつたし、襦袢姿振袖の額の押繪の一體のやうにも思ふ。……

瞬間には、たゞ見られたと思ふ心を、棒にして、前後も左右も顧みず、衝々と出、その裳に兩手をついて跪いた。

「小兒は影法師も授りません。……たゞあやかりたう存じます。——寫眞は……拜借出来るのでございませうか。」

舌はこゝで爛れても、よその女を戀ふるとは言へなかつたのである。

「どの、お寫眞。」

と朗に、しつとり聞えた。おおよそ、妙なるものごしとは、此の時言ふべき詞であつた。

「は、」

と載せたまゝ、白紙を。

「お持ちなさいまし。」

あなたの手で、スツと微かな、……二つに折れた半紙の音。

「は、は。」

と額に押頂くと、得ならず艶なるものの薫に、魂は空になりながら、恐怖と恥とに、渠は、するすると膝で退つた。

よろりと立つ時、うしろ姿がすつと隠れた。

外套も帽も引摺んで、階を下りる、足が迂る。其處へ身體ごと包むやうな、金剛神の草鞋の影が、髣髴として顯れなかつたら、渠は、此の山寺の石の壇を、徑へ轉落ちたに相違ない。

雛の微笑さへ、蒼穹に、目に浮んだ。金剛神の大草鞋は、宙を踏んで、渠を坂道へ樞り落した。清水の向島のくづれ土手へ、萎々と成つて腰を支いた。前刻の婦は、勿論の事、もう居ない。

が、まだいくらほどの時も経たぬと見えて、人の來て汲むものも、茶を洗ふものもなかつたのである。

ほか／＼とおなじ日向に、藤豆の花が目を圓く渠を見た。……あの草履を翫つたのが羨しい……赤蜻蛉が笑つて居る。

「見せようか。」

仰向けに、鐘を見つづ、そこをちら／＼する蜻蛉に向つて、自棄に言つた。

「いや、……自分で拜まう。」

時に青空に霧をかけた釣鐘が、忽ち黒く頭上を蔽うて、破納屋の石臼も眼が窪み口が缺けて鬮體のやうに見え、曼珠沙華も鬼火に燃えて、四邊が眞暗に成つたのは、眩く心地がしたからである。——如何に、如何に、寫眞が歴々と胸に抱いて居た、毛絲帽子、麻の葉鹿の子のむつぎの嬰兒が、美女の袖を消えて、拭つて除つたやうに、なくなつて居たのであるから。

樹島は殆ど目をつむつて、まじぐらに摩耶夫人の御堂に駈戻つた。敢て目をつむつてと言ふ、金剛神の草鞋が、彼奴の尻をたゞき戻した事は言ふまでもない。

夫人の壇に戻し參らせた時は、伏せたまゝでソと置いた。嬰兒が、再び寫眞に戻つたか何うかは、疑ふだけの勇氣はなかつたさうである。

「いや、何といたしまして。……棚に、其處にござります。金、極彩色の、……は、其方の素木彫の。……いや、何といたして、古人の名作。ど、ど、どれも諸家様の御秘藏にござりますが、少々、修覆をいたす處がありまして、お預り申して居りますので。——はい、店口にござりま

す、その紫の袈裟を召したのは私が刻みました。祖師のお像でござりますが、喜撰法師のやうに見えます處が、業の至りませぬ、不束ゆゑで。」

と、淳朴な佛師が、や、啞つて口重く、まじりと云ふ。

しかし此は、工人の器量を試みようとして、棚の壇に飾つた佛體に對して試に聞いたのではない。もう此の時は、樹島は既に摩耶夫人の像を依頼したあとだったのである。

一山に寺々を構へた、その一谷を町口へ出はづれの窮路、陋巷と言つた細小路で、むれるやうな濕氣のかびの一杯に臭ふ中に、芬と白檀の薫が立つた。小さな佛師の家であつた。

一小間硝子を張つて、小形の佛龕、塔のうつし、その祖師の像などを並べた下に、年紀はまだ若さうだが、額のぬけ上つた、そして圓顔で、眉の濃い、目の柔和な男が、道の向うさがりに大きな塵塚に對しつ、口をへの字形に結んで泰然として、胡坐で細工盤に向つて居た。「少々拜見を、」と云つて、樹島は靜に土間へ入つて、——あとで聞いた預りものだと云ふ佛、菩薩の種々相を禮しつ、たゞ試みに承りたい。大な此のくらの像を一體は。」とおほよその値段を當つた。——冷々とした侘住居である。木綿縞の膝掛を拂つて、筒袖のどんつくを着た膝を居り直つて、それから挨拶した。そつときいて、……内心恐れた工料の、心づもりよりは五分の一だつたのに勢を得て、すぐに一體を誂へたのであつた。——

「……なれども、おみだしに預りました御註文……別して東京へお持ちに成ります事で、なりたけ、丹、丹精を抽んでまして。」

と吃つて言ふ。

「あなた、佛様に御丹精は、それは實に結構ですが、お禮がお禮なんですから、お骨折では却つて恐縮です。——それに、……唯今も申しました通り、然るべき佛壇の用意もありません。勿體なくありません限り、床の間か、戸袋の上へでもお据ゑ申さうと思ひますから、かた／＼草双紙風俗にとお願ひ申したほどなんです。——本式ではありません。切利天のお姿では勿體ないと思ふのですから。……お心安く願ひます。」

「はい、一應は心得ましてござります。尙ほ念のために伺ひますが、それでは、むかし御殿のお姫様、奥方のお姿でござりますな。」

「草双紙の繪ですよ。本があると都合がいゝな。」

樹島は卷蓆を吸ひさして打案じつつ、

「倭文庫。……」

「え、え、釋迦八相——師匠の家にございまして、私よく見まして存じて居ります。いや、何うも。……」

と胸を抱くやうに腕を拱んで、
「小僧から仕立てられました、……その師匠に、三年あとになくなられてな。杖とも柱とも頼みましたものを、とんと途方に暮れて居ります。漸と昨年、眞似方の細工場を持ちました。ほんの新店でござります。」

「もし、
と、仕切一つ、薄暗い納戸から、優しい女の聲がした。

「端本になりましたけれど、五六冊ございましたよ。」

「お、然うか。」

「いや、いまお捜しには及びません。」

様子を察して樹島が框から聲を掛けた。

「は、つい。」

「お乳。」

と可愛い小児の聲する。……

「め、覺めて。はい……お乳あげませうね。」

「の、様、おつぱい。……の、様、おつぱい。」

「まあ、の、様ではありません、母ちゃんよ。」

「う、む、欲くないの、坊、のんだの、の、様のおつぱい。——お雛様のやうな、の、様のおつ

ぱい。」

「おや、夢を御覽だね。」

樹島は肩の震ふばかり胸にこたへた。

「嬢ちゃんですか。」

「え、もう、年弱の三歳に成りますが、え、もう、はや——あ、何、お茶一つ上げんかい。」

唯、茶卓に注いで出した。

「あ、」

清水にきぬ洗へる美女である。先刻のま、で、洗ひさらした銘仙の半纏を引掛けた。

「先刻は。」

「まあ、あなた。」

「お目にかゝつたか。」

「え、梅鉢寺の清水の處で、——あの、摩耶夫人様のお寺をおき、なさいました。」

渠は冷い汗を流した。知らずに聞いた路なではなかつたのである。

「御信心でございますわね。」

と、熟と見た目を、俯目にぼつと染めた。

むつくりとした膝を敲いて、

「それは御縁ぢや——ますく、丹、丹精を抽んでますで。」

「あ、こちらの御新姐ですか。」

と、吻として、うつかり言ふ。

「いや、え、その……師、師匠の娘でござりまして。」

「何ですな、——ねえ、……坊や。」

と、敷居の内へ……片手づきに、納戸へ背向に面を背けた。

樹島は謝禮を差出した。出来の上で、と辭して肯ぜぬのを、平にと納めさすと、きちやうめん

に、硯に直つて、ごしくと墨をあたつて、席書をするやうに、受取を——

記

一金……圓也

「ま、ま、摩……耶の字？……あ、分りました。」

「御主人。」

と樹島が手を舉げて、

「夫人のお名は、金員の下でなく、並べてか、……上の方へ願ひます。」

「あ、あ、あひ分りました。」

「御丁寧に……では、何うぞ。……決して口を出すではありませんが、お顔を何うぞ、なり

たけ、お綺麗になすつて下さい。……お仕事の法にかなはないかは分りませんが。」

「あ、いえ。——何よりも御容貌が大切でござります。——赤門寺のお上人は、よく店へお立

寄り下さいますが、てまへどもの方の事にも、それはお悉しうござりましたな。……お言には——

「相好説法——と申して、それぐの備つたおん方は、唯お顔を見たばかりで、心も、身も、命

も、信心が起るのぢやと申されます。——わけて、御女體、それはもう、端麗微妙の御面相でな

ければあひなりません。——……てまいたゞ、力、力が、腕、腕がござりませうか、いかゞかと

存じまするのみでして、は、はい。」

樹島は、たゞ一目散に停車場へ駈つけて、一いきに東京へ遁げかへる覺悟をして言つた。

「御新姐の似顔ならば本懐です。」

十二月半ばである。日短かな暮方に、寒い縁側の戸を引いて——震災後のたてつけのくるひの

ため、しまりがつかない——竹の心張棒を構はうとして、柱と戸の棧に、カッと極め、極めはづした不思議のはずみに、太い竹が篠のやうにびしやつと撓つて、右の手の指を二本打みしやいだ。腕が碎けたかと思つた——氣が遠くなつたほどである。此の前日、夫人像出来、道中安全、出荷と言ふ、はがきの通知をうけて居た。

のち二日目の午後、小包が届いたのである。お醫師を煩はすほどでもなかつた。が、繻帯した手に、待ちこがれた包を解いた、眞綿を幾重にも分けながら。

両手にうけて捧げ参らす——罰當り……頬を、唇を、と思つたのが、面を合すと、佛師の若き妻の面でない——幼い時を、そのまゝに、夢にも忘れまじき、なき母の面影であつた。

樹島は、ハツと、眞綿に据ゑたまゝ、蒼白く成つて飛退つた。そして、両手をついた。指はツキツキと身に應へた。

更めて、心着くと、あゝ、夫人の像の片手が、手首から裂けて、中指、薬指が細々と、白く、葦のやうに落ちてゐた。

此の御慈愛なかりせば、一昨日片腕は折れたであらう。渠は胸に抱いて泣いたのである。尙ほ佛師から手紙が添つて——山妻云々とお言、或はお戯でなかつたかも存せぬが、……し

ごとのあひだ、赤門寺のお上人が四五度もしばく見えて、一定それに擬へ候やう、御許様のお母様の佛を、おぼろげならず申傳へられましたるゆゑ——と此の趣であつた。

——樹島の事をこゝに記して——
筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なほ夫人堂など、兩三度、摩耶夫人の御像を寫さうとした。い

ままた繰返しながら、その面影の影らしい影をさへ、描き得ない拙さを、恥ぢなければならぬ。
……

光

籃

田舎の娘であらう。縞柄も分らない筒袖の古浴衣に、煮染めたやうな手拭を頬被りして、水中に立つたのは。……それを其のまゝに見えるけれど、如何に奇を好めばと云つても、女の形に案山子を拵へるものはない。

盃蘭盆すぎの良い月であつた。風はないが、白露の蘆に満ちたのが、穂に似て、細流に揺れて、雫が、青い葉、青い莖を傳つて、點滴るばかりである。

町を流るゝ大川の、下の小橋を、もつと此處は下流に成る。やがて渦へ落ちる川口で、此の田つゞきの小流との間には、一寸高く築いた塘堤があるが、初夜過ぎて町は遠し、村も静つた。場末の湿地で、藁屋の佻しい處だから、塘堤一杯の月影も、破窓をさす貧しい臺所の棚の明るい趣がある。

遠近の森に棲む、狐か狸か、と見るのが相應しいまで、ものさびて、のそくと歩行く犬さへ、梁を走る古鼠かと疑はるゝのに――

ざぶり、 ざぶり、 ざあ――

ざぶり、 ざぶり、 ざあ――

小豆あらひと云ふ變化を想はせる。……夜中に洗濯の音を立てるのは、小流に浸つた、案山子同様の其の娘だ。……

霧の這ふ田川の水を、ほの白い、箆で掻きく、泡沫を薄青く掬ひ取つては、細帯につけた畚の中へ、ト腰を捻り狀に、ざあと、光に照らして移し込む。

ざぶり、 ざぶり、 ざあ――

おなじ事を繰返す。腰の影は蘆の葉に浮いて、さながら黒く踊るかと思えた。

町の方から、がや／＼と、婦まじりの四五人の聲が、浮いた登音とともに塘堤をつたつて、風の留つた影燈籠のやうに近づいて、

「何だ、何だ。」

「あゝ、行つてるなあ。」

と、なぞへに蘆の上から、下のその小流を見て、一同に立留つた。

「うまく行るぜ。」

「眞似をする處は、狐か、狸だらうぜ。それ、お前によく似て居らあ。」

「可厭。」

と甘たれた聲を揚げて、男に摺寄つたのは少い女で。

「獺だんべい、水の中ぢや。」

と、いまの若いものの聲に浮かれた調子で、面を澁黒くニヤ／＼と笑つて、あとに立つたのが、のそ／＼と出たのは、一挺の船と、かんでらをぶら下げた年倍な船頭である。

此の唯一つの灯が、四五人の真中へ入つたら、影燈籠は、再び月下に、其のまゝくる／＼と廻るであらう。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶり、

ざあ——

髪を當世にした、濃い白粉の大柄の年増が、

「おい、姉さん。」

と、肩幅廣く、塘堤ぶちへ顯はれた。立女形が出たから、心得たのであらう、船頭め、かんでらの灯を、其の胸のあたりへ突出した。首拔の浴衣に、浅葱と紺の石松の伊達巻ばかり、寝衣のなりで來たらしい。恚う照されると、眉毛は濃く、顔は大い。此處から餘り遠くない、場末の某座に五日間の興行に大當りを取つた、安來節座中の女太夫である。

あとも一座で……今夜、五日目の大入を刎ねたあとを、涼みながら船を八葉瀉へ浮べようとして出て來たのだが、しこみものの鮨、煮染、饅づめの酒で月を見るより、心太か安いアイスクリームで、蚊帳で寝た方がいゝ、あとの女たちや、雑用宿を宿場へ浮れ出す他の男どもは誰も來

ない。また來ない方の人數が多かつた。

「おい、お前さん。」

と、太夫の年増は、つゞけて鷹揚に、娘を呼んだ。

流の案山子は、……ざぶりと、手を留めた。が、少しは氣取りでもする事か、棒杭に引かつた菜葉の如く、たくしあげた裾の上へ、据腰に箆を構へて、頬被りの面を向けた。目鼻立は美しい。で、濡れ／＼として艶ある脛は、蘆間に眠る白鷺のやうに霧を分けて白く長かつた。

「感心——なか／＼うまいがね、少し手が違つてるよ。……さん子さん、一寸唄つてお遣り。村方で眞似をするのに、いゝ手本だ。……まうけさして貰つた禮心に、ちゃんとした處を教へてあげよう。置土産さ、さん子さん、お唄ひよ。」

「可厭、獺に。……氣味が悪いわ、口うつしに成るぢやないの。」

と少いのが首とともに肩を振る。

「獺に教へれば、藝の威光さ。ぢやあ、私が唄ひながら。——可いかい、——安來千軒名の出た處……」

もう尤も微酔機嫌で、

光 藍

「さあ、遣つて御覽よ。……鱸すくひさ。」

「ほ、ほ。」

と娘は唯笑つた。

月にも、霧にも、流の音にも、一座の聲は、果敢なき蛾のやうに、ちら／＼と亂るゝのに、娘の笑聲のみ、水に沈んで、月影の森に遠く響いた。

「一寸、お遣りつたら。」

「ほ、ほ。」

「笑つてないでさ、可いかい。——鱒すくひの骨髓と言ふ處を教へるからよ。」

「あれ、私はな、鱒すくひのでござんせぬ。」

「おや、何をしてるんだね。」

「お月様の影を掬ひますの。」

と空を仰いで言つた。蘆の葉の露は輝いたのである。

「月影を……」

「あは、などと言つて、此奴、色男と共稼ぎに汚穢取りの稽古で居やがる。」

と色の黒い小男が笑出すと、角面の薄化粧した座長、でつぶりした男が、

「月を汲んで何にするんだ。」

「はあ、暗の夜の用心になあ。」

此奴は薄馬鹿だと思つたさうである。後での話だが——些と狐が憑いて居るとも思つたさうで。

……そのいづれにせよ、此の容色なら、肉の白さだけでも、容は引ける。金まうけと、座長の角面はさつそくに思慮した。且つ誘拐ふに術は要らない。

「分つた／＼、えらいよお前は——暗夜の用心に月の光を掬つて置くと、笹の目から、ざあ／＼洩ると、畚から、ぼた／＼流れると、ついでに愛嬌はこぼれると、な。……此の位世の中に理窟の分つた事はねえ。感心だ。——處でな、おい、姉え。おなじ月影を汲むなら、そんなぢよろ／＼水でなしに、瀉へ出て、そら、ほつと霧のかゝつた、あの、其處の山ほど大きく汲みな。一所に來な、連れて行くぜ。」

女太夫に目くばせしながら、

「俺たちは、その月を見に瀉へ出るんだ。——一所に來なよ、御馳走も、うんとあらあ。」

「ほう、來るか／＼、猫よりもおとなしい。いまのまに出世をするぜ、い、娘だ、い、娘だ。」

と黒い小男が囁した。

光
籃
娘は、もう蘆を分けて出たのである。露にしつとりと萎へた姿も、水には濡れて居なかつた。すぐ川堤を、十歩ばかり戻り氣味に、下へ、大川へ下口があつて、船着に成つて居る。時に三

艘ばかり流に並んで、岸の猫柳に浮いて居た。

(三界萬靈、諸行無常)

鼠にぼやけた白い旗が、もやひに搦んで、ひよろ／＼と漾ふのが見えた。

「おや／＼、塔婆も一本、流れ灌頂と云ふ奴だ。……大變なものに乗せるんだな。」

座長が眞さきのにのりかゝつて、ぎよつとした。三艘のうちの、一番大形に見える眞中の船であつた。

が、船べりを舐めて這ふやうに、船頭がかんてらを入れたのは、端の方の古船で。

「旦那、此方だよ。……へい、其は流れ灌頂ではござりませぬえ。昨日、孟蘭盆で川施餓鬼がござりましたでや。」

「流れ灌頂と兄弟分だ。」

「可厭だわねえ。」

「一蓮托生と、さあ、皆乗つたか。」

と座長が捌く。

「小父さん、船幽霊は出ないこと。」

と若い女が、ぢやぶ／＼、ぢやぶ／＼と乗出す中に、怯えた聲する。

兀げたのだらう。月に青道心のやうで、さつきから黙り家の老人が、

「船幽霊は大海のものだ。湯にはねえなあ。」

「あれば生擒つて錢儲けた。」

ぎい、ちよん、ぎい、ちよんと、堤の草に蟋蟀の紛れて鳴くのが、やがて分れて、大川に唯鶺の音のみ、ぎい、と響く。ぎよ、ぎよつと鳴くのは五位鶺だらう。

「なむあみだぶつ。あゝ、いゝ月だ。」

と寂しく掉つた、青道心の爺の頭は、ぶくりと白茄子が浮いたやうで、川幅は左右へ展げ、船は霧に包まれた。

「變な、月のほめやうだな、はゝゝ。」

と座長は笑ひ消しつ、

「おい、姉や、何うした。」

と言ふ。水しやくひの娘は、剥いた玉子を包みあへぬ、あせた緋金巾を搔合せて、鵜が赤い魚を銜へたやうに、舳にとぼんと留つて薄黒い。通例だと卑下をしても、あとから乗つて艦の方にあるべき筈を、勝手を知つた土地のものの所爲だらう。出しなに、川施餓鬼で迷つた時、船頭が入れたかんてらの火より前に乗つて、舳にちよこなんと控へたのであつた。

實は、此は心すべき事だつた。……船につくあやかしは、魔の影も、鬼火も、燃ゆる燐も、可
恐き星の光も、皆、ものの尖端へ来て掛るのが例だと言ふから。

やがて、其の驗がある。

時に、さすがに、娘氣の慇懃心か、あらためて呼ばれたので、頬被りした手拭を取つて、俯む
いた。

「あら、きれい。」

「まあ、光るわねえ。」

安來ぶしの婦は、驚駭の聲を合せた。

「一寸、何、其の簪は。」

銀杏返もぐしやくくに、掴んで束ねた黒髪に、琴柱形して、晃々と猶ほ月光に照映へる。

「お見せ。……とも言はず、女太夫が、間近から手を伸すと、逆らふ状もなく、頬を横に、鬢を

柔順に、膝の皿に手を置いて、

「ほ、ほ、ほ。」

と、薄馬鹿が馬鹿笑に笑つたのである。

年増は思はず、手を引いて、

「え、何だねえ、氣味の悪い。」

生暖い、腥い、いやに冷く、かび臭い風が、颯と渡ると、箕で溢すやうに月前に灰汁が掛つた。

川は三つの瀬を一つに、どんよりと落合つて、八葉瀉の波は、なだらかながら、八つに打つ：

星の洲を埋んだ銀河が流れて漂渺たる月界に入らんとする、恰も瀉へ出口の處で、その一陣の

風に、曇ると見る間に、群りかさなる黒雲は、さながら裾のなき瀧の虚空に漲るかど怪まれ、暗

雲忽ち陰慘として、灰に血を交ぜた雨が飛んだ。

「船頭さんく。」

「お船頭々々。」

と青坊主は、異變を恐れて、船頭に敬意を表した。

「苦があるで。」

「や、苦どころかい。」

「あれ、降つて來た、降つて來た。」

聲を聞いて、飛ぶ鷺を想つたやうに、浪の羽が高く煽る。

「着ける、着ける、早くつけてくれ。」

光
晝は瀉魚の市も小さく立つ。——村の若い衆の遊び處へ、櫓數三十とはなかつたから、船の難

はなかつた。が、堤尻を駈上つて、掛茶屋を、やゝ念入りな、間近な一せんめし屋へ飛込んだ時は、此の十七日の月の氣勢も留めぬ、さながらの闇夜と成つて、篠つく雨に風が荒んだ。

侘しい電燈さへ、一點燭の影もない。

めし屋の亭主は、行燈とも、蠟燭とも言はず、眞裸で慌て惑つて、

「お佛壇へ線香ぢや、線香ぢや。」

と、ふんどしを絞つて喚いた。

恚る田舎も、文明に馴れて、近頃は……餘分には蠟燭の用意もないのである。

「……然うだ、姉え。恚う言ふ時だ、掬つた月影は何うしたい。」

と、座長の角面がつゞけ狀に舌打をしながら言つた。

「眞個だわ。」

「まつたくさ。」

太夫たちも聲を合せた。

不思議に、螢火の消えないやうに、小さな簪のほのめくのを、雨と風と、人と水の香と、入亂れた、眞暗な土間に微に認めたのである。

「あゝ、うっかりして忘れて居ました。船へ置いて來た、取つて來ませう。」

「ついでに、重詰を願ひてえ。一升罎は攫つて來た。」

と黒男が、うは言のやうに言ふ間もあらせず、

「やあ、水が來た、波が來た。……薄馬鹿が水に乗つて來た。」

と青坊主がひよろ／＼と爪立つて逃げあるく。

「お佛壇ぢや、お佛壇ぢや、お佛壇へ線香ぢや。」

「はい、取つて來ましたよ。」

と言ふ、娘の手にした香を溢れて、湧く影は、青いさゝ蟹の群れて輝くばかりである。

「光を……月を……影を……今。」

と凜と言ふと、香を取つて身構へた。向へる壁の煤も破れも、はや、ほの明るく映さるゝそのたゞ中へ、袂を拂つてパツと投げた。間は一面に白く光つた、古壘の目は一つ一つ針を植ゑたやうである。

「あれ。」

「可恐い、電。」

と女たちは、入りもやらず、土間から框へ、背、肩を橋にひれ伏した。

「ほゝゝ、可恐いの？」

娘は静に、其の壁に向つて立つと、指をしなやかに簪を取つた。照らす光明に正に視る、簪は小さな斧であつた。

斧を取つて、唯一面の光を、端から、丁と打ち、丁と削り、こと／＼とこと／＼と敲くと、その削りかけは、はら／＼と、光る柳の葉、輝く桂の實にこぼれて、疊にしき、土間に散り、はた且うつくしき工人の腰にまとひ、肩に亂れた。と見る／＼風に從つて、皆消えつつ、やがて、一輪、寸毫を違へざる十七日の月は、壁の面に掛つたのである。

残れる、其の柳、其の桂は、玉にて縫へる白銀の蓑の如く、腕の雪、白脛もあらはに長く、斧を片手に、掌にその月を捧げて立てる姿は、渦も川も爪さきに捌く、銀河に紫陽花の花籠を、かざして立てる女神であつた。

顧みて、

「ほゝゝ。」

微笑むと齊しく、姿は消えた。

壁の裏が行方であらう。その破目に、十七日の月は西に傾いたが、夜深く照りまさつて、拭ふべき霧もかけず、雨も風もあともない。

這へる蔦の白露が浮いて、村遠き森が沈んだ。

皎々として、夏も覚えぬ。夜ふけのつゝみを、一行は舟を捨てて、鯰と、鰯とが、寺詣をする状に、しよぼ／＼と辿つて歸つた。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶ／＼、

ざざ——

「しいッ。」

「此處だ……」

「先刻の處。」

と、聲の下で、囁きつれると、船頭が眞先に、續いて青坊主が四つに這つたのである。

——後に、一座の女たち——八人居た——樂屋一同、揃つて、刃を磨いた斧の簪をさした。が、夜寝ると、油、白粉の淵に、藻の亂る、如く、黒髪を散らして七轉八倒する。

「痛い。」

「痛い。」

光 籃

「苦しい。」

「痛いよう。」

「苦しい。」

唯一人……脛すらりと、色白く、面長な、目の涼しい、年紀十九で、唄もふしも何にも出来ない、總踊りの時、半裸體に蓑をつけて、權をついてまはるばかりのあはれな娘のみ、斧を簪して仔細ない。髪にきら／＼と輝くきれいさ。

露
萩

「これは横さん入らつしやい。」

「今晚は——大した景氣ですね。」

「お化に景氣も妙ですが、おもひのほか人が集りましたよ。」

最近の事である。……今夜の怪談會の幹事の一人に、白尾と云ふのが知己だから横を別間に迎へながら、

「かねぐ聞いて居ります。何時も、此の會を催しますのに、故とらしく、凄味、不氣味の趣向をしますと、病人が出来たり、怪我があつたりすると言ひます——また全くらしうございますか
らね。蒟蒻を廊下へ敷いたり、生大根の片腕を紅殻で落したり、芋蕘で蛇を振り下げたり、一切そんな悪戯はしない事にしたんですよ。ですが、婦人だけでも随分の人数です。中には怪談を聞く人でなくて、見るつもりで来て居るのも少からずと言つた形ですから、唯ほんの景ぶつ、口上ばかりに、植込を向うへ引込んだ離座敷に、一寸看板を出しました——百もの語にはつきものですが、あとで、一人づゝ順に其處へ行つて、記念の署名をと云つた都合なんで、勿論、夜が更けましてから……」

——此の時もう十一時を過ぎて居た。横眞三が、旅館兼料理屋の、此の郊外の縁軒を志して、便宜で電車を下りた時は、眞夏だと言ふのに、もう四邊が寂寞して居たのであつた。

「……尤も、行儀よく二人づゝ行くのではありません。いづれ亂脈でせうから、いまのうち凄處——はゝゝ、凄くもありますまいが、ひとつ御覽なすつて、何うぞまた、何かと御注意、御助言を下さいますし。」

「御注意も何もありませんが、拜見をさして頂きますせう。」

「さ、何うぞ此方へ。」

——後で芳町のだと聞いた、若い藝妓が二人、馴染で給仕をして、いま頃夕飯を、……ちやうど茶をつがせて箸を置いた。何う見ても化ものには縁の遠さうな幹事の白尾が、こゝで立つと、「あら、兄さん、私も。」「私も。」と取りつくのを、「お前さんたちはあとにおし。」で、袖を突いて、幹事室を出るのに、眞三は續いた。

露 催はまだはじまつて居ない。客は會場の廣室に溢れ、帳場にこぼれ、廊下に流れて、わやくとざわめく中を、よけるやうにして通つて、一つ折曲る處で、家内總出で折詰の支度に料理場、臺所を取亂したのを視ながら、また一つ細く成る廊下を縫ふと、其處にも、此處にも、二三人、萩 四五人づゝは男、女が往來ふ、イむ。何しろ暑いので、誰も吹ぬけの縁を慕ふのであつた。

「では、此處から庭へ——」

「あれですか。」

眞三は、此の料亭へは初めてだつたし、夜である。何の樹とも知らないが、此が呼びものの、門口に森を控へて、庭の茂は暗いまで、星に濃く、燈に青く、白露に艶かである。其の幹深く枝を透して、ぼーッと煤色に浸んだ燈は、影のやうに障子を映して、其處に行燈の灯れたのが遠くから認められた。

二枚か、四枚か。……半ばは葉の陰にかくれたが、亭このみの茶座敷らしい。障子を一枚細目に開けてあるのが、縦に黒く見えて、薄か、蘆か揺ぐにつれて、此の催とて、思ひなしか、長く髪の毛の動くやうな色が添つた。

「下駄があります、薄暗うございますから。」

「やあ、きみちやつたな、……先刻のは。——」

縁のすぐ傍に居て、ぐるりと毛脛を捲つたなりで、眞三に聲を掛けたものがある。言つきで、軍人の猛者か、田舎出の紳士かと思はれるが、然うでない。緒ら顔で一分刈の大坊主、六十近いが、でつぶり膏肥がしたのに酒氣をさへ帯びて居る。講中なんぞの揃らしい、目に立つ浴衣に、萌葱博多の幅狭な帯をちよつきり結びで、二つ提げ淀屋このみの煙草入をぶらつかせ、はだけに

はだけた胸から襟へ、少々誇張だけれど、嬰兒の拳ほどある、木の實だか、貝殻だか、赤く塗つた大粒を、ごつ／＼ごつと、素ばらしい珠数を掛けた。まくり手には、鐵の如意かと思ふ、……然も握太にして、丈一尺ばかりの木棍を、異様に削りまはした——憚なく申すことを許さるゝならば、髻髻として、陽形なるを構へて居る。

——眞三は、こゝへ来る、停車場を下りた處で、實は一度、此の大坊主に出會つた。居處は違つたらしいが、おなじ電車から、一步おくれて、のつし／＼と出たのである。——馴切つた、土地の人らしいのが三四人、おりると直ぐに散つたほかは、おなじ向きに縁軒へ志すらしいものの影も見えなかつた。思ひのほかで、……夜あかしたと聞く怪談には、此の時刻が出盛りで、村祭の騒ぐらるは人足が落合ふだらう。俣も並んで居るだらう、……は大あて違ひ。たゞの一臺も見當らない。前の廣場も暗かつた。

改札口を出たまでで、人に聞かぬと、東西を心得ぬ、立淀んで猶豫ふ處へ、顯はれたのが大坊主で、

「やあ、君。」

露

と、陣笠なりの汚れくさつたパナマを仰向けて、

萩 「縁軒の連中ぢやあないかな——俺も此處ははじめた。乗つた電車から戻り氣味に、逆に踏切

を一つ越すつてこつたで、構はずその方角へ遣つけよう。……半分寝て居る煙草屋なんぞで道を訊くのもごうはらだからな。」

眞三は連立つた。

「化ものの會ちやあねえか、氣のきかねえ。人魂でも白張提灯でも、ふはりく出迎へに來れば可い。誰だと思ふ、べらぼうめ。はッはッはッ。」

最う微醉のいゝ機嫌で、

「俺は淺草の棍元教と言ふ、新に教を立てた宗門の先達だよ。……あとで一説法刎ねかすが。」

「何せい、此の一喝を啖はすから、出て來た處で人魂も白張も、ぼしやくは、ぼしやくだ。」

と、そいつが斑剝たが眞赤に朱で塗つてある——件の木棍で掌をドカンと敲いた。

眞三は、此の膏濃い入道は、處も、淺草だと言ふ……むかしの志道軒とかの流を汲む、慢心した講釋家かなんぞであらうと思つた。

會場へ着いて、帳場までは一所だつたが、居合せた此の幹事に誘はれて、而して彼は別室へ。

「え、先刻は……彼處に、一寸した、つくりものがあるんださうです。」

「うむ、御趣向かい。見ものだらう。見ぶつするかな。……わい。」

どしんと縁へ尻餅を搦いた。

「苔が、迂る。庭下駄の端緒が切れて居やあがる。危えぢやねえか。や、ほかに履きものはがあ

せんな。はてね。」

「お氣をつけなさいまし。」

それなり行かうとした幹事の白尾を、脛を投出したま、呼留めた。

「氣をつけねえぢや居られねえや——もし、徽章を着けて居なさるからには世話人だね、肝煎だ

ね。此の百二三十も頭數のある處へ、庭へ上り下りをするなり、その拵へものを見に行くなりに、

お前さんたちが穿いて二足、緒の切れた奴が一足、たつた三足。……何、二足片足しかねえと云

ふのは何う云ふ理合のもんだね。」

「何うも相済みません。ですが、唯今は、ほんの此は内々の下見なので。……後に御披露の上、

皆さんにおいでを願ふ筈に成つて居ます。しかし、それとも、五人十人御一所では……甚だ幼

稚な考へかも知れませんが、何の凄味も、おもしろみありません。……お一人、せいやくお二

人ぐらゐづ、と思ひまして、はきものの數は用意をしません。庭を御散歩なさいますなら、下足

をお取りに成つて……御自由に。——」

萩 露 「あら、一人づ、で行くの、可恐いわね。」

と、傍ぎきして、連らしいのに、然う云つた頸の白い女がある。

「何が可恐いものか。へん、俺がついてる。」

その連でもないのに、坊主は腕まくりをして、陽木棍で膝を敲いて出しや張つた。

「坊主、一言もありませんな。」

植込を低う抜けながら、眞三が言つた。その槇だが、いまの辯解を聞くまでは、おなじく、此の人数に、はきものの其の数は、と思つたのださうである。

處が、

「い、え、出たらめに遣つつけましたがね、……ハツと思ひましたよ。まつたくの處不行届きだつたんです。……あれではとても足りません。何てつたつて、どうせ大勢でせうから、大急ぎで草履でも買はせて間に合せる事にしなければなりませんまい。」

——で、後にその草履の用意は出来た。變化、妖怪、幽霊、怨念の夜だからと言つて、そのために裾、足の事にこだはるのではないのだが、夜半に、はきものの数さへ多ければ、何事もなかつたらう。……多人数が一所だから。處が、庭はじとくしてゐる。秋立つて七日あまりも過ぎたから、夜露も深い。……人の出あしは留めなかつたが、日暮方、町には薄い夕立があつた、それが此の邊はどしや降りに降つたと言ふ。停車場からの窪地は道を拾ふほど濡れて居た。然も植

込の下である。草履は履く時からべつとりして、踏出すとぐつしよりに成る。納涼がてらの催だが、遠出をかけて、かへりは夜があけるのだから、いづれも相應めかして居て、羽織、足袋穿が多かつた。また其の足袋を脱ぐのが、怪しい仕掛のあると云ふ、寮構へ踏込むのに、人住まぬ空屋以上に不氣味だから、無造作に草履ばきでは下立たないで、餘程ものすきなのが、下駄のあくのを待つて一人、二人づ、でないで、怪しい席へ入らなかつた、——そのために事が起つたのである。

さて、濡縁なりで、おかに障子を、その細目にあけた處へ、裾がこぼれて、袖垣の絲薄にかゝるばかり、四疊半一杯の古蚊帳である。

「……ゆきかへりに、潜らせようつてつもりですが、まあ、あとで中を御覽なさい。」

然う言つて、幹事の白尾は、さら／＼と蚊帳を押しながら、壁を背高く摺つて、次の室へ抜けて行く。……續くと、一燭の電燈、——これも行燈にしたかつたと言ふ——朦朧として、茄子の牛が踞つたやうな耳盥が黒く一つ、眞中に。……青く錆びたわたしを掛けて、鐵漿壺を載せ、毛楊枝が渡してある。……横斜に、立枠の臺に、圓形の姿見を据ゑた。壺には念入りに鐵漿を充してあるので、極熱の氣に蒸れて、かびたやうな、すえたやうな臭氣が湧く。

萩 露 「巫女の言ぐさではありませんが、(からのかゞみ)と云つた方が、眞個は、こゝに配合が可いの

ですが、探した處で磨がないでは、それだと顔がうつりません。——いろいろ凄い話を聞いて、こゝへ来て、ひよいと覗く。……慙う映ると……」

首を伸ばした白尾に釣られて、齊しく伸ばした頸を、思はず引込めて眞三は縮まつた。

「我ながら氣味が悪からうと言つたつもりなんです。……眞夜中の事ですからね。——その窓際の机に向つて署名となると、是非こゝが氣に成るやうに斜違に立てました。——帳面がごさいます。葬禮の控のやうに逆とちなどと言ふ悪はしてありませんから、何なら、初筆を一つ……」

「いや、いづれ。」

と云つて、眞三は立つて覗いた。丸窓の小障子は外れて居て、外に竹藪のある中に、ハアト形にどんよりと、あだ蒼い影が、ねばくと、鱗形に溶けさうに脈を打つて光つて居る。

「仕掛ものですよ。」

「蒟蒻。」

「いえ、生鳥賊で。」

いきれにいきれて、腥く、暖くプンと臭つて来る。おはぐろのともつれ合つて、何とも言へない。……それで吐き戻したものがあつた。——

床の間には、寫で見えて知つて居る、應舉の美女の幽霊が、おなじく寫して掛つて居た。これは、長崎の廓で、京から稚い時かどはかされた娘に、癆瘵の死際に逢つて、應舉があはれな面影を、たゞ其のまゝに寫生したと言ふ傳説の添つた繪なのである。目のきれの長い、まつげの濃い、下ぶくれの優しい顔が、かりそめに傳ふる幽霊のやうに、脱落骨立などして居るのでない。心もちほどは寔れたが卵の毛ほどの疵もなく、肩に亂れた黒髪をその卵の花の白く分けて、寂しさうにうつとりして、しごき帯の結びめの堆いの、却つて肌のかぼそさがあらはれて、乳のあたりはふつくりと艶である。大きく描いて、半身で、何にもなしにつつと、軸の宙で消えて居る。

香爐に線香を立てて、床に短刀が一口あつた。

「魔よけだと申しますから、かたぐ。……では蚊帳の中を一つ。……あとでは隔へ襖を入れますつもりです。」

敷居からすぐに潛つたが、唯、見る目も涼しく、桔梗の藍が露に浮く、女郎花に影がさす、秋草模様の縮緬をふはりと掛けて、白のシイツを柔に敷いた。桃色の小枕ふつくりと媚かしいのに、白々と塔婆が一基（釋玉）——とだけ薄りと讀まれるのを、面影に露呈に枕させた。頭に揃いて、字にはらくくと黒髪は、髻を三房ばかり房りと合せたのである。ぬしありやまた新に調へたか、それは知らない、たゞ黒髪の氣をうけて、枕紙の眞新しいのに、するくと女の油が浸んで居た。

「あの行燈には苦心しました。第一、金が出て居ます。」
と笑ひながら、

「古さと言ひ、煤け工合、鼠の巢のやうなぼろ／＼の破れ加減を御覽下さい。……四谷怪談にも使ふのを、其のまゝで小道具から借出しました。淺草でしてね。俳優の男衆が運んだんですが、市電にも省線にも、まさか此奴は持込めません。——さうと俾で通しですよ。」

「自動車も大袈裟となりますと、持ものに依つては、電車では氣がさしますし、然うなると俾です。……」

と、ふと、もの思ふ狀に、うつかりした様子で眞三が言つた。

「私も、——昨年ですが、塔婆を持つて、遠道に乗つた事があるんです。……」

「へい、貴方が塔婆を……」

と、古行燈の目を移して、槇の顔と枕を見た。視たが、

「おや、塔婆が眞白だ。」

と、熟と白尾が瞳を寄せ、頬を摺るばかりをかしく傾いて鼻できいて、

「白粉だ。——誰か悪戯に塗つたと見えます。ちよッ馬鹿な……御覽なさい、薄化粧ですぜ。此の様子ぢや、——信女……とある處へ、紅をさしたかも知れません。」

「はあ、此の塔婆は、婦人のですか。」

問ふ聲も何となくぼんやりする。そのわけで……枕の色も、鬨の姿も、これは、一定然もあるべきを、うか／＼聞くのであつたから。

「勿論です——何處か、近まはりの墓地から都合をするやうに、私たちが、此家のうちへ頼んだんですが、それには、はなから婦人のをと云ふ註文でしたよ。」

然らぬだに、魔の行燈と、怨靈の灯と、蚊帳の色に、鬱し沈んだ眞三の顔を、ふと窺ひつつ、

「尤も、無縁なのを、……それに、成りたけ、折れたか、損じたかしたのをと誂へたんです。——見ましたがね、此の塔婆は、随分雨露に曝されたと見えて、半分に折れて居ました。……」

「で、婦人だと分りましたか。」
「確です、(信女——)尤も、さゝくれては居ましたが。——何か、貴方?……」
「いゝえ。」

と、やゝはつきりして、
「何でもありません……唯、此處へ來ます道に、線路の踏切がありません。……停車場から此方は、途中眞暗でした。あの踏切のさきの處に、一軒氷屋がまだ寝ないで居ましたが、水提灯が一つ、暗くついただけ、暖簾は掛ばなしで、誰も人は居ないので。檐下に、白と茶の大きな斑犬

萩 露

が一頭、ぐたりと寝て居ました。——あの大坊主と道づれでしたが。……彼奴、あの調子だから、遠慮なしに店口で喚いて、寢惚聲をした女に方角をき、ましたつけ。——出かゝると、寝てゐた犬がのそりと起きて、來かゝる先へ、のすんです。——私は大嫌ですがね——（犬が道案内をするぞ、大先達の威力はどうだ。ツッ坊主は得意で居ました。踏切がこんもりと、草の中に乾いた川のやうに、慥う高く土手を築いた處で、その、不性たらしい斑が、急に背筋に敵を打つて狂つて飛上るんです。何だか銜へて、がり／＼嚙りながら狂ふんですよ。越すのに邪魔だから、畜生畜生！……吠鳴ると、急にのろりとして、のさ／＼と伸びた草の中へ潜りました。あとに其の銜へたものが落ちて居ます。——（寶ものかと思へば、何だ、塔婆の折端を。）一度拾つたのを、然う言つて、坊主が投出す——あゝ、草の中へでも隠したら、と私が思ふうちに、向うへ投つたもんですから、斑犬がぬい／＼と出て、引銜へると、ふツと駈けて、踏切むかうへ。……もう氷屋の灯の届かない處へ消えたんですが。（何の塔婆くらゐ。……犬に骨を食はせるも悟だぜ。——また説いて聞かせよう。……だが、見ねえな、よみぢ見たいな暗がりの路を、塔婆の折を銜へた處は犬の身骸が半分人間に成つたやうだ。三世相ぢやあねえ、よく地獄の繪にある奴だ。白斑の四足で、面が人間よ。中でも婦のは變な氣味合だ。轆轤首は處女だが、畜生道は、得て眉毛をおとしたのつべりした年増だもんだな、業晒しな。……私は可厭な心持で、聞かない振をして黙りこくつて、遮立つて來たんですが——此の塔婆も、折れたんだとお話しますから、ふと……何だか、踏切の、あの半分ぢやあないかと云ふやうな氣がするんです。」

「怪談々々。」

幹事は陽氣に軽く手を拍つて、

「そのお話を、是非一つ、會場の廣間で願ひませう。少々、蛇體を加へて、こゝに胴から上、踏切の尾の方と言ふやうな事になれば實ものです。ねえ、楨さん。」

塔婆が青い。びく／＼と蚊帳が揺れた。

「えゝ、飛んでもない。」

「何、そのかはり樂屋では何でもない事——幾らもあります事です。第一此の塔婆だつて、束にして、鹿朶、枯葉と一所に、位牌堂うらの壁際に突込んであつたなから、（信女）をあてに引抜いて來たツてね、下足の若い衆が言つて居ました。折れたのも挫げたのも、いくらも散らかつて居るんですよ。」

眞三は、それでも引入られさうに黙つたが、

「——（釋玉——）とだけ、あとは、白い撫子を含んだやうに友染の襟にかくれて居ますが、あなたは、そのあとを御存じでせうか知ら。」

「……見ました、下は、……香——です。——（釋玉香信女）です。確に、……何ですか、一つま
くつてお目にかゝるとしますかね。」

眞三は、手を壓へるやうに犇と留めた。

「串戲にも、女の字へ、紅をつけたらうなぞつてお話でした。塔婆は包んでありません。婦人の
裸もおなじです。」

幹事は、世情に通じて、ものの分つた人である。

「あゝ、よくお留め下さいました。——決して此の蒲團はまくりません。——が、何か、貴方、
お氣になさる事があるんですか。」

「さあ、いゝえ。」

「が、それでも。」

「戒名に、一寸似たのがあるんでしてね。」

「いや、それは。それならお氣になさいますな、なさらぬが可うございます。この宗門の戒名に
は、おなじのがふんだんですよ。……特に女のは、恚う云ふ處で申しては如何だけれど、現に私
の家内の母と祖母とは戒名がおなじです。坊さん何を慌てたんだか、おまけにそれが、……式亭
三馬の浮世床の中にあります。八百屋のお袖の（釋縁應信女）。——喧嘩にもならず、こまつ了ひ
ます。」

寂しい聲だが、二人で笑つた。

「さ、その氣であちらへ参りませうか。」

「いづれ悉いお話を。」

「あ、蚊帳から何か出ましたかね。」

眞三はゾツとした。が、何にも見えない。

「……小さな影法師のやうなものが。」

「私たちの影でせう。」

と、行燈の左右に立つて、思はず四邊が响はされた。

「槇さん。」

「は、」

「あなたは、おはぐろの煮える音は御存じでありますまいね。お互に時代が違ひますが、何です
か、それ、ぢ、ぢ、ぢ……」

「蟲ですか知ら……油が煮えるのでせう。」

幹事は耳を澄したが、

「いえ、行燈の灯は動きません。……はてな、おはぐろを嘗める音か知らん。」

「……」
「それもお互に知りませんな——あゝ、ひた／＼と、何の音だか。」

「あゝ。」

「あれだ。」

殆ど同時に聲を合せた。次の六疊の眞中の、耳盪から湧くやうに、ひら／＼と黒い影が、鐵漿壺を上下に二三度傳つた。黒蜻蛉である。かねつけ蜻蛉が、ふは／＼と、その時立つたが、蚊帳に、ひき誘はれたやうにふはりと寄ると、思ひなしか、中すいて、塔婆に映つて、白粉をちらりと染めると、唇かと思えて、すつと絲を引くやうに、櫛子の丸窓を竹深く消えたのである。

幽霊の掛軸は、直線を引いて並んだ。行燈の左右の此の二人の位置からは見えない。が、白い顔の動いたやうな氣勢がした。

「考へものです——發起人方、幹事連と、一應打合せて、いまの別亭の事は誰にも言はずに、人の出入りをしないやうにした方が可いかとも思ひます。」
植込を返しながら、白尾がしんみりと葉の下に沈んで言つた。

「……廣間が暗くなつて居ますね、……最う會をはじめました。お氣をつけなすつて。……おゝ、光る……」

「いなびかり。」

「いゝえ、樹の枝にぶらり／＼と、女の乳を釣したやうに——可厭にあだ白く、それ、お頭の傍にも、」

「えゝ。」

「あちらが暗くなると、ぼかり／＼光り出すと言つて、……此家の料理方の才覚でしてね。矢張り生烏賊を、澤山にぶら下げましたよ。」

もとの縁側。それから廊下は明るかつた。が、廣間の暗中に吸込まれて、誰も居ない。そのこぼれた裾、肩が、女まじりに廊下に背ばかりで入亂れる。

料理場の前には、もう揃つた折詰の辨當が堆く、戸を壓して並んだが、そこへ幹事が通りかゝるのを見ると、蔭から、腰掛を立て、印半纏の威勢のいゝのが顔を出して、

「白尾さん。此の折詰を積んだ形が大一番の棺桶などは、どんなものです。」

と手柄顔で言つた。幹事は苦笑をしたばかり。

秋 露
處へ、ほんの唯五六人で、ぼと／＼と沈めた拍手があつた。會の趣が趣であるから、故と遠

慮をしたらしい。が、丁ど發起人を代表して、當夜の人氣だつた一俳優が開會の辭を陳べ終つた處であつた。

眞三は幹事の白尾と行きがかりに立留つて、人々の背後から差覗いて、中を見た。十疊と八疊に、廻縁を取廻して、大い巳の字形に、襖を拂つた、會場の廣間は、蓮の田に葉を重ねたやうに一面で、暗夜に葉うらの白くほのめくのは浴衣である。うちはも扇も、ひらくと動くのが見え、僅に廊下から明りを取つた並居る人類も、臍を霞めて殆ど見分けのつかない眞中處へ、トタシに首のない泥鰌の泳ぐが如く、不氣味に浮上つたのは大坊主頭であつた。

「分つた、分つた。——それ、いま發起人の言つたとほり、御銘々話を頼むぜ。……妖怪、變化、狐狸、獺、鬼、天狗、魔ものの類、陰火、人魂、あやし火一切、生靈、死靈、幽靈、怨念、何でも構はねえ。順に其處へ顯はかせろ。棍元教の大先達が、自在棒を押取つて控へたからには、掌をめぐらさず、立處に退治してくれる。ものと、しなに因つては、得脱成佛もさして遣る。……對手によつては、行方が手荒いぞ。」

と煙草盆をガンと敲いた。

「女小兒は騒くなよ。如何なるものが顯はれようとも、涼しい顔で澄して居れ。が、俺が恚う構へたからには、芋蟲くさい屁びり蟲も顯はれて出はすめえ。恐れをなすな。うむ、恐れをなすな、

棍元教の傳澤だ。」

「……もし〜。」

「大先達の傳澤だぞ。」

「もし、お先達。」

と俳優がすつきりと居直つた。

「あなたのお氣に入るか何うかは分かりませんが、此の會は、妖怪を退治たり幽靈を濟度するのが趣意ではありません。……むしろ、怪しいもの、可憐いものを取入れて、威すものには威され、祟るものには祟られ、怨むものには怨まれるほどの覺悟で、……あるべき事ではないのですが、ろくろ首でも、見越入道でも、海坊主でも。」

ひやく〜と低聲で言つたものがある。

「こゝへ顯はれるのを迎へたいと思ふんですから、何うぞ、行方も法力も、お手柔かな所で願ひたいんです。」

今度は大勢で拍手した。此の坊主、みな面が憎かつたに相違ない。

萩 露 「半分わかつた。——さあ、はじめろ。……とに角何でも出るやい、ばけものの出たとこ勝負だ。」と音を強く、ぐわんと又煙草盆を木棍で敲いたのである。

もの争ひがあつては、と中に立つらしい氣構で、白尾は人をわけて座へ入つた。

海岸らしい——話の様子で。——(避暑中の學生が、夜ふけて砂丘の根に一人、浪を見たり大空の星に移して居たが、渚をすらくと通りかゝる二人づれの女の褌に、忽ち視線を海の方へ引戻された。月なき暗い夜に、羅の膚が白く透く、島田鬚と、ひさし髪と、一人は水浅葱のうちはを、一人は銀地の扇子を、胸に袖につかつて通る。……浪がうつすりと裾を慕つて、渚の砂が千鳥にあしあとを印して行く。ゆく手に磯に引揚げた船があつた。丁どその胴のあたりへ二人が立つた。が、船底が高くつて、舷は、その乳のあたりを劃つて見える。)

一人、談者の座にあつて恠く語る。……此の話を、楨が座に加はつて聞いたのは、もう二時過ぎた頃であつた。——先刻、白尾と別れてからは、何となく、氣屈し、心が鬱するので、ひとりもとの幹事室へ歸つて、出来るなら少時身體を横にもと思つたが、こゝも人數で、然うも成らない。あの若い藝妓は、もう其處には居なかつた。それはそれで、懇意なもの見知越なものも、いづれも廣間へ出たらしく、居合したのは知らぬ顔ばかりであつた。が、心易く言を掛けられるのに、然まで心も置けないで、幾らか胸は、開けたが、しかし、座に久しく成りすぎる。媚かしいのも居ただけに、然ういつまでも妨ぐべきではあるまい。些と彼方へもお顔をと言はれるにも、

氣がさして、われからすゝむともなく廊下を押されて、怪談の席へ連つた。人は居餘るのだから、端近を求むるにたよりは可い。縁から片膝されるほどの處へ坐ると、お、お、と話中だから、低い聲だが、前後に知合の居たのも嬉しくつて落着いた。時に聞いたのである。……前の筋道は分らない。(——渚の二人の女は舳を切るか、そこへは白浪が、ざあざつとかゝる。大方艦へ廻るであらう。砂丘つゞきの草を踏んでと、學生が見て居ると、立どまつて居た二女が、ホ、と笑ふと思ふと、船の胴を舷から眞二つに切つて、市松の帯も消えず、浪模様の裾を其のまゝに彼方へ抜けた。……)

恰も此の時であつた。居る處の縁を横にして、振返れば斜に向合ふ、そのまゝ居れば、背さがりに並ぶ位置に、帯も袖も、四五人の女づれ、中には、人いきれと、温氣にぐつたりとしたものがある。その中から、恠う俯向き加減に、ほんのりと艶の透く顔を向けて、幽かな衣の身動きで、眞三に向直つた女があつた。

「あなた。」

「……………」

「楨さん。」

「あ、」

と云つたが、其の姿は別の女の背と、また肩の間に、花瓣を分けたやうにはさまつて、膝も胸もかくれて居る。明石の柳條の肩のあたりが淡く映つた。

「今夜はよく入らつしやいました。」

「は。」

もとより怪談最中である。聲あるだけに、ものいひは低かつた。が、また此の折には、あちらでも、こちらでも、ひそく話が泡沫に成つて湧いたから、然までに憚るでもなかつたので、はつきりと聞えたのである。が、誰だか分らぬ。思ひ當る誰もない。

「失禮ですが、つい……誰方ですか——暗いので。」

「暗い方が結構です。お恥かしいんですけども。……あなたには、まことに心づけを頂きまして、一度、しみくお禮を申したう存じました。」

「……失禮ですが、全く何うも……」

「え、あの、私の方は、よく存じて居りますんですよ。……」

（——然うすると、二人の女が、船を抜けて、船を抜けてから、はじめて、その何とも言へない顔で、學生を振向いて、にこりと笑つた。村の方では、遠吠の犬がびようくと鳴くし、丑満の鐘……）

「可厭ですね、まあ、犬は可厭でございますこと。」

一層聲が低かつた。が、うつとりと優しい顔、顔、顔よりも、生際がすつきりと髪が目に立つた。

「坊主も可厭ですわ。」

「何處に居ます。いま……」

「あ、あれ、かねつけ蜻蛉が飛びますの。」

此の聲がきこえたらう。女たちの顔が、ちらくと亂れて、その瞳も、その髪も、恰も黒い羽のやうにちらついた。ひらくとひらく。

眞三にもを言つた女は、その中の誰であつたか、袖のいろくに紛れて、はらくと散る香水と、とめきの薫に紛れたのである。

話も丁ど一齣らしい。

とに角、き、取つて居たのが、一同に氣を放ち、肩を弛めて、死んだ風が渡るやうに汗に萎えた身體は皆動いた。

萩 露
「誰方が泣いて在らつしやりやしませんか。泣いて在らつしやりやしませんか。……御婦人のやうですが。」

幹事、白尾の聲である。

「泣いて在らつしやるやうですね、——御氣分の悪い方があるんぢやありませんか。」

泣いて、……泣いて居る……と囁く聲が、ひそくと立つて、ふと留むと寂然とした。

「間違ひでしたか——大丈夫ですね。……それでは誰方か、又お話を。」

談者一人、脱いで居た薄羽織を引かけるのが影の如く窺はれて、立つて設けの座に直つた。

再び、眞三の右斜めの、女の肩と、女の胸との間へ、いまの美しい顔が見えた。

「私ですよ、泣いて居ますわ。」

濡々とおくれ毛が頬にかゝるのが、ゾツとするまで冷く見えた。

「……………」

「坊主が可厭で……可厭で……私……」

「坊主、さ、何處に居ます。」

思はず膝を立てて、聲を殺しながら、其の女に差寄つて聞いたと思ふと、

「え、坊主?……」

と振向いて聞返したのは、翡翠の珠も眉に近い、それは幹事室で見た先刻の藝妓であつた。——此の連中が四五人居たので。中にいまのそれらしい面影は煙にも見えない。

「失禮しました。」

極りも悪し、摺り狀に退つた。心は苛立つ、胸は騒ぐ。……

「坊主は何うしました。」

何うしました? 坊主は、坊主は。——身近な處から顔見知の人たちに、眞三は、うか／＼と

聞き廻る。……さあ、何處へ行きましたかと云ふ。今しがた其の邊に見えたと云ふ。……何等の

交渉のないのも居た。——坊主——坊主?——幾度も、煩く口を出したと云ふ。會の方から故障

が出たと聞いたのに、たよりを得て、うろ／＼人なかを手さぐりで、漸と白尾を見て、囁いて聞

くと、私たち三人がかりで片傍へ連出して、穩かに掛合つたので、何うにか静つて黙つたが、あ

の八ツ頭を倒に植ゑたやうな頭は、いま一寸見當らない、と眞三とともに座中を透した。勿論、

話を妨げないやうに、幹事側とて、わけて、ひそ／＼、ひそ／＼と、耳をつけ、頬を合せて、

あつちへも、こつちへも、坊主は、坊主は——眞三に取つては、あの坊主が此處に居れば、幾ら

か氣は安まつたのである、が、見當らない。

坊主は、——坊主は——あ、我ながら、いやな坊主を口で吐いて、廣間ぢう撒散したやうで、

聞く耳、交す口に、この息も嘸ぞ臭かつたに相違ない、とほつとした、我がその息さへ腥い。む

かッとして胸を壓へて、沓脱へ吐もどすやうに、庭下駄を探つた時は、さつき別亭へ導かれた縁

の口に、渠一人、餓れた烏賊の燃ゆるのを樹の間に見つつ、頸筋、兩脇に、冷い汗をびつしより流して、ぐつたりとしたのであつた。

要するに、麗しき婦は塔婆の影である。席に見えないとすると、坊主、坊主が別亭へ侵入して、蚊帳を亂して居はしないかと危んだためなのであつた。

「どうかお聞き下さい。……お鬱陶しいでせうが、お聞き下さい。——僕は洋畫かきの、それもほんのペンキ屋ですが……」

槇眞三は、閨の塔婆に引添うて、おなじ枕頭にまくつた毛脛に、手がつかないばかりにして言つた。——いま此の數寄屋へ入ると同時にハツと思つたのは、大坊主が古行燈の灯を銀の俵張の煙管にうつして、ぶか／＼と吹かして居た處、脂を吸つたか、舌打して、ペツ／＼と憚らず蚊帳に唾を吐いた。あゝ、其の勢で行られては。……蚊帳を捲つて入る處へ、つか／＼と上るのを、坊主は見返りもしなかつた。

「何をなさるんです。」

「行力を顯はすのよ。」

それから、あらたまつて謙遜りつつ言つたのである。——

「私には、たいせつな先生があります。たゞお若くつてなくなりましたが、それは世に有名な方です。其の墓が青山にあるんです。去年あの震災のあとに、石碑が何うなつたらうと思つて、まあ／＼、火にも、水にも、一息つけるやうに成ると、すぐに参りました。……たゞもう一なだれです、立派な燈籠は碎けて轉がる、石の鳥居は三つぐらゐに折れて飛んで居る中ですから、口惜いが、石碑は臺の上から、隣の墓へ俯向けに落ちて、橋に成つて居たんです。——管理所を尋ねて、早速起し直すやうに頼みましたが、木で鼻をくると言ふのはその時の應對でした。——金に締めさへお着けなさらなければ今日中にも起します、尋常の御相談ですと、來年に成りますか、來々に成りますか、そこは承合へません、墓どころぢやないでせう、雨露を凌がないのがどのくらゐあるか知れませんが、御華族方だつて、まだ手をつけちゃ居ません——と、取つてもつけない情なくもあるし、瘡にも障りました。……大勢の弟子のうちから、地震に散ばらないのだけ、四五人誘合つて、てこに、麻繩、鋤、セメントなどを用意して、シャツにズボンばかり、浴衣に襪がけの勢で推出したんです。が人の注意で、支度ばかりしましたものの、鋤もセメントも何う使つて石碑を起すんだか誰も知りません。——知合の墓地近くの花屋から、とに角、監督だけにと云つて、ほか仕事で忙しい石屋の親方を一人頼みました。此の石屋が皆の意氣込を買つてくれて、さし圖どころか自分で深切に手を添へてくれた時、皆で抱まはしに、隣の墓から、先

萩 露

生の墓所の前へ廻し込んで、一段、段石を上げるのに、石碑が缺けちやあ不可い、と言ふと、素早い石屋が、構はねえで、バシリと半分にし折つて、敷いてかつた塔婆が一本、おき隣のはありません。一つ置いた墓地ので。——尤も倒れたのを引出した事は知つて居ますが、……それが、此の塔婆です。戒名は御婦人です。」

と、やゝ息せいて、ハンカチで汗を拭つて言つた。

「故とらしいと思ひますから、友だちの見ない間に、もとへ戻して、立掛けて、拜んで挨拶をして、其の日は済みました。——氣に成りますから、……すつと十二月までおくれましたが、墓詣の時、茶屋で聞いて、塔婆のぬしの菩提寺がわかりました。其の菩提寺が遠方です……遠方と云つて、……むきは違ひますが、其が此の土地なんです。」

「虚構へるぜ！」と冷笑つた。大坊主はじろりと顔を見た。

「いや、拵へ事では決してないのです。墓所にはまだ折れたのが其のまゝでありましたから、外のと違つて、然う言つた事情で、犬にも猫にも汚させるのが可厭でしたから、俵ではるゝと菩提寺へ持つて来て、住職にわけを言つて、新に塔婆を一本古卒塔婆の方は些少ですが心づけをし、寺へ預けて、往かへり、日の短い時の事です。夜に入つてから青山の墓へかはりの其の新しいのを手向けたんです——（釋玉香信女の）——施主は小玉氏です、——忘れもしません。……誓つ

て然う云つた因縁があるのですから、私に免じて、何うか、此の塔婆は勝らないで下さい。」

「勝る。——勝るとは何だ。」

「これは申過ぎました。何うか、お觸りに成らないでおくんなさいまし。」

「觸るよ、觸る處か、抱いて寝るんだ。何、玉香が、香玉でも、女亡じやは大抵似寄りだ、心配しなさんな。其の女ぢやあるめえよ、——また、それだつて、構はねえ。俺が濟度して浮ばして遣る。……な、昨今だが、満更知らねえ中ぢやねえから、こんなものでも觸るなと頼めば、頼まれねえものでもねえが、……誰だと思ふ、たゞ人と違ふぜ。大根元教の大先達が百ものたり、はなれ屋の破行燈で、塔婆を抱いて寝たと云へば、可恐さを恐れぬ、不氣味さにひるまない、行力法の功德として一代記にかき込まれるんだ。先づ此奴は見せ場ぢやあねえか。」

「ですから、手をついて頼むから。」

「頼まれねえ。たゞ人とは違ふよ。好色からとばかりなら、みやうだいを買った氣で、一晩ぐらゐる我慢もしようが、俺のは宗旨だ、宗旨だよ。宗門がへをしろと言つて誰が肯くやつがあるものか。昔のきりしたんばてれんでさへ、殺されたつて宗門は變へなかつたぜ。」

「私の親類だと思つて。」

「不可え。」

「姉だと思つて。……妹だと思つて。」
「不可え！」

「ぢやあ、己の家内なら何うするんだ。」

氣色ばんだが、ものともしない。

「矢張り抱くのよ。」

「坊さん、——酔つてるな。」

「何を、……むじやくしやるから、臺所へ掛合つて榊で飲んだ、飲んだが、何うだ。會費ぢや

あねえぜ。二升や三升で酔ふやうな行力ぢやねえ、酔やしねえが、な、見ねえ。……玉に白粉で、

かもじと來ちやあ堪らねえ。あいよ、姐さん。」

「止さないか。」

聲をおさへて、眞赤な木棍で、かもじをつゝいて、

「白粉に、玉と、此の少し、蚊帳に映つて青白くつて、頬邊にびんの毛の亂れた工合よ。玉に白

粉と。……此奴おいらんで居やあがる。今夜の連中に此のくらなるのは一人もねえ。」

土蜘蛛の這込む如く、大跨を腕つてするくと秋草の根に搦んだ。

「野郎。」

かはす隙なく、横ぞつぼうへ、坊主の一根を浴びながら、塔婆を颯と抜取つて、眞三は蚊帳を蹴た。——これが庭の方へ遁げられると仔細はなかつたのである。

小盾も見えず、姿見を傍に、追つて出る坊主から庇ふのに、我を忘れて、帷子の片袖を引切り

さまに、玉香を包み、信女を蔽うた。

「此の野郎。」

ぬつくりと目さきに突立つ。

かゝる時にも、片袖きれた不状なるよりは……とや思ふ、眞三は、ツと諸膚に拂つて脱いだ。

唯、姿見に映つた不思議は、わが膚の慙くまで白く滑らかだつた覚えはない。見るくと乳もふつ

くりと滑らかに、色を變へた面もさながらの女である。

此の膚、此の腕に、そのトタンに、二撃三撃を激しく撲れた。撲れながら、姿見の裡なる、我

にまがふ婦の顔にぢつと見惚れて、亂れた髪の水に雫するのさへ確と見た。やあ、朱塗の木棍は、

白い膚を虐みつつ、烏賊の鯨れが臭を放つて、また打つとともにムツと鼻をついた。

「無禮だ、奴入道。」

眞三の手が短刀に掛つた。

筆者は……實は、此の時の會の發起人の一人であつた。敢て言を構ふるのではないが、塔婆の

閨の議には與らない。

楨君は腕の骨を損じた。棍元教の先達は木棍を握つた手の指を落した。眞三は殺すまでもないが、片手は斬落さうと思つたさうである。

二人は、まだ病院に居る。

怪我は此だけでは濟まなかつた。芳町邊の一むれが、幹事まじりに八九人、この大池の公園をめぐつて、しら／＼あけに歸つたのが、池の彼方に、霧の空なる龍宮の如き御堂の棟を静な朝波の上に見つ行くと、水を隔てた此方の汀に少し下る處に、一疋倒れた獸があつた。蘆の穂が幽に、おなじやうに細い残月に野末に靡く。あたりの地は塵も留めず、掃き清めたやうな處に、その獸は死んで居た。

近づくると白斑の犬である。だらりと垂れた舌から、黒い血、いや、黒蛇を吐いたと思つて、聲を立てたが、それは腮のまほりをかけて、まつすぐに小草に並んで、羽を休めたおはぐる蜻蛉の群であつた。

こればかりでない。その池のまほりをしばらくして、橋を渡る、水門の、半ば沈んだ、横木の長いのに、流れかゝる水の底が透くやうに、あゝ、また黒蛇の大なのが、するりと一條。色をか

へて、人あしの橋に亂るゝとともに、低く包んだ朝霧を浮いて、ひら／＼と散つたのは、黒い猫にふは／＼と皆その霧を被つた幾十百ともない、おびた／＼しい、おなじかねつけ蜻蛉であつた。

觸つたもの。たゞ見ただけでさへ女たちは、どツと煩らつた。

塔婆は幹事、發起人のうちで、楨君から、所をきいて、良圓寺と云ふので心ばかりの供養をした。縁類は皆遠く他國した。あはれ、塔婆のぬしは、仔細あつて、此の大池に投身したのださうである。

——場所は、たいがい、井の頭のやうな處だと思つていたゞけば可い。

甲

乙

きのえ
きのえ
と

先刻は、小さな女中の案内で、雨の晴間を宿の畑へ、家内と葱を抜きに行つた。……料理番に頼んで、晩にはこれで味噌汁を拵へて貰ふつもりである。生玉子を割つて、且つは吸ものにし、且つはおじやと言ふ、上等のライスカレエを手鍋で拵へる。……腹ぐあひの悪い時だし、秋雨も怒り毎日降續いて、そろそろ寒い晩には此が何より甘味い。

畑の次手に、目の覚めるやうな眞紅な蓼の花と、かやつり草と、豆粒ほどな青い桔梗とを摘んで歸つて、硝子杯を借りて卓子臺に活けた。

……いま、また女中が、表二階の演技場で、萬歳がはじまるから、と云つて誘ひに來た。——毎日雨ばかり續くから、宿でも浴客、就中、逗留客にたいくつさせまい心づかひであらう。

私はちやうど寝ころんで、メリメエの、(チュルヂス夫人)を讀んで居た處だ。眞個は此の作家のものなどは、机に向つて拜見をすべきであらうが、温泉宿の晝間、搔卷を掛けて、じだらくで失禮をして居ても、誰も叱言をいはない處がありがたい。

が、この名作家に對しても、田舎まはりの萬歳芝居は少々憚る。……で、家内だけ、いくらかお義理を持參で。——たゞし煙草をのませない都會の劇の義理見ぶつに切符を押しつけられたやうな氣味の悪いものではない。出來秋の村芝居とおなじ野趣に對して、私も少からず興味を感じる。——家内はいそくと出て行つた。

どれ、寝てばかりも居られまい。もう二十日過ぎ少し稼がう。——そのシャルル九世年記を、わが文化の版、三馬の浮世風呂にかさねて袋棚にさしおいた。——此の度胸でないと仕事は出來ない。——さて新しい知己(其の人は昨日此の宿を立つたが) 秋庭俊之君の話を記さう。……

中へ出る人物は、藝妓が二人、それと湘南の盛場を片わきへ離れた、蘆の浦邊の料理茶屋の娘……と云ふと、何うも十七八、二十ぐらゐるまでの若々しいのに聞えるので、一寸工合が悪い。二十四五の中年増で、内證は知らず、表立つた男がないのである。京阪地には、こんな婦人を呼ぶのに可いのである。(とうはん)とか言ふ。……これだと料理屋、待合などの娘で、圓鬚に結つた三十そこらのでも、差支へぬ。むかしは江戸にも相應しいのがあつた、娘分と云ふのである。で、また假に娘分として、名はお由紀と云ふのと、秋庭君とである。

それから、——影のやうな、幻のやうな、繪にも、彫刻にも似て、神のやうな、魔のやうな、幽霊かとも思はれる。……歌の、はつき木のやうな二人の婦がある。

乙 甲

時は今年の眞夏だ。——
これから秋庭君の直話を殆ど其のまゝであると言つて可い。

二

「——さあ、あれは明治何年頃でありませうか。……新橋の藝妓で、人氣と言へば、いつもおなじ事のやうでございませうが、繪端書や三面記事で評判でありました。一對の名妓が、罪障消滅のためだと言ひます。藝妓の罪障は、女郎の堅氣も、女はおなじものと見えまして、一念發起、で、廻國の巡禮に出る。板橋から中仙道、わざと木曾の山路の寂しい中を辿つて伊勢大和めぐり、四國まで遍路をする。……笠も笠も、用意をしたと、毎日のやうに發心から、支度、見送人のそれぞれまで、續けて新聞が報道して、えらい騒ぎがありました。笠摺菅笠と言へば、極つた巡禮の扮装で、繪本のも、芝居で見ると、實際と同じ姿でございませう。……もし此が間違つて、たとひ不圖した記事、また風説のあやまりにもせよ、高尚なり、意氣なり、婀娜なり、帶、小袖を其のまゝで、東京をふつと木曾へ行く。……と言ふ事であつたとしますと、私の身體は其の時、何うなつて居たか分りませぬ。

尙ほその上、四國遍路に出る、其の一人が圓鬘で、一人が銀杏返だつたのでありますと、私は立處に杓を振つて飛出したかも知れません。たゞし途中で、棧道を踏むるやら、御嶽おろしに吹飛ばされるやら、其は分らなかつたのです。

御存じとは思ひますが、川越喜多院には、搦粉木を立掛けて置かないと云ふ仕來りがあります。縦にして置くとは變事がある。むかし、あの寺の大僧正が、信州の戸隠まで空中を飛んだ時に、屋の棟を、宙へ離れて行く。その師の坊の姿を見ると、丁ど臺所で味噌を摺つて居た小坊主が、搦粉木を縦に持つたまゝ、破風から飛出して雲に續いた。此は行力が足りないで、二荒山へ落こちたと云ふのです。

私にしても、おなじ運命かも知れません。別嬪が二人、木曾街道を、ふだらくや岸打つ浪と、流れて行く。岨道の森の上から、杓を持った金釦が團栗ころげに落ちてのめつたら、餘程……妙なものが出来たらうと思ひます。

些と荒唐無稽に過ぎるやうですが、眞實で、母可懐く、妹戀しく、唯心も空に憧憬れて、ゆかりある女と言へば、日とも月とも思ふ年頃では、全く遣りかねなかつたのでございませう。——幼いうちから、孤だつた私は、其の頃は、本郷の叔父のうちに世話に成つて、——大學へ通つて居ました。……文科です。

幸ですか、如何だか、單に巡禮とばかりで、其の藝妓たちの風俗から、圓鬘と銀杏返と云ふ事

乙 甲

を見出さなかつたばかりに、胸を削るやうな思ばかりで済みました。

もとより、圓鬢と銀杏返と、一人づゝ、別々に離れた場合は、私に取つて何事も無いのです。

——申すまでもない事で、圓鬢と銀杏返を見るたびに、杓を持つて追掛けるのでは、色情狂を通り越して、人間離れがします、大道中で尻尾を振る犬と隔りはありません。

それに、私が言ふ不思議な婦は、いつも、圓鬢に結つた方は、品がよく、高尚で、面長で、そして背がすらりと高い。色は澄んで、滑らかに白いのです。銀杏返の方は、そんなでもなく、少し桃色がさして、顔もふつくりと、中肉……が小肥りして、些と肩幅もあり、較べて背が低い。此の方が、三つ四つ、然やう、……どうかすると五つぐらゐる年紀下で。縞のきものを着て居る。圓鬢のは、小紋か、無地かと思ふ薄色の小袖です。

思ひもかけない時、——何處と言つて、場所、時を定めず、私の身に取つて、彗星のやうに、スツと此の二人の並んだ姿の、顯れるのを見ます時の、其の心持と云つてはありません。凄いと、も、美しいとも、床しいとも、寂しいとも、心細いとも、可憐いとも、また貴いとも、何とも形容が出来ないのです。

唯今も申した通り、一人づゝ、別に——二人を離して見れば何でもありません。並んで、すつと来るのを、ふと居る處を、或は送るのを見ます時にばかり、其の心持がしますのです。」

著者は此を聞きながら、思はず相對つて居て、杯を控へた。

——恠う聞くと、唯その二人立並んだ折のみでない。二人を別々に離しても、圓鬢の女には圓鬢の女、銀杏返の女には銀杏返の女が、他に一體づゝ影のやうに——色あり縞ある——影のやうに、一人づゝ、附いて並んで、……いや、二人、三人、五人、七人、おなじやうなのが、ふらふらと並んで見えるやうに聞き取られて、何となく悚然した。

三

甲 乙 「はじめで、其の二人の婦を見ましたのは、私が八つ九つぐらゐるの時、故郷の生家で。……母親の若くてなくなりました一周忌の頃、山からも、川からも、空からも、町に雲の降りくれる、暗い、寂しい、寒い真夜中、小學校の友だちと二人で見ました。——なまけものの節季はたらきとか言つて、試験の支度に、徹夜で勉強をして、ある地誌略を讀んで居ました。——白山は北陸道第一の高山にして、郡の東南隅に秀で、越前、美濃、飛驒に跨る。三峰あり、南を別山とし、北を大汝嶽とし、中央を御前峰とす。……後に劍峰あり、其状、五剣を植るが如し、皆四時雪を戴く。山中に千仞瀑あり。御前峰の絶壁に懸る。美女坂より遙に看るべし。しかれども唯飛流の白雲の中より落るを見るのみ、眞に奇觀なり。此他美登利池、千歳谷——と、びしよくと冷く讀

んで居ると、しばらく降止んで、ひつそりして居たのが急にばらばらと霰に成つた。霰……横の古襖の破目で眞暗な天井から、ほつと燈明が映ります。寒さにすくんで鼠も鳴かない、人ツ子の居ない二階の、階子段の上へ、すつと其の二人の婦が立ちました。縞の銀杏返の方が硝子臺の煤けた洋燈を持つて居ます。此處で、聊でも作意があれば、青い蠟燭と言ひたいのですが、洋燈です。洋燈の其の燈です、其の燈で、圓鬚の婦の薄色の衣紋も帯も判然と見えました。あつと思ふと、トン／＼、トン／＼と静な蹺音とともに階子段を下りて来る。キヤツと云つて飛上つた友だちと一所に、すぐ納戸の、父の寝て居る所へ二人で轉り込みました。此が第一時の出現で、小兒で邪氣のない時の事ですから、此は時々、人に話した事があります。

翌年でしたか、また秋のくれ方に、母のない子は、蛙がなくから歸ろ、で、一度別れた友だちを、尙ほさみしさに誘ひたくつて、町を左隣家の格子戸の前まで行くと、此のしもた屋は、前町の大商人の控屋で、凡そ十人ぐらゐるは一側に並んで通ることの出来る、廣い土間が、おも屋まで突抜けて居ると言ふのですが、その土間と、いま申した我家の階子段とは、暗い壁一重に成つて居ました。

稚い時は、だから、よく階子の中段に腰を掛けて、壁越に、その土間を歩行く蹺音や、ものいふ人聲を聞いて、それをあの何年何月の間か、何處までも／＼ほり抜くと、土一皮下に人聲がして、遠くで鶏の鳴くのが聞えたと言ふ、別の世界の話聲が髣髴として土間から漏れる。……小兒ごころに、内の階子段は、お伽話の怪い山の、其のま、薄暗い坂でした。——其處が、いまの隣家の格子戸から、間を一つ框に置いて、大な穴のやうに偶と見えしました。——その口へ、圓鬚の婦がふつと立つ。同時に並んで居た銀杏返のが、腰を消して、一寸足もとの土間へ俯向きしました。此は、疊を通るのに、駒下駄を脱いで、手に持つのだ、と見る、と……其のしもた家へ、入るのではなくて、人の居ない間を通抜けに、此の格子戸へ出ようとするのだ、何故か、然う思ふと、急に可恐く成つて、一度、むかうへ駈出して、また夢中で、我家へ遁込んで了ひました。

二年ばかり経つてからです。父のために、頻に後妻を勧めるものがあつて、城下から六七里離れた、合歡の濱——と言ふ、……いゝ名ですが、土地では、眠さうな目をしたり、坐睡をひやくす時に（それ、ねむの濱からお迎が。）と言ひます。ために夢見る里のやうな氣がします。が、村に桃の林があつて、濱の白砂へ影がさす、いつも合歡の花が咲いたやうだと言ふのださうです。その濱の、一向寺の坊さんの姪が相談の後妻になるので、父に連れられて行きました。生れてから三里以上歩いたのは、またその時がはじめてです。母さんが出来るよと云ふので、いくら留められても、大きな草鞋で、松並木を駈けました。庵のやうな小寺で、方丈の濡縁の下へ、すぐに静な浪が來ました。尤も其の間に拾ふほどの濱はあります。——途中建場茶屋で夕飯は濟みまし

乙 甲

た——寺へ着いたのは、もう夜分、初夏の宵なのです。行燈を中にして、父と坊さんと何か話して居る。とんびずわりの足を、チク／＼蚊がくひます、行儀よくちつとしては居られないから、そこは小兒で、はきものとも言はないで縁からすぐに濱へ出ました。……雪國の癖に、もう暑い。まるッ切風がありません。池か、湖かと思ふ渚を、小兒ばかり歩いて居ました。が、月は裏山に照りながら海には一面に茫と靄が掛つて、粗い貝も見つかからないので、所在なくて、背丈に倍ぐらゐるな磯馴松に凭懸つて、入海の空、遠く遙々と果しもし知れない浪を見て、何だか心細さに涙ぐんだ目に、高く浮いて小船が一艘——渚から、然まで遠くない處に、その靄の中に、影のやうな婦が二人——船はすらくと寄りました。

舷に手首を少し片腕をもたせて、ちつと私を視たのが圓鬚の婦です、横に並んで銀杏返のが、手で浪を搔いて居ました。その時船は銀の色して、濱は颯と桃色に見えた。合歡の花の月夜です。——（やあ父さん——彼處に母さんと、よその姉さんが。……）——後々私は、何故、あの時、その船へ飛込まなかつたらうと思ふ事が度々あります。世を憐む時、病に困んだ時、戀に離れた時です。……無論、船に入らうとすれば、海に溺れたに相違ない。——彼處に母さんと、よその姉さんが、——然う言つて濡縁に飛びついたのは、まだ死なない運命だつたらう、と思ひます。言ふまでもありませんが、後妻のことは、其處でやめに成りました。

可厭な、邪慳らしい、小母さんが行燈の影に来て坐つて居ましたもの。……」
俊之君は、話しかけて、少時思にふけたやうであつた。

「……その後、時を定めず、場所を擇ばず、ともすると其の二人の姿を見た事があるのです。何となく、此は前世から、私に附纏つて居る、女體の星のやうに思はれます。——いえ、それも、世俗になづみ、所帯に煩はしく、家内もあるやうに成つてからは、つい、忘れ勝……と言ふよりも、思出さない事さへ稀で、偶に夢に視て、あゝ、また（あの夢か。）と、思ふやうに成りました。

——處が、此の八月の事です——
寺と海とが離れたやうに、間を抜いてお話しませう。が、桃のうつる白妙の合歡の濱のやうでなく、途中は渺茫たる沙漠のやうで。……」

四

甲 「東京驛で、少し早めに待合はして。……つれはまだかと、待合室からプラットホームを出口の方へ掛つた處で、私はハツと思ひました。……まだ朝のうちだが、實に暑い。息苦しいほどで、此の日中が思遣られる。——海岸へ行くにしても、途中がどんなだらう。見合せた方がよかつた、と逡巡をしたくらゐですから、頭腦が何うかして居はしないかと、危みました。

あの、いきれを擧げる……むツとした人混雑の中へ——圓鬚のと、銀杏返のと、二人の婦が夢のやうに、然も羅で、水際立つて、寄つて來ました。(あら。)と莞爾して、(お早う。)と若い方が言ふと、年上の上品なのは、一寸俯目に頷くやうにして、挨拶しました。

——先刻は、唯、藝妓が二人、と著者は記した。——俊之君は、「年増と若いの。」と云つて話したのである。が、こゝに記しつつ思ふのに、どうも、どつちも——これから後も——それだと、少なくとも、著者が此の話についてうけた印象に相當しない。更めて假に姉と、妹としようと思ふ。……

「私は目が覺めたやうに、いや、龍宮から東京驛へ浮いて出た氣がしました。同時に、どや／＼往來する人脚に亂れて二人は、もう並んでは居ません。私と軽い巴に成つて、立停りましたので。……何の祕密も、不思議もない。——此が約束をした當日の同伴なので。……實は昨夜、或場所、餘りの暑さだから、何處かいき抜きに、そんなに遠くない處へ一晩どまりで、と姉の方から話が出たので、可からう、翌日にも、と酒の勢で云つたものの、用もた、まつて居ますし、さあ、何うしようか、と受けた杯を淀まして、——四五日経つてからの方が都合は可いのだがと、煮切らない。……姉さんは溫和だから、え、御都合のい、時で結構。で、杯洗へ、それなり流れようとした處へ、(何の話?……)と、おかれて來た妹が、いきなり、(明日が可い、明日になさ

い、明日になさい、あ、かう云つてると、またお流れに成る。)其處で約束が極つて、出掛ける事に成つたのです。——昨夜の今朝ですもの、其の二人を、不思議に思ふのが却つて不思議なくらゐるで。いや自然の好は妙なものだ、すらりとした姉の方が、細長い信玄袋を提げて、肩幅の廣い、背の低い方が、ポコンと四角張つて、胴の膨れた靴を持って居る、と、ふとをかしく思ふほど、幻は現實に、お伽の坊やは、藝妓づれのいやな小父さんに成りましたよ。

乗込んでから、また何うか云ふ工合で、女たちが二人並ぶか、それを此方から見ると云つた風になると、髪形ばかりでも、菩提樹か、石榴の花に、女の顔した鳥が、腰掛けた如く見え、再び夢心に引入れられたのでありませうけれど、なか／＼、そんな事を云つて居られる混雑方ではなかつたのです。

折からの日曜で、海岸へ一日がへりが、群り掛る勢だから、汽車の中は、さながら野天の蒸風呂へ、衣服を着て浸つたやうなありさまで。……それでも、當初乗つた時は、一つ二つ、席の空いたのがありました。クシヨンは、あの二人づゝ腰を掛ける詭ので、私は肥満した大柄の、洋服着た紳士の傍、内側へ、何うやら腰が掛けられました。丁度、椅子を開いて向合に一つ空席がありましたので、推されながら、此の眞中ほどへ來た女たちが、

乙 甲
(姉さん。)

(まあ、お前さん。)

と譲合ひながら、その圓髷の方が、とに角、其處へ掛けようとする、

(一人居るんです。)と言つた、一人居た、茶と鼠の合の子の、麻らしい……詰襟の洋服を着た、瘦せたが、骨組のしつかりした、淺黒い男が、席を片腕で叩くのです。叩きながら上着を脱いで、そのあいた處へ刎ねました。——さいはひ斜違のクシヨンへ、姉は掛ける事が出来ましたし、それと背中合せに、妹も落着いたんです。御存じの通り、よつか、りが高いのですから、その銀杏返は、髪も低い……一寸籬箱へ、空色天鵝絨の蓋をした形に、此方から見えなく成る。姉の圓髷ばかり、端正として、通を隔てて向合つたので、此は弱つた——目顔で串戯も言へない。——ただかだか目的地まで三時間に足りないのだけれど、退屈だと思ひましたが、何うして、退屈などと云ふ贅澤は言つて居られない、品川で又一も揉込んだので、苦しいのが先に立ちます。その時も、手で突張つたり、指で弾いたり、拳で席を拂たいり、(人が居るです、——一人居るですよ。)その、貴下……白襯衣君の努力と云つてはなかつた。誰にも掛けさせまいとする……大方その同伴は、列車の何處かに知合とでも話して居るか、後架にでも行つてるのであらうが、まだ出て来ません。此のこみ合ふ中で、それとも一人占めにしようとするのか知ら、些と怪しからんと思ふうちに、汽車が大森驛へ入つた時です。白襯衣君が、肩を聳やかして突立つて、窓から半身を乗出したと思ふと、眞赤な洋傘が一本、矢のやうに窓からスポリと飛込んだ。白襯衣君がパツとつけて、血の點滴るばかりに腕へ留めて抱きましたが、色の道には、あの、スパルタの勇士の趣がありましたよ。汽車がまだ留らない間の早業でしてなあ。」

俊之君は、吻と一息を吐いて言つた。

「敏捷い事……忽ち雪崩れ込む乗客の眞前に大手を振つて、ふはくくと入つて来たのは、巾着ひだの青い帽子を仰向けに被つた、膝切の洋服扮装の女で、腕に南京玉のピカ／＼したオペラバツクと云ふ奴を釣つて、溢出しさうな乳を壓へて、其の片手を——振るのではない、洋傘を投げたはずみがついて、惰力が留まらなかつたものと考へられます。お定りの、もう何うにも成らないと云つた大なる尻をどしんと置くのだが、扱ひつけて居ると見えて、輕妙に、ポンと、其の大なる浮袋で、クシヨンへ叩きつけると、赤い洋傘が股へ挟まつたやうに捌ける、そいつを一蹴けつて黄色な靴足袋を膝でよぢつて兩脚を重ねるのをキツカケに、ゴム靴の爪さきと、洋傘の柄をつゝく手がトン／＼と刻んで動く、と一所に、片腕を白襯衣の肩へ掛けて、圓々しい顔を頬杖で凭せかけて、何と、危く乳首だけ兩方へかくれた、一面に寛げた胸をつふ／＼と揺つて、(お、辛度)と故とらしい京辯で甘つたれて、それから饒舌る。のべつに饒舌る……黄色い齒の上下に動くのと、猪首を巾着帽子の縁で突くのと同時なんです。」

甲 乙

二の腕から、頸は勿論、胸の下までべた塗の白粉で、大切な女の膚を、厚化粧で見せてくれる。……それだけでも感謝しなければ成りません。剩へ貴い血まで見せた、その貴下、いきれを吹きさうな鳩尾のむき出た處に、ぼち／＼と蚤のくつた痕がある。

——川崎を越す時分には、だらりと、むく毛の生えた頸を垂れて、白襦衣君の肩へ眉毛まで押つけて、坐睡をはじめたのですが、俯向けぢやあ寝勝手が悪いと見えて、ぐ／＼首を揺るうち、男の肩へ、斜に仰向け状にぐたりと成つた。何うも始末に悪いのは、高く崩れる裾ですが、よくしたもので、現に、その蚤の痕を／＼引掻く次手に、膝を擦り合はせては、ポカリと他人の目の前へ靴の底を蹴上げるのです。

男の方は、その重量で、窓際へ推曲められて、身體を弓形に堪へて納まつて居る。はじめは肩を抱込んで、手を女の背中へまはして居ました。……膚いきれと、よつか／＼りの天鵝絨で、長くは暑さに堪りますまい。やがて、魚を仰向けにしたやうな、ぶくりとした下腹の上で涼ませながら、汽車の動搖に調子を取つて口笛です。

娑婆は此のくらゐにして送りたい、羨しいの何のと申して。

私は目の遣場に困りました。往來の通も、ぎつしり詰つて、まるで隙間がないのです。現に私の頭の上には、緋手絡の大圓鬘が押被さつて、此の奥さんもそろ／＼中腰に成つて、坐睡をはじめ

めたのです。こくり／＼と遣るのに耳へも頬へもばら／＼とおくれ毛が掛つて来る。……鬘のおくれ毛が掛るのを、とや角言つては罰の當つた話ですが、何うも小唄や小本にあるやうに、此がヒヤリと参りません。べと／＼と汗ばんで、一條かゝると濛とします。たゞし、色白で一才、きれいな奥さんでしたが、えらい子持だ。中を隔てられて、むかうに、海軍帽子の小兒を二人抱いて押されて居る、脊のひよろりとしたのが主人らしい。其の旦那の分と、奥さん自身のと、——私は所在なさに、勘定をしましたが、小兒の分を合はせて洋傘九本は……何うです。

さあ、事、に及んで、——現實の密度が濃く成つては、圓鬘と銀杏返の夢の姿などは、餘りに影が薄すぎる。……消えて幽霊に成つて了つたかも知れません。

(清涼薬……)

と、むかうで、一寸噪いだ、お轉婆らしい、その銀杏返の聲がすると、ちらりと瞳が動く時、顔が半分無理に覗いて、フンと口許で笑ひながら、恚う手が、よつか／＼を越して、姉の圓鬘の横へ傳つて、白く下りると、其の紙づつみを姉が受けて、子持の奥さんの肩の上から。

(清涼薬ですつて。……嘸ぞお暑い事です。……)

と、腹の上で揺れてる手を流眈に見て、身を引きました。

私は苦笑をしながら、つひぞ食べつけない、レモン入りの砂糖を舐めました。——如何、此の

動作で、其の二人の婦が漸と影を顯はし得た氣がなさりはしませんか。

時に、おなじく其の赤い蝙蝠——の比翼の形を目と鼻の前にしながら、私と隣合つた年配の紳士は、世に恐らく達人と云つて可い、いや、聖人と言ひたいほどで。——何故と云ふと、此の紳士は大森を出てから、つがひの蝙蝠が鎌倉で、赤い翼を伸して下りた時まで、眠り續けて睡つて居ました。……

眞個に寝て居たのかと思ふと、然うではありません。つがひが飛んだのを見ると、明に眼を活かして、棚のパナマ帽を取つて、フツと埃を窓の外へ弾きながら、

(御窮屈でございましたらう……御迷惑で。)

澄まして挨拶をされて、吃驚して、

(いや。どう仕りました。)

と面くらふ隙に、杖を脇挟んで悠然と下車しましたから。]

俊之君は、こゝで更に居坐を直して續けた。……

五

「お話のいたしやうで、何うお取りに成つたか知れないのでありますが、私は紳士に敬意を表す

るとともに、赤い蝙蝠にも、年兒の奥さんにも感謝します。決して敵意は持ちません。そのいづれの感化であつたかは自分にも分りません。が、とに角、其の晩、二人の婦と、一ツ蚊帳に……成りたけ離れて寝ましたから。

——さあ、何時頃だつたでせう——二度めに、ふと寝苦しい暑さから、汗もねばくとして目の覺めましたのは。——夜中も、其の沈み切つた底だつたと思ひます。うつ／＼しながら糠に咽せるやうに鬱陶しい、羽蟲と蚊の聲が陰に籠つて、大蚊帳の上から壓附けるやうで息苦しい。

蚊帳は廣い、大いのです。廻縁の角座敷の十五疊一杯に釣つて、四五ヶ所釣を取つてまだずり——と中だるみがして、三つ敷いた床の上へ蔽ひかゝつて、縁へ裾が溢れて居る。私には珍しいほどの殆ど諸侯道具で。……餘り世間では知りませんが、旅宿が江戸時代からの舊家だと聞いて來たし、名所だし、料理旅籠だしますから、いづれ由緒あるものと思はれる、従つて古いのです。其の上、一面に嬰兒の掌ほどの穴だらけで、干潟の蟹の巢のやうに、たゞ一側だけにも五、十破れがあるのです。勿論一々繼を當てた。……古麻に濃淡が出來て、恚う隣をするばかり無數に取巻く。……此の大痘痕の化ものの顔が一つ天井から拔出したと成ると、可恐さのために一里減びよと言つたありさまなんです。——こゝで一寸念のために申しますが、此の旅籠屋も、昨年乙の震災を免れなかつたのに、然も一棟焚けて、人死さへ二三人あつたのです——蚊帳は火の粉

を被つたか、また、山を荒して、畑に及ぶと云ふ野鼠が群り襲ひ、當時、壁も襖も防ぎやうのなかつた屋のうちへ押入つて、散々に喰散らしたのかとも思はれる。

女中が二人で、宵に此の蚊帳を釣つた時、

(まあ。)

と浮りしたやうに姉が云ふと、

(お氣の毒だわね。)

と思はず妹も。……此の兩方だつて、おなじく手拭浴衣一枚で、生命を助つて、此の蚊帳を板にした同然な、節穴と隙間だらけのバラックに住んで居るのに、それでさへ然う言つた。

——實は、海岸も大分片よつた處ですから、唯聞いたばかり、繪で見ただけで様子を知らない。——宿が潰れた上、焚けて人死があつた事は、途中自動車の運轉手に聞いて、はじめて知つたのです。

(——それは少し心配だな。)

二人の婦も、黙つて顔を見合せました。

可恐しい崖崩れが其のまゝに成つて居て、自動車が大揺れに煽つた處で。……また其がために

様子を聞きたくもなつたのでした。

運轉手は悍馬を乗鎮めるが如くに腰を切つて、昂然として、

(来る……九月一日、十一時五十八分までは大丈夫請合ひます。)

と笑つて言つた。——(八月十日頃の事ですが)——

畜生、巫山戯て居る。私は……一昨々年——家内をなくしたのでございませすが、連がそれだつたら恠う云ふ蔑めた口は利きますまい。いや、此に對しても、いまさら他の家へとも言ひたくなし、尤も其家をよしては、今頃間貸をする農家ぐらなるものでせうから。

(構はない、九月一日まで逗留だ。)

と擬勢を示した。自動車は次第に動搖が烈しく成つて乗込みました。入江に渡した村はづれの土橋などは危なかしいものでした。

場所は逗子から葉山を通つて秋谷、立石へ行く間の浦なんです。が、思つたとは大變な相違で、第一土橋と云ふ、其の土橋の下にまるで水がありません。……約束では、海の波が靜に此の下を通つて、志した水戸屋と云ふの庭へ、大な池に流れて、縁前をすぐに漁船が漕ぐ。蘆が青簾の筈なんです。處が、孰方を向いても一面の泥田、沼ともいはず底が浅い。溝をたきつけた同然に炎天に湧いたのが汐で焼けて、がさくして、焦げて居ます。……あの遠くの雲が海知らん

と思ふばかりです。干潟と云ふより亡びた沼です。氣の利いた蛙なんか疾くに引越して、のたり、のたりと蚯蚓が雨乞に出さうな汐筋の窪地を、列を造つて船蟲が這まはる……その上を、羽蟲の大群が、隨處に固つて濛々と、舞つて居るのが炎天に火藥の煙のやうに見えました。

半ばひしやげたまゝの藤棚の方から、すく／＼と此の屋臺を起して支へた、突支棒の丸太越に、三人廣縁に立つて三方に、此の干からびた大沼を見た時は、何だか焼原の東京が戀しく成つた。贅澤だとお叱んなさい。私たちは海へ涼みに出掛けたのです。

(海には汐の満干があるよ、いまに汐がさすと一面の水に成る。)

折角、樂みにして、嬉しがつて來た女連に、氣の毒らしくつて、私が言譯らしく然う言ひますと、

(嗚ぞようござんせうねお月夜だつたら。)

姉の言つた事は穩ですか。

些と跳ねものの妹のお聞きなさい。

(雪が降るとい、景色だわね。)

眞實の事……此は決して皮肉でも何でもありません。成程こゝへ雪が降れば、雪舟が炭團を描いたやうに成りませう。

それも、まだ座敷が極つたと言ふのではなかつたので……この座敷には、蜜柑の皮だの、キヤラメルの箱だのが散ばつて、小兒づれの客が、三崎へ行く途中、晝食でもして行つた跡を其のまゝらしい。障子はもとより開放してありました。古襖がたてつけの悪いまゝで、其の繪の寒山拾得が、私たちを指して囁き合つて居る體で、おまけに、手から拔出した同然に箆が一本立掛けてあります。

申戲にも、此ぢや居た、まらないわけなんです、些とも氣に成らなかつたのは、——先刻廣い、冠木門を入つた時——前庭を見越したむかうの縁で、手をついた優しい婦を見たためです。……すぐ其の縁には、山林局の見廻りでもあらうかと思ふ官吏風の洋装したのが、高い杳脱石を踏んで腰を掛けて、盆にビール罎を乗せて居ました。また此の形は、水戸屋がむかしの茶屋旅籠のまゝらしくて面白し……で、玄關とも言はず、迎へられたまゝ、其の傍から、すぐ縁側へ通つたのですが、優しい婦が、客を嬉しさうに見て、

(お暑うございませう、まあ、ようこそ、——一寸お休み遊ばして。)

と、すぐ其の障子の影へ入れる、とすぐ靴の紐を纏つて居た洋装のが、ガチリと釣錢を衣兜へ摺込んで、がつしりした洋傘を置いて出て行く。……いまの婦は門外まで、それを送ると、入違ひに女中が、端近へ茶盆を持って出て、座蒲團をと云つた工合で……うしろに古物の衝立が立

つて、山鳥の剝製が覗いて居る。——處へ、三人茶盆を中にして坐つた様子は、いまに本堂で、志す精靈の讀經が始りさうで何とも以て陰氣な處へ、じとじと汗に成るから堪りません……そこで、掃除の濟まない座敷を、のそくして、——右の廻縁へ立つた始末で……慥う鹽辛い、大沼を覗めるうちに、山下の向う岸に、泥を食つて沈んだ小船の、舷がさゝらに成つて、鯉ならまだしも、朝日奈が取組合つた鰐の頭かと思ふのを見つけたのも悲惨です。

山出しの女中が来て、何うぞお二階へ、——助かつた、こゝで翌朝まで辛抱するのかと斷念めて居たのに。——いや、階子段は、いま来た三崎街道よりづつと廣い、見事なものです。三人撒いたやうに、ふらくと上ると、上り口のまた廣々とした板敷を、縁側へ廻る處で、白地の手拭の姉さんかぶりで、高箒を片手に襷がけで、刻足に出て行違つたのが其の優しい婦で、一寸手拭を取つて會釋しながら、軽くすり抜けてトン／＼と、堅い段を下りて行くのが、あわたしい中にも、如何にも淑かで聲音が柔うございました。

何とも容子のいゝ、何處かさみしいが、目鼻立のきり、とした、帯腰がしまつて居て、そして媚かしい、なり恰好は女中らしいが、すてきな年増だ。二十六七か、と思つたのが——此の水戸屋の娘分——お由紀さんと言ふのだとあとで分りました。

——また、奇異なものを見ました——

貴下には、矢張り唐突に聞えませうが、私には度々の事だ。……何かと申すと——例の怪しい二人の婦の姿です。——私が湯から上りますと、二人は最う持參の浴衣に着換へて居て、お定りの伊達巻で、湯殿へ下ります、一人が市松で一人が獨鈷……それも可い、……姉の方の脱いだ明石が、沖合の白波に向いた欄干に、梁から衣紋竹で釣つて掛けてさぼしてある。裙にかくして、薄い紫のぼかしに成つた蹴出しのあるのが、すらく／＼捌くやうに、海から吹く風にそよいで居ました。——午後二時さがりだつたと思ひます。真日中で、土橋にも濱道にも、一人通りませんでした。——さすがに少し風が吹きました。汗が引いてスツと涼しい。——と其の蹴出しの下に脱いで揃へた白足袋が、蓮……蓮には濟まないが、思ふまゝ言はして下さい。……白蓮華の蒼のやうに見えるました。同時に、横の襖に、それは欄間に釣つて掛けた、妹の方の明石の下に、また一絞りにして朱鷺色の錦紗のあるのが一輪の薄紅い蓮華に見えます。——東京驛を出て、汽車で赤鯛堀に襲はれた、のち此の時まで、(あゝ、涼しい。)と思へたのは、自動車で来る途中、山谷戸の、路傍に蓮田があつて、白いのが二三輪、早にも露を含んで、紅蓮が一輪、むかうに交つて咲いたのを見た時ばかりであつたからです。

乙 甲

また涼しい風が颯と來ました。羅は風よりも軽い……姉の明石が、竹を迂ると、さらりと落ち